

堺利彦著

半生の墓

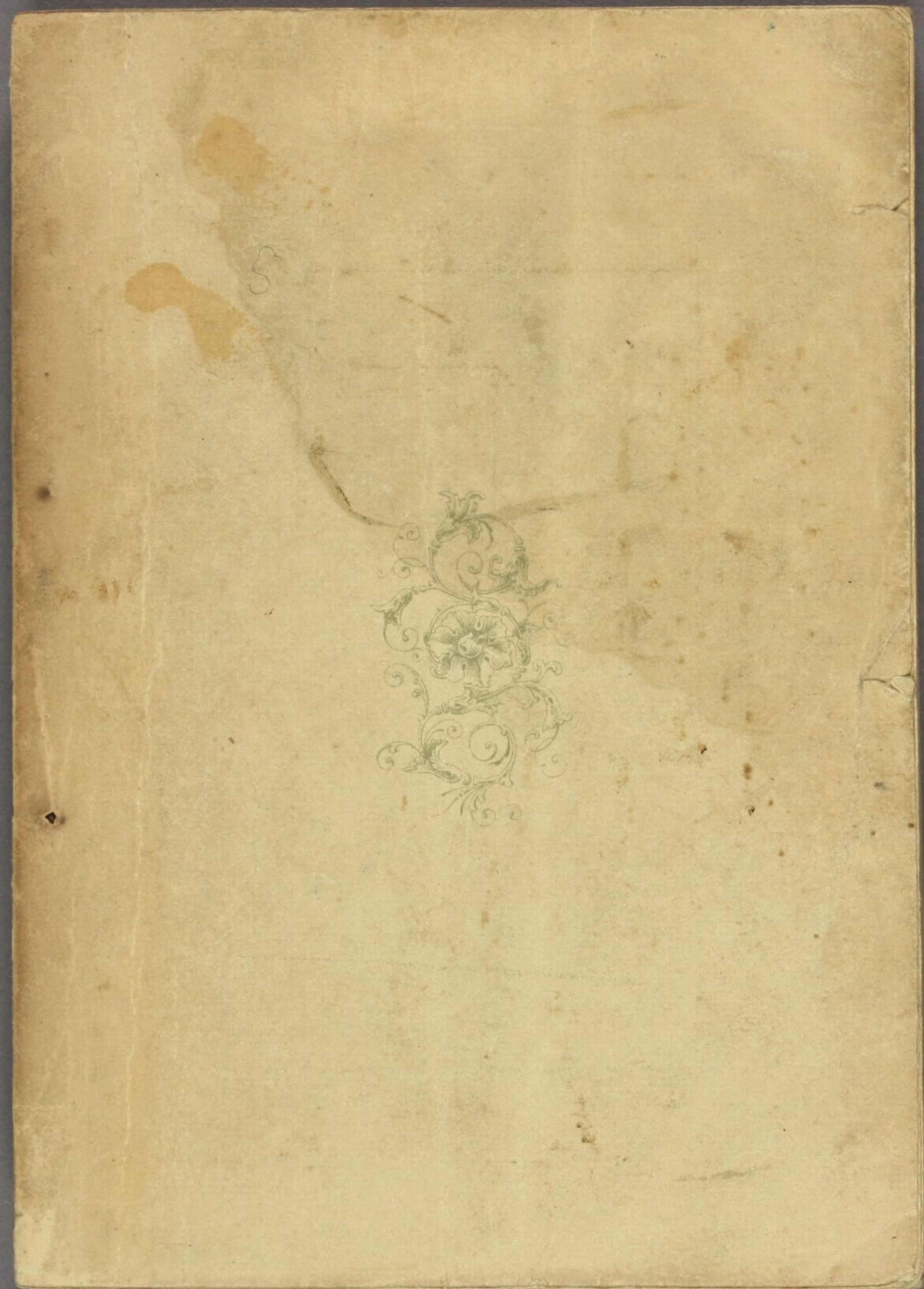


花



半生の墓

堀利彦著



半生の墓

堺利彦著

平民書房發行

明治三十八年八月十八日

亡妻美知子一週忌の紀念として此の書を發行す。
此の書は予の半生の墓にして又美知子の墓なり。
予は石の墓を作らずして、茲に此の紙の墓を作る。

平民社に於て

堺利彦

半生の墓目次

哀史梗概

(ユーゴー著、レ・ミゼラブルの第一章)

一

不知所往列傳

六九

馬渡甲子郎

六九

寺家村百太郎

八一

古賀狂生

九一

藤 權兵衛

九八

貝塚十平

一〇四

僕にもオバアさんが欲しい(短篇小説、反譯)

……

文 8
NO
8, 24

小供の導き(短篇小説、反譯)……………一二七

細君の説法(カーテン、レクチユア抄譯)……………一四一

敵(兵隊となれる露國農民の話)……………一六五

一人の要する土地幾許(トルストイ)……………一七五

別莊拜見の紀……………一九三

獄中生活……………一九九

風流乞食(欠伸居士作)……………二四九

欠伸居士の俳句と歌……………二五四

永久の満月(短篇小説)……………二五九

予の半生(自傳)……………二九五

半生の墓 山本

堺 利彦 著

哀史梗概

(ユーゴー著、レ・ミゼラブル第一章)

予今哀史の梗概を諸君に紹介するに當り、先づ著者が自ら巻首に識せる序文を紹介せざる可らず。序文簡短なりと雖も能く哀史全篇の意義目的を説き盡せり。曰く。

文明の表面には人為の地獄あり、人は種々の災害厄難の爲に天賦の命數を完うすること能はず、斯の如き社會的刑罰の存在する間は、斯の如き書も亦無用に非ざるべし。貧より來る男子の屈辱、饑餓よ

出いたし、水の中をも歩行いたし、如何なる危難をも心にかけて申さず、去年は盜賊の巢と申すほどなる地方へ只獨にて説教に參られ候、私も始のほどは彼是と氣遣ひて諫めも致し候ひしが、只今にては兄の爲すがまゝに打任せ、私は只祈禱を致して眠る事に御座候。

僧正曾て善男善女に説教すらく。

吾が兄弟よ、吾が友よ、此佛蘭西に僅に二つの窓と一つの戸口とを有てる百三十萬の農民の小屋あり、僅に一つの窓と一つの戸口とを有てるもの百八十萬あり、又僅に戸口のみを有ちて窓を有たざるもの三萬五千あり。是れ窓及戸に課する税あるが爲めなり。斯く哀なる一家に老いたる女共、小き子供の住みてあれば、熱病疫病も多きなり。嗚呼神は光を人間に與へたまふに法律は之を賣るなり。

吾は法律を譏るにあらねど只神の恵を謝するなり。

僧正又曾て論すらく。婦人、小兒、下僕、貧人、無學者などの過誤は、夫、親、富者、賢者などの過誤なり。人の心を暗黒の中に置く時は罪惡はをのづから犯さるゝなり。さる場合に於て眞に罪を負ふべきは罪を犯せる其人にあらずして暗黒を作れる人に在り。

暗黒とは道義人情の光明の達せざる所を謂ふなり。是れ僧正の主義にして僧正が滿腹の同情を寄する所なり。僧正曾て罪人の死刑に處せらるゝを見て痛憤に堪へず、獨語して曰へらく。生死の權は只神のみに屬す。人如何の權ありてか此不可思議物に觸れんとはすると。僧正其家の戸を鎖さるるに就ては曰く、醫師の戸は決して鎖す可らず。牧師の戸は常に開かざる可らず。吾も亦醫師にあらずや。吾も亦患者を

有す。醫師の患者は病人にして吾が患者は不仕合者なりと。見るべし、僧正美里流が常に權勢威力の敵にして弱者敗者の友なることを。

予は猶此に僧正に關する一二の逸話を擧げて僧正が同情の無限なるを證せん。或朝僧正後園を散歩する時、急に其歩を止めて地上の一物を見つめたり。开は黒き太き毛深き恐ろしげなる蜘蛛なりけり。『あはれなる物よ、渠が罪にはあらざるに』と僧正は獨語しぬ。蜘蛛は其形體の醜なるが爲に人に嫌惡せらる。然れども是れ蜘蛛の罪にはあらざる也。僧正又一日、途に當れる一疋の蟻を踏まざらんが爲めに、其歩を轉せんと欲して其足を挫きたりとぞ。

僧正の人物行狀凡そ此の如し。次回以下に於て、僧正が如何に暗黒なる頭腦に一道の光明を與へたるかを見ん。

(二) 犬にだも如かず

千八百十五年十月初旬或日の暮方、傳井町に入り來れる一旅客あり。年は四十六七にして倔強なる體格なれど、如何にもみすぼらしき姿にて、日にやけ汗にぬれ、背には革囊一つを負ひ、手には節くれたる杖を突き、髪はもつれ髯は長く、股引の片膝は白く片膝は穴あきたるが、素足に破靴はきて歩むなり。警察署に立寄りて旅行券を示し、許を得て宿屋に入りぬ。

旅客は財布を主人に示して宿を求む。主人は心よく之を諾す。食物を求むれば直にと答ふ。再び之を急げば今直にと答ふ。三たび之を急ぐ時、出で行きし小供の歸り來て主人に何事か歸くと共に、主人は旅

客を止宿せしめ得ずといふ。旅客立上りて何故にと問へば、室なしと答ふ。厩にても可しと曰へば、厩には馬充ちたりと曰ふ。されど吾は饑ゑて死なんとせるものと曰へば、食ふべき物なしと曰ふ。旅客は更に坐して、此處は宿屋なり吾は宿るべしと曰へば、主人急に旅客の耳に近よりて、荒らかに『去れよ』と叫ぶ。主人は猶語を續けて『汝の名は我巴爾戎といふなるべし。汝の何者なるかは今警察より聞きて我能く知れり。去れよ』と曰ふ。旅客は首を垂れ革囊を携へて出で行きぬ。旅客は更に小き宿屋を尋ねて行きぬ。此處にても亦断られぬ。嗚呼此處にも知れたるかと旅客が曰へば、固よりと曰ふ。旅客は又杖と革囊とを携へて去りぬ。

旅客は終に牢屋の前に來りて『今宵吾を此處に止め呉れずや』と門番

に問ふ。門番曰く、監獄は宿屋に非ず、此處に入りたくば捕縛せられて來るべしと。

旅客は又燈の漏るゝ窓を見つけて窺き見るに、夫婦して幼兒をあやし居り、父と子とは打わらひ母はそれを見て打ゑみたり。此樂しき家の若しや惠ぶかいらんかと、戸を叩きて宿を乞へば、主人の男出て來て誰ぞと曰ふ。二十里の路を歩み來て疲れたる者と曰へば、主人熟視して『ウム、此奴よな』と曰ひて『去れよ』と呵る。『せめては一杯の水を』と旅客が曰へば、『鐵砲玉でも食はずべし』と主人は荒らかに窓を鎖しぬ。

旅客饑寒交々至れど、饑を醫さん望は全く無く、せめて寒を凌がんとて、或園に忍び入り、見つけだしたる小屋を幸ひ、それに入りて横

はりぬ。下には藁ありて心地よき寢床なりしが、忽ちにして怖ろしき犬に吠ゑたてられぬ。小屋は犬小屋なりしなり。旅客は又迷ひ出で、嘆聲を漏らしぬ。吾は犬にだも如かずと。

旅客は終に町を出で、野に入りしが、空暗く森黒く、天地も吾が敵の如く見えしかば、スゴくと引返しぬ。疲れはてたる身の今は何を望まん由もなく、道の邊の石を枕に横はりぬ。

恰も此時、老いたる女一人寺の方より歩み來て「君は其處に何したまふ」と問ふ。「御覽の如く此處に寢るなり」と旅客は腹立たしげに答ふ。「此處に寢るとや」と老いたる女が曰へば、「十九年があいだ板の間に寢たる者なるが、今宵は終に石の上に寢るなり」と曰ふ。「何故に宿屋には行きたまはぬ。」「金なければなり。」「嘸や寒からん。金なしとて

一夜の宿を恵む者もあるべきに。」「其處此處に頼みたれど、誰も彼も皆吾をば追出したたり。』

老いたる女は寺に隣れる小き家を指さして「彼の家の戸を叩きたまひしか。」「否。」「さらば彼の戸を叩きたまへ。』

(三) 戎巴爾戎

今宵怪しき男傳井町に入り來れりと、僧正の妹バプチスチンが傳へ聞きて、表の戸に錠を附くべき事を頻に僧正に説き居る折しも、烈しく此家の戸を叩く者あり。僧正は例の如く「入りたまへ」と曰ふ。入り來たるは背に革囊を負ひ手に杖を持ちたる恐ろしげなる男なり。僧

正に打向ひて『吾は戎巴爾戎といふ者なり。十九個年間牢に入りて四日以前に放免せられし者なり。今日二十里の道を歩み來りて宿を求めむるに、吾が旅行券の黄色なるが爲め何處にても『去れよ』といふ。牢屋にも往きしが門番は吾を容れず。終に大小屋に入りて犬に噛まれたり。星を戴いて野に寝んと思ひしが空くもりて星もなし。雨を氣遣ひて町に返り軒下の石の上に寝たりしに、老いたる女來あはせて此家の戸を叩きたまへと致へ呉れたり。此處は宿屋なりや。吾は金を持てり。十九年間の牢屋の働きて五十兩の金を獲たり。君は吾を宿らせ呉るべきかといふ。

食事の用意して此人に與へよと僧正が妹に沙汰する時、此男驚きて『待ちたまへ。君は吾が言葉を解したまひしか。吾は牢屋より出で來れる者なり。見たまへ吾が旅行券は黄色なり。満期放免者、強盜犯にて五年、破獄の爲に十四年、合せて十九年刑の罪人、甚だ危険也』と記されたるを見たまへ。是ゆゑに吾は何處にても追出されたり。君は眞に吾を宿らせくるべきか。

僧正は又、寢床の用意せよと妹に沙汰して、此男に打向ひ『客人、先づ火の側に坐りたまへ。食事も程なく調ふべし、食事する中には寢床も調ふべし。』

戎巴爾戎此に於て驚喜交々至り殆ど狂せんとす。又彼の『去れよ』の一語を聞かんことを覺悟し、初より身上を語り明せしに、何ぞ料らん、晚餐を與へられ寢床を供せられんとは。況んや『客人』と呼ばるゝに於てをや。主人の僧たるを聞いて戎巴爾戎嗟嘆して曰ふやう『貴き僧よ。』

君は吾を賤みたまはず。嗚呼僧は貴きものなるかな。』
 僧正が親しげなる聲にて客人と呼ぶ毎に、我巴爾戎の顔は輝きぬ。
 嬉しきも道理なり。賤しき人に鄭寧なる言葉を聞かするは、渴せる者
 に水一杯を與へたるにも似たるべし。

我巴爾戎が頻に感謝するを見て、僧正は曰ひけらく。『此處は我が家
 にあらずして神の家なり。吾が此家に眠るが如く君も此家に眠るべし。
 此家に在る物は皆君の物なり。遠慮すること勿れ』。我巴爾戎いよく
 驚く。

斯くて僧正は此客人と相並びて食事を取り、食事終りて此客人を寢
 室に案内し『朝日の朝は、君が發足の前に、暖かき牛乳一碗を進すべ
 し』といふ。我巴爾戎は僧正の顔を見つめて『吾は人を殺さんも知れ

ぬ男なるに、危しとも思ひたまはぬか』といふ。僧正は靜に之に答へ
 て『左様の事は神の守りたまふに任するなり』といふ。我巴爾戎は疲れ
 たる脚を踏みのべて十九年振に寢床の上に眠りぬ。僧正は此男の爲に
 祈禱をなして眠りぬ。

(四) 彼は曾て笑はざりき

夜半過ぎて我巴爾戎眼覺めぬ。

我巴爾戎は固貧人の子なりき。讀み書く事も知らざりき。若くして
 父母を失ひ、姉の許に養はれたりき。其姉が夫を失ひて八歳を頭に七
 人の子を残されし時、我巴爾戎は廿五歳なりき。されば其後彼は姉の夫
 に代りて姉と七人の子とを養ひたりし也。彼に情婦ありしとも聞かず、

戀に心を寄する暇も無かりし也。彼も姉も一心に働きしかど、七人と
いふ子を如何にすべきぞ。或冬彼は職を失ひて眞に饑に迫りぬ。饑に
迫りて七人の子ある也。或夜、麴屋の主人、店の窓硝子破れて人の手
の突入れらるゝを見たり。其手は麴一片を掴み出だしぬ。主人乃ち駈
出で、其人を引捕へぬ。是れ戎巴爾戎なりき。彼此に於て懲役五箇年
を宣告せられたりき。

彼牢に入りてよりは既に戎巴爾戎といふ人にあらず、只二萬四千六
百一番といふ者なりき。姉は如何にせし、七人の子は如何にせし。若
き木の幹の切付されたる時、一握ばかりの其木の葉は果して如何にな
るべきぞ。

四年目の終の頃、彼は隙を得て牢を逃れしが、二日間野山をさまよ

ひて又捕へられき。其間彼は一睡をも爲さず一食をも取らざりしなり。
是に依りて刑期三年を増されぬ。即ち八年也。六年目に又逃走の機會
を得たれども又直ちに發覺し、捕縛せらるゝ時抵抗したるに依り、更
に刑期五年を増されぬ。即ち十三年也。十年目に至りて又復逃走し又
復捕へられ、更に又三年を増されぬ。即ち十六年也。十三年目又復試
みて又復失敗、此時彼が潜伏せしこと僅に四時間、而して此四時間に
對して又三年。麴一塊を盗みしより十九年、此に至りて放免せられし
なり。

彼は固より無學なりけれど本來の性は善なりき。牢に入りてより、
盜を爲したる事の甚だ悪しくして甚だ愚なるを思へり。憐を乞はゞ只
與へられたらんも知れざりしものを、盗みたるは悪しかりき。寧ろ其

を待つべかりしなり。さなくば仕事のあるを忍んで待つべかりしなり。饑ゑたる時には待つこと能はずと云はゞ云ふべけれど、饑ゑたりとて人は一日二日にて死するものにあらず、幸か不幸か人は饑ゑて死するまでは、甚だしき苦痛煩悶を感じながら、猶長き日數生き居るものなり。詮ずる所、彼は忍んで待つべかりしなり。子供の爲にも其方却つて善かりしなり。盜を爲して哀なる境遇を逃れんと欲せしは愚なる事にして且惡しき事なりき。

彼は斯く殊勝に考へながら又一方には疑ひを起しぬ。仕事だにあらば吾は盜も爲さざりしならん。労働者に仕事を與へざる社會は罪なきか。吾は社會を犯して盜を爲したれど、社會は吾を捕へて斯くの如く殘酷に苦むるにあらずや。斯くて彼は、己の罪を認むると共に又社會

の罪を思はざることを能はざりき。而して社會が己に對する罪は己の社會に對する罪よりも大なることを思へり。

凡そ人自ら暴を加へられたりと感ずる時は、其根底に於て必ず何等か正當の理由存せるものなり。戎巴爾戎は實に暴を加へられたりと感せし也。斯くて彼は己を虐待する社會の半面をのみ觀たり。斯くて彼は己を打撃する人をのみ觀たり。父母去てより姉去てより以來、彼は曾て人間親愛の情に接せざりき。斯くて彼は此社會の戰場たるを覺り、己は其敗北者たるを信じたり。彼の武器は只人間に對する憎惡のみ。而して彼は獄中に於て其憎惡の武器を銳利ならしめたり。

獄中に學校あり、彼は四十にして文字を學びぬ。而して智識の増すに従ひ彼の憎惡は一層に高まりぬ。十九年の苦役の間、光は一方より

入り闖は他方より生せり。一方に於て文字を知り智識を得ると共に他方に於ては漸々人をして猛獸に近かしむ。夫の逃走の如きは、固より其逃れあふせ得べきを信じてにはあらず。然れども機會あれば輒ち之を試む。恰も狼が其檻の戸の開けるを見たと同一なり。只自由を欲する本來の性のまゝに逃れ出づる也。再び捕へられて酷遇を受くれば却て一層の猛氣を加ふるのみ。是れ法律が人性に及す一種奇異の影響也。されば我巴爾戎の膂力は驚くべきまでに發育し、殆んど五人分の力ありと稱せられき。常に鳥を羨みて己の翼なきを悲み、日々逃走の策を講じたる結果は、終に彼をして容易に石垣を攀ぢしめ、殆んど足場なき高塀に登らしむるに至れり。

實に我巴爾戎が心には此世に太陽なく春日なく、只薄暗き光の窓上

り入り來るのみ、斯くの如くして彼が養ひ得たるものは只人間社會に對する憎惡のみ。彼は機會だにあらば人間を傷け社會を毀たんと欲する也。されば彼が付與せられたる黄色の旅行券に『甚だ危険也』と記されたるも亦止を得ざる也。十九年の間、彼は曾て笑はざりき。而して牢を出る時、彼は既に一滴の涙を有せざりき。

(五) 我は君の心を買はんとす

夜半過ぎて我巴爾戎眼さめぬ。寢床のあまりに柔かなりければなるべし。一たび眼さめては様々のこと心に浮びて二たび眠ること能はず、古き獄中の事と新しき今宵の事と、混亂綜錯して湧きかへるが如くなりしが、忽ち食卓の上にあらし銀の皿に思ひ至りて、悉く他の感想を

排し去り、只管之を獲んと欲するの念を起しぬ。かの皿六枚、數十圓の値あるべし。吾が十九年の苦役中に儲け得し額に當るの値あるべし。而して其皿は數歩の間に在り。彼は終に是を盗まんと決心しつ。此皿は僧正が善き客を接待する時にのみ用ゐる家具なり。彼が終に意を決して僧正の室に忍び入りし時、満月の光窓より入りて此善き老人の寝顔を照し、寝顔の表には靜なる微笑を湛へて殆んど光明のさしたるが如し。流石に戎巴爾戎も此輝ける姿に怖をなせしが、猶終に六枚の皿を盗み取りて後園に走り出で、塀を乗越えて逃げらせたり。

翌朝、妹バプチスチンが彼の男の姿見えすして而も皿の盗まれたる由を僧正に訴ふる時、僧正は園に在りて、塀の下に踏み付されたる草花を起しながら、「かの皿も元は我等の所有にては無かりしにあらす

や。固是れ貧人の物なり。昨宵の人も貧人にあらずや」と曰ひて妹を齒がゆがらせぬ。

此時表の戸を叩く者あり。僧正例の「入りたまへ」と曰ふ。入り來たるは巡查なり。巡查の後に率ゐられたるは即ち戎巴爾戎なり。僧正訂見て「オ、君よな。能くこそ。君には銀の燭臺をも與へたりしに、何故皿と共に持ち行かざりしぞ」戎巴爾戎は只眼を開きて僧正を見つむるのみ。「此奴の申立てしこと眞なりしか。怪しき奴ゆゑ引捕へたれど、然らば許す」とて巡查は立去りぬ。

戎巴爾戎は何とも辨へねど、出して與へらるゝがまゝ、打震へながら燭臺を受取りぬ、僧正曰ひけらく。「我友よ、靜に行け。若し二たび來らば園よりせずして表の戸より來れ。表の戸は常に容易に開かるべ

此のときをもとめ、

し。僧正又曰ひけらく『此銀を以て善人となれ。我巴爾戎よ、我友よ、君は既に悪人にあらずして善人なり。我は君の心を買はんとするなり』
 戎巴爾戎は僧正を辭し町を出て野中の路に入り、石に腰かけて思ひ
 めぐらす。彼は一物をも食はざれど饑を感じせず。彼が胸中は煩悶に堪
 へざる也。彼は今、過去二十年間仇敵と爲したりし人間の情に屈せざ
 るを得ざるに至れり。彼は寧ろ巡査に捕へらるゝを以て苦痛少しとせ
 るなり。

此時、此處に來かゝれる里の子あり。銀貨一つを手を持ちて、宙に
 投げては手に受止め、歌うたひつゝ、面白げに歩みしが、戎巴爾戎の前に
 來し時、又投げあげたる銀貨を受損じ、銀貨はコロコロと地上に轉じ、
 恰も戎巴爾戎の足下に止りぬ。戎巴爾戎は之を踏まへつ。

里の子は其を呉れよと曰ふ。戎巴爾戎答へず。里の子は其を取らん
 とす。戎巴爾戎足を動かさず。里の子は強いて其を取らんとす。戎巴
 爾戎之を叱咤す。里の子は大に恐れて泣いて逃げ去る。

里の子は既に見えず、太陽は既に没しぬ。忽然として戎巴爾戎は夕
 暮の寒氣を感じぬ。其足を動かして銀貨の燦然たるを見し時、覺えず
 自ら愕然たり。急に其を拾ひて四方を見まはす様、追はれたる鹿が隠
 場を探しながら打震へて立てるに似たり。彼は突然里の子の走りし方
 に向ひて走りぬ。ゲルビス、ゲルビス、と里の子の名を呼びぬ。然れ
 ども答ふる者なし。たましく騎馬の僧の來れるを見て、里の子を知ら
 ずやと問ふ。僧は知らずと云ふ。『吾を捕縛せよ。吾は盗人なり』と戎
 巴爾戎は突然に叫びぬ。騎馬の僧は只驚きて駈け去りぬ。

彼は猶、ゲルビス、ゲルビスと呼べど答なし。『嗚呼吾は何たる悪人ぞ』と、我巴爾我終に泣伏しぬ。是れ十九年來はじめての涙也。

我巴爾我が心には、『此銀を以て善人となれ』君は既に悪人にあらずして善人なり。『吾は君の心を買はんとするなり』などの言葉、練りかへし巻きかへし浮び來りて、苦痛煩悶限なかりしなり。彼は此難有き言葉にも反抗せんと試みたり。若し之に服従せば、多年養ひ來りたる人間憎惡の吾が心を如何にすべき。彼は實に此憎惡を以て自ら満足したりし也。然るを今は憎惡反抗すべからざる一物に逢着したり。彼の心中、善と惡との鬭争今や激甚なり。斯くなりては中途半途の事を容さず。善ならば應に僧正の善なるよりも善なるべし。惡ならば應に惡魔の惡なるよりも惡なるべし。彼は今實に茫然たり。梟が太陽の不意

に登るを見るが如く、出獄の惡徒今明德の光に眩惑したり。

兎も角も我巴爾我は既に昨日の我爾巴我に非ず。ゲルビスの銀貨を奪ひしは、獄中より獲來れる惡念の餘孽のみ。物理學の謂ふ所の惰力のみ。

我巴爾我は今婦人の如くに弱く小兒の如くに懼れて泣伏しぬ。泣くこと幾許時なりしか、泣いて而して後何處に去りしか、知る者なし。只其夜、僧正美里流の門前に拜伏せる者あるを見し人あるのみ。

(六) 半椿

巴里に近きモントルメルの町に一つの宿屋あり。低智慧といふ者夫婦にて持てるなり。低智慧はウオタル口戦争の時軍曹の役を務たりし人

なりとぞ。低智慧チナヂエーの女房にやうばうが、家の前いへまへにて小き娘ちさむすめ二人を遊あそばせ居ゐるに『善よき兒達こたちや』と聲こゑかけて立留たちとまれる女をんなあり。其女そのをんなも幼兒をさなごを抱いだきたり。其幼そのをんな兒ごはまことに愛あいらしく、喰くひつきたき程ほどに美うつくしき頬ほを見みせたり。其眼そのめは圓まるく大おほきなるらしけれど、今母いまははの腕うでに眠ねむりたれば、只長たゞながき瞼毛まつげを見みるのみ。母ははは貧まづしき工女かうぢよにてもあるらしき姿すがたなれど、年としは若わかく貌かたちは美うつくし。されど其眼そのめは久ひさしく涙なみだにぬれざりしものとは見みえず。是こゝれ此章このの主人しゅじん公こうたる半椿はんちんなり。

半椿はんちんは元何處もといづこの者ものなるを知らず、父ちちもなく母ははもなし。會無町エムまちにて人ひとに育そだてられ、十歳じゅうさいにして農家のうかに奉公ほうこうし、十五歳じゅうごさいにして巴里パリに往ゆきしが其美そのうつくしき髪かみと眞白まっしろき齒はとは人ひとに稱たへられ、髪かみに黄わう金きんあり、口くちに眞珠まゝありと噂うはさせられぬ。半椿はんちんは巴里パリに在ありて食物しょくもつを得えんが爲ために働はたらきたり。

働はたらくと共に戀こひをも爲なしたり。戀こひは心こゝろの食物しょくもつなり。其戀人そのこひびとは巴里パリ風流ふうりゆうの少年書生せうねんしよせいなり。少年幾人せうねんいくにん、少女幾人せうぢよいくにん、打連うちつれあそぶ樂たのしさは夢ゆめの間ま、戀人こひびと去さり朋輩ほうばい散さんず。人ひとは斯かる事ことに慣なれて只一時ただひとときの興きやうを樂たのめども、年若としわかき半椿はんちんの初戀はつこひは其胸そのむねに深ふかき痕きずを残のこしぬ。半椿はんちん元極もとぎはめて無邪氣むぢやき、貧ひんの中に育そだちて貧ひんを知らず、不幸ふこうの中に在ありて不幸ふこうを知らず、身みも心こゝろも只美うつくしき者ものなりしが、此こゝに人ひとの薄情はくじやうしを知しりそめて、其眼そのめに露つゆを宿やどしはじめぬ。況いはんや捨すてられたる其身そのみは只ただならず重おもかりしをや。

半椿はんちんは今三歳いまさいなる其兒そのこを携たづせ、故郷こきやうなる會無町エムまちに歸かへらんとするなり。流石さすがに故郷こきやうには知人しるひとの頼たよるべきがあらんと思おもひてなり。今此世このこの中に此母このははが持もてる者ものは只此子ただこのこなり、此子このこが持もてる者ものは只此母このははなり。此子このこを抱いだきて行ゆく此母このははを見みたらん者もの、誰たれか之これを憐あはれまざらん。

扱此に半椿と的智慧とは女同志の語りはじめぬ。兒等三人は早くも打解けて遊び戯る。『睦まじく遊ぶことかな、人は是を三人の兄弟と見るなるべし』と的智慧が日ふを聞きて、半椿は深く思ふ所あるが如くなりしが、終に此兒を預りて給はらずやと問ふ。問ふて答ふるをも待たず『卿の家の前に立止りたるは神様の導なるべし。預りて給はれ。吾は此兒を連れては何の仕事もならず。子ありと聞きては雇ひて呉るゝ人もあらじ』と切に乞ふ。

斯くて半椿が兒は的智慧の家に預けられぬ。一月三圓の養育料六ヶ月分前納といふをも半椿は諾し、別に五圓の祝儀をも強請られて惜まらず。而して半椿は風呂敷包一つを提げて、子を養はんが爲に子に別れて、會無町まで徒歩旅を爲したりけり。後に智慧の主人は其妻に向

ひて『汝のわなに善き鼠のかゝりたるよ』と曰へば『斯くとも知らずて』と妻は打笑ひけり。此兒の名を小節登といふ。

多謝す半椿、智慧は半椿の金を獲て危急を逃れぬ。されど次の月には又金に責められて、小節登が着物は古着屋に賣りこかされぬ。金盡きてより、的智慧夫婦は小節登を只養ふ心地して、襦袢をまとはせ餘物をくはせて、犬よりは少し善く、猫よりは少し悪しく待遇したり。半椿が氣遣ひて會無町より手紙おこして安否を問へば、何時もその返事には『小節登事誠に機嫌宜しく』とぞ書いたりける。六個月は過ぎぬ。母はキチくと養育料を送りぬ。智慧は此に於て五圓を請求す。半椿は之を諾して五圓を送る。而して小節登は憎まれ、嘲られ、虐められ、賤められて在るなり。智慧の女房は己の兒を愛して人の

兒を憎む。的^テ智慧^{ナチエ}の二人の子も母に習ひて之を悔^{さび}蔑^すむ。而して近隣^の人は曰く。的^テ智慧^{ナチエ}は富みてもあらぬに、殊勝^に棄兒^をを養ふことよ。

一年過ぎ又一年過ぎぬ。的^テ智慧^{ナチエ}は半椿^{ハンチン}が其子^{そのこ}を人に隠^{かく}せるを知りて更に七圓^{ちちん}の養育料^{やういくれう}を請求^{せいきう}し、それ不承知^{ふしやうち}ならば小節登^{コセツト}を返^{かへ}すべしと嚇^{おど}しぬ。母は乃ち七圓^{ちちん}を送^{おく}りぬ。而して一年又一年、小節登^{コセツト}は生長^{せいちやう}すれども、其^{その}あはれさも亦増進^{またぞうしん}す。未だ五歳^{さい}に満^みたずして小節登^{コセツト}は既に此宿屋^{やどや}の下女^{げぢよ}となり了^{をは}り。使^{つかひ}に走^{はし}り、床^{とこ}を拭^ふき、庭^{には}を掃^はき、物^{もの}を運^{はこ}び水を汲^みむ。三年^{ねんた}経^たちたる今^{いま}、半椿^{はんちん}若^わし來^きり看^みるとも吾^{われ}が兒^ことは知らざるべし。彼^かの愛^{あい}らしかりし小節登^{コセツト}、今^{いま}は醜^{みにく}き小女郎^{こめらう}と爲^なり了^{をは}り。

(七) 眞手倫

半椿^{はんちん}が故郷^{こきやう}なる會無町^{エムまち}は、近頃^{ちかごろ}硝子製造^{せいぞうぞう}盛^{さか}んになりて、その繁昌^{はんじやう}の爲^{ため}めに町^{まち}の様^{さま}は一變^{へん}したり。其^{その}製造人^{せいぞうじん}の富^とむと共に其^{その}雇人^{こひにん}をも富^とましめ、畢竟^{ひつぎやう}は其^{その}會無町^{エムまち}を富^とましめたり。其^{その}製造人^{せいぞうじん}といふは旅^{たび}の者^{もの}にて、何處^{いづこ}より來^きしか定^{さだ}かならず。今^{いま}より三年前^{ねんまへ}の或^{ある}夕暮^{ゆふぐれ}、背^せに革囊^{かばん}を負^おひ、手^てに杖^{つゑ}を持^もちて、此^{こゝ}町^{まち}に入^いり來^きぬといふ。其^{その}夜^よ町^{まち}に大^{たい}火^{くわ}ありしが其^{その}人は危^{あやう}き中^{なか}に駈^{かけ}入りて、警察署長^{けいさつしやうぢやう}の幼兒^{えうじ}二人^{にん}を救^{すく}ひたれば、人々^{ひとびと}其^{その}勇^{いさま}しき働^{はたら}きを愛^めづるに紛^{まぎ}れて、そが持^もてる旅行券^{りょこうけん}を取調^{とりしら}ぶる事^{こと}も打忘^{うちわす}れたり。其^{その}人^{ひと}の名^なを眞手倫^{マデリン}といふ。

眞手倫^{マデリン}は只賤^{たさい}しき工人^{こうじん}なりしが、僅^{わずか}の資本^{しほん}より始^{はじ}めて漸^{ぜん}々に大^{おほ}きくなり、二年^{ねんめ}目の終^{おはり}には自^{みづか}ら大工場^{だいくちやう}を建^たつるに至^{いた}れり。其^{その}工場^{こうちやう}は男女^{だんぢよ}の二室^{しつ}に別^{わか}たれて、紀律^{きりつすこぶ}頗^{げん}る嚴肅^{しゆく}なりけり。眞手倫^{マデリン}は如何^{いか}なる者^{もの}をも雇^{やと}ひ

入るれど、雇入るゝ時、必ず善人たれよと誨へ、善人たるべしと誓は
 しむ。彼は貧人に恵み、不幸者を憐み、すべて己の爲よりは人の爲を
 計りぬ。其富の増すと共に人望は頗る高くなりぬ。山師なりと云ひ、
 偽善者なりと云ひ、野心家なりと云ふ後言もありけれど、彼は終に會
 無町の町長に推薦せられぬ。幾度か辭したれども、人望は之を許さず
 終に其職に就きたるに、町長としても眞手倫は亦名譽ありけり。

此時、傳井町の美里流僧正逝去せるよし新聞紙に傳へられぬ。新聞
 紙は僧正生前の善行を録して數十行を費したり。其翌朝、眞手倫町長
 は喪服を着けて市廳に出でぬ。此事忽ち町中の噂となりて、町長の素
 性に一道の光を與へたるが如くに言ひはやされぬ。されど只、町長は
 彼僧正の遠き姻戚なるべしといふ事の外は何事も知られざりき。或人

終に町長に此事を問ひしに、眞手倫答へて曰へらく。吾若き時美里流
 僧正の僕たりきと。

眞手倫町長の徳望はいよゝ高く、遠く十里二十里の外より態々此
 人に一事を相談せんとして來る者あるに至れり。其様恰も彼の美里流僧

正が傳井町に於けるが如くなりき。

然るに只一人ありて窃に冷かなる眼を眞手倫に注げり。そを誰とか
 爲す。警部邪破土なり。邪破土は何れの處に於てか此町長を見たる事
 ありと思へり。而して其前半生の秘密を看破せんと欲せり。邪破土は
 牢屋の中に生れし者なり。其母は巫女にして其父は囚徒なりけり。彼
 長じて嚴正苛酷の性あり、警察に入りて身を立てんとせり。彼は官權
 を尊ぶこと神の如く、而して其官權を犯す者即ち反逆を惡むこと蛇蝎

の如し。窃盗も殺人も其他の罪惡も彼は皆反逆を以て目するなり。彼の父若し牢を破らば彼は直ちに父を捕ふるなるべし。彼の母若し法を犯さば彼は進んで母を縛するなるべし。而して彼の心中正義遂行の快感を生ずる也。されば邪破土の眼は常に冷かに眞手倫の上に注がる。眞手倫も亦終に其を覺れり。

或日、列弁土と云へる農夫、馬逸して車に轢かれぬ。絶叫して救を求むれども能く其大八車を動かすべき力ある者なし。鶴嘴をとて取りに行きたる者あれど急には歸り來ず。通りかゝれる眞手倫この體を見て、『此人を救はゞ十圓を與ふべし』と賞を懸くれど應ずる者なし。『二十圓を與へん』と曰へど應ずる者なし。皆只群がりて立騒ぐのみ。此時聲あり曰く『こは賞の多寡に依りて爲さるべき業にあらず。此車を

動かさんには非常なる膂力を要す』と。眞手倫顧みれば是れ邪破土なり。邪破土更らに曰く『眞手倫君。此車を動かし得べき者只一人あるを小官は知れり』と。而して語を續いで曰く『そは即ち曾て囚徒たりし者ならざる可らず』と。斯く曰ひ終りて邪破土は眞手倫を見つめたり。列弁土は此時いよく堪へずして頻りに絶叫す。眞手倫終に自ら車輪の下に身を投じぬ。眞手倫の力は實に非常なりき。眞手倫に勵まされて群集も力を添へければ、列弁土は容易に其一命を救はれぬ。眞手倫はやう／＼に立上りぬ。泥に塗れ、汗に塗れ、而して其顔は蒼白なり。列弁土は其足下に伏して喜びて泣きぬ。邪破土は猶只冷かに眞手倫を見つめたりき。

列弁土は膝を挫きたりければ、眞手倫が建てたる慈善病院に入れら

れぬ。且や眞手倫は馬と車とを我買ひたりとて百圓の金を列弁土に與へぬ。列弁土の傷は癒えたれど猶其脚は不自由なりしかば、眞手倫周旋して巴里の尼寺の庭男に住みこませぬ。

(八) 鏡を窓より投棄てぬ

半椿が會無町に歸りし時は此の如き際なりき。故郷とは云へど一人の知りたる者もなかりしかど、たやすく眞手倫の工場に雇はるゝことを得たりき。半椿は巴里にてのダラシなき生活を改め、二たび正しき労働に其身を慣らさんとせり。されど半椿は鏡を買ひて麗はしき己が顔を眺め、その黄金の髪と眞珠の齒とを樂み、小節登の事もひては行末の樂しかるべき身の上を想像し、幾らかの借金までして其部屋を

奇麗に飾りしなど、猶巴里生活の餘波なるべし。

然るに、朋輩の女工等は此美しき半椿を妬み、監督の老女何某は終に半椿の身上を少し探り知りて、尾鰭をつけて悪しざまに吹聴し、眞手倫には知らせずして終に此半椿を罷めさせたり。是れ恰も低智慧が半椿に七圓の養育料を請求せし時の事なり。

半椿は其處此處に下女奉公を試みたれども何處にも長く置かれず。店賃其他の借金には責めたてられ、低智慧よりは養育料をはたらかれ、火一つなくて冬の日を過すことも知りそめぬ。半椿初のほどは身すぼらしき姿して町に出づるが耻かしく、道行く人に見かへらるれば、身も心も冷えわたりて、北風に吹きぬかる、心地したりき。斯くなりては、人目立つ狭き町に住みづらく、又巴里に行きたしとも思ひしが、

借ある身のそれも出来ずに二月三月過す中には、耻も耻辱も振棄て、何憚らず町中を歩きまはるやうになりぬ。どうするものかと半椿は獨りぢぢにき。夜晝つめて賃仕事したりければ、寒中といひ夜ふかしといひ、半椿は何時となく熱ある身體となりて、力なき輕き咳は繁々として出で來ぬ。

或時、低智慧より來たる手紙に、此の寒きに小節登の着る物一つも無くなりたれば三圓だけは是非々々送れと云ひこしたり。半椿は終日その手紙握りつめたりしが、其夜町の角なる床屋に行きて、巻つけ髪の小櫛を外しぬ。例の黄金の髪はバラ／＼と亂れたり。「美しき毛や」と床屋の曰ふを聞きて、「何程にて買ふや」と問ふ。「三圓」と答ふるを聞きて、「さらば切れ」として其頭を突きだしぬ。

半椿は之を以て暖かげなる小き着物一枚を買ひ得て送りぬ。低智慧の女房はそれを己が娘に着せぬ。小節登は依然として寒に震へたり。半椿は以爲らく、我が兒は最早寒からざるべし、我が髪を着せられた。而して自らは圓き頭巾を被りて頭を匿しぬ。而も猶半椿は美しかりき。

斯くて半椿は漸々に墮落しぬ。惚れたりともあらぬ男に譯もなく猥れあひて、それと喧嘩し、それに擲られ、それに飽かれ、それに別かれぬ。我を圍める世の中いよ／＼暗くなりて、我が可愛き兒はいよいよ我が心の中に輝く。「今に金が出来たらば小節登を呼びて共に住むべし」と曰ひては獨り笑ふなり。此頃咳はいよ／＼繁く寢汗さへ出づるなりけり。

又或時、低智慧よりの手紙に、小節登熱病に罹りて久しく病みたり、
 薬代も甚だ高し、少くとも十圓の金なくては小節登は死すべしと云ひ
 こしたり。『十圓といふ金の如何にして出来べしと思へるか。愚なるに
 も程こそあれ』と、狂氣の如くなりて半椿は打笑ひぬ。されど彼は再
 び其手紙を讀みたり。

半椿ふと町に出でしに、赤き着物きて高聲に何事か喋べる者あり。
 立留れる多數の人に交りて、何心なく其者を熟く見れば、齒の療治す
 べしと曰ひ、齒磨粉を買へといひ、おかしげに己が効能を囁したつる
 齒醫者なりけり。齒醫者は半椿の笑へるを見て『好き齒なる哉、そこ
 に笑へる別嬪の齒は。その前齒二本を十圓ならば我買ふべし』と、遠
 慮げもなく言ひはなつ。半椿は怖ろしき事に思ひて走り去る。『考へて

見たまへや。二本にて十圓なり』と齒醫者は呼びかく。『おそろしや、
 彼の男は我が齒を抜かんと曰ふ。齒を抜くほどならば三階より飛びお
 りて死ぬるが優なり』と半椿は思ひぬ。されど半椿は其夜終に齒醫者
 の宿に行きぬ。行きて前齒二本を十圓に賣りぬ。翌日其十圓を低智慧
 に送りぬ。小節登實は病みてあらざりし也。
 此日半椿鏡を窓より投げ棄てぬ。是より半椿全く耻を棄て、墮落も
 既に極度に至らんとす。而して低智慧は猶養育料の月極の分の滞るを
 督促して止まず。半椿は終に僅なる諸道具を賣り盡し、借りたる部屋
 をも退出だされて、全く路額に立つに至りぬ。

(九) 紳士は罪なし

此半椿の生涯を何と謂はん乎。是れ社會が奴隸を買ふもの也。何れの處より之を買ふ乎。饑餓より之を買ひ、屈辱より之を買ふ。貧は之を捧げ、社會は之を受くる也。歐羅巴に於て奴隸解放せられたりと云ふは非也。奴隸制は猶現存せり。而して殊に婦人の上に重し。之を賣淫婦と謂ふ。半椿は既に世に棄てられ、爲さざることなく、試みざることなく、悲みを盡し、涙を盡し、今は一の恐るゝ所なし。濕れぬ前こそ露をも厭へ。

雪ふりし或日、茶店の前にて烟草くゆらす若き紳士等、表を過ぐる女にからかひ居たりしが、半椿の過ぐるを見て、其姿の醜きを嘲り、其齒の缺けたるを譏り、様々の言葉を盡したれど、半椿が振向きだにせぬに、紳士等は終に雪の塊を取りて投げつけぬ。半椿忽ち怒りて取

つて返し、紳士につかみかゝりて其顔に爪傷あまた負はせたり。來あはせたる邪破土は半椿を拘引しぬ。紳士等はコソくと匿れぬ。

賣淫婦の身を以て町の紳士に抵抗し、剩さへ傷を負せたる罪に依り、邪破土は半椿に六個月の懲役を申渡しぬ。半椿は泣いて其不當なるを訴へぬ。泣いて我が過を謝しぬ。而して此度だけは許されんことを願ひぬ。小き子の許に金を送らざる可らざる譯あるをも委しく語りぬ。されど邪破土は開を聞かんとせず。泣いて訴ふる時、半椿は又生來の美しさを現はしぬ。されど邪破土は開を見んとせず。半椿を嘲りて半椿に雪を投げたる紳士と、それに激して紳士と闘ひたる半椿と、何れか其罪重かるべき。されど半椿は罰せられ紳士は罪なき也。邪破土が半椿を引立てんとする時、思ひがけなく眞手倫町長入り來

ぬ。『邪破土警部しばらく』と押し止めて、『此女を宥すべし』と命ず。邪破土の驚きは一方ならず。町長自ら賤き賣淫婦を宥せといふに至りては、殆んど邪破土が解する能はざる所なり。半椿も亦其意外に驚きぬ。意外のあまり、己を許すべしと言ひたるは眞手倫にあらすして邪破土なりと思へり。眞手倫は曾て半椿を解雇して今日の悲境に沈淪せしめたる人なりと半椿は思へるなり。されば半椿は頻りに邪破土に向て其恩を謝し、將に戸を開きて出で去らんとす。

邪破土は巡查を呼びて曰く、『誰か此罪人を去らしめよと命じたる』と。眞手倫は曰く、『予が命じたるなり』と。此に於て眞手倫と邪破土と争ふこと稍久し。邪破土は職權を楯にして論じ、眞手倫は人情に據りて説く。争ふこと久しくして邪破土屈せず。眞手倫も亦終に其職權

を用ゐて半椿に放免を命ず。邪破土乃ち出で去る。

半椿は實に奇異の感をなせり。己が敵と思ひ仇と思ひたりし人、却て己を助け己を免せり。眞手倫の一語を聞く毎に、半椿が憎惡の念は漸々に消えゆき、暖かなる感謝の情は之に代りて胸に充ちたり。

眞手倫は靜に半椿に語りて曰ふやう『卿が言ひしことは皆聞きたり。而して开は眞なるべしと信ず。卿が我が工場を去りしことは我今日まで知らざりき。今は我卿の爲めに借金を拂ひて卿の子と共に住ましむべし。金は何程にても與ふべし。卿は二たび善人になりて幸福に暮すべし。』

半椿は實に之を聞くに堪へざりき。此零落暗黒の間より、忽然として、愛あり、情あり、光ある世に移らんことを思へば、半椿は只啜り

泣きて喜ぶあるのみ。

(十) 小官は他人に酷薄なり

眞手倫は半椿を痛はりて慈惠病院に入らしめしが、半椿は烈しき熱を發して回復すべくも見えず。眞手倫はしばく半椿を慰めて曰ふやう、「卿も苦勞したるよな。されど其を悲むこと勿れ。然してこそ善人とは爲るべけれ。卿が今逃れ來たる其地獄は即ち今後の極樂の入口なり」と。

眞手倫は又直ちに低智慧が許へ手紙を送り、手紙と共に多くの金を送りぬ。されど低智慧は容易に小節登を送り來らず。猶さまくの事を言ひ立て、多くの金を請求し來れり。眞手倫はそれをも言ふがまゝ

に送りぬ。されど低智慧は猶小節登を送り來らず。

半椿は病の床に在りて、日毎に小節登を待てるなり。眞手倫が見舞ひ來る時「小節登は近きに參るべきか」と問ふ。「明日あたりは着するならん」と眞手倫が答ふれば、母の顔は光を添へぬ。かくて一週又一週。病は漸々に重りぬ、醫者は早く其子を呼ぶべしと眞手倫に告げぬ。眞手倫は人を低智慧が許に遣らんか、或は自から往かんと思へり。此時、一大事件起りぬ。

警部邪破土突然として眞手倫が室に入り來ぬ。邪破土は兵士の如き態度を爲して、儼然と、肅然と、而も冷然として、首を垂れて眞手倫の前に立てり。「何事ぞ」と眞手倫が問へば、「犯罪者あり」と答ふ。「如何なる犯罪ぞ」と問へば、「上官に對して敬禮を缺きたる官吏あり」と

曰ふ。『そは誰ぞ』と問へば、『誰にもあらず、自分なり』と曰ふ。『上官とは誰ぞ』と問へば、『町長閣下なり』と曰ふ。眞手倫は只驚くのみ。邪破土は曰く、『小官は悪を爲せり。宜しく免職せらるべし。小官敢て請ふ。閣下曩には情の爲に法を枉げたり。願くば二たび法を枉ぐる勿れ。』

邪破土は此理由を説明して曰く、『町長閣下、小官は閣下をアラス裁判所へ告發したり。而も閣下が曾て懲役囚徒なりし由を告發したり』眞手倫の面色は變りぬ。『閣下、小官は固く然りと信じたりき。諸般の事情よりして小官は閣下を以て戎巴爾戎と呼ばれたりし囚人なりと斷定したりき。』眞手倫の面色は動きぬ。『閣下、小官は曾てツウロンの獄舎に於て此戎巴爾戎を見たる事あり。戎巴爾戎は放免後、或僧正の器

物を盗み、又途上に於て小兒の銀貨を奪ひたる事ありといふ。而して小官は閣下を以て其人なりとし、乃ち裁判所に告發したるなり。』眞手倫は色を静めて徐ろに告發の結果を問ふ。邪破土曰く『然るに閣下、小官は過ちたりき。他に眞の戎巴爾戎ありて捕へられたりとの報あり。そは林檎を盗みて捕へられたるチャンプといふ者なり。獄舎に在る古き囚人の二三は此チャンプを以て戎巴爾戎なりと證言せり。チャンプは自ら然らずと曰へども、既に證言ありて確實なり。小官も又チャンプを見しに、確に彼の戎巴爾戎なりき。戎巴爾戎いかに狡猾なりとも逃るゝこと能はず。悪物は二たび獄舎に投せらるべし。明日を以てアラス裁判所に宣告あらんとす。』眞手倫はいよく靜に『邪破土警部、其事件の詳細は予に要なし。』

予は今急用あり』と曰ふ。警部曰く『小官も明日證人としてアラスの法廷に往かざる可らず。されど猶閣下に請ふ所の一事あり。それを決せざれば去ること能はず。即ち小官の免職せらるべき事なり。』

町長曰く『卿は正しき人なり。久しく其職に止るべし。』

警部曰く『否、疑ふは警察官の本務にして、上官を疑ふは或は濫用たるべしと雖も、猶其本務たるを失はず。只證據なくして上官を告發するに至りたるは、小官の罪なり。小官は他人に酷薄なり。然れども是れ正義なり。今は自己に對しても亦酷薄ならざる可らず。閣下、小官は閣下に宥恕せらるゝことを願はず。閣下が情を以て他人を宥恕せし時、小官は之を拒みたりき。今は自己に關しても亦之を拒まざる可からず。斯くの如き情は小官が目して社會の秩序を紊る者と爲す所

なり。恩を施すは易し、義を守るは難し。小官は他人を遇するが如く自己を遇せざる可らず。小官は敢て免職せられんことを請ふ。』

邪破土は傲然として、冷然として、決然として、斯くの如く語りぬ。眞手倫は猶おもむるに『よし、考へ置くべし』と曰ふ。邪破土は一揖して退きぬ。退かんとする時又曰く『免職の命下るまでは小官は猶謹んで職務に服せん。』

(十一) 良心は神なり

邪破土が來し其日の午後、眞手倫は常のごと病院に半椿を訪ひしが、看護婦を傍に呼びて、半椿が世話を今更に頼み聞えたり。半椿は眞手倫に接するを以て日光に浴するが如く暖かく覺え、又かの小節登が事

を問へば、『最早直に』と眞手倫は答へたり。

眞手倫町長はそれより町役所に出で、それより馬車屋に行き、明早朝馬車の用意して我宅まで来るべしと命じて歸りぬ。

讀者は既に眞手倫町長の戎巴爾我たることを知りたまへるならん。

此に二たび戎巴爾我が心中を探らん。

海より廣大なるもの只一つあり、それは空なり。空より廣大なるもの又只一つあり、それは人の心なり。心は感情の戦鬪場にして又空想の貯蓄所なり。淺ましき考への數限りなく浮きては消ゆるを、若しあらはに見られなば、如何に耻しきことなるべき。戎巴爾我の心中も、亦決して光明のみにはあらざりき。

彼は先づ其頭上に雷電の叢り集まるが如くに覺えたり。邪破土が言

を聞くが中にも『走りて自首せよ、自首してチャンプを救へよ、而して自ら罪に落ちよ』と其心は曰ひしなり。其日一日、彼は外部に平靜を装ひながら心中は大混亂なりしなり。夜に入りて彼は其室に籠り、更に徐ろに自己の地位を検するなり。

彼は室の入口を鎖しぬ。何者か、此に入りこんことを恐るゝなり。

彼は又終に燈を吹き消しぬ。何者か、己を見んことを恐るゝなり。何者とは何者ぞ。鎖せしも無益、消せしも徒爾、彼が戸の外に防がんと思ひし者は猶能く入り來り、彼が見られざらんと欲したりし者は猶能く彼を見るなり。それは即ち良心也、良心は神也。

彼は夢の如き心地して、起ちて窓に倚りて其燃ゆる腦を冷さんとすれば、空には星一つだになくて恐ろしき景色なり。彼は又椅子により

て座りぬ。

彼は今想ふ。ツウロンの獄舎に一の空席あり。そは常に己を待てるなり。而るに今や不運なる一人チャンプといふ者ありて其席を充たさんとせり。眞手倫は終にいよく安全なるべしと。

彼は終に一たび決心しぬ。嗚呼われ何をか恐れん。我は全く安全なり。事は決せり。チャンプといふ人の運命は神の司どる所にして我が關すべきにはあらず。我は決心せり、我は二たび此事を思はざるべしと。

斯く決心したれども彼は安堵すること能はず。絶えず不安を感じる也。退きたる潮の又充ち來ると同じやうに、人の心の後悔の念の押し寄するを、いかに防がんとするも能はざるべし。

我巴爾我は今美里流僧正の眼前に在るが如くに覺えぬ。美里流僧正の前には、有徳なる眞手倫といふ人あらずして、前科者我巴爾我あるのみ。我巴爾我此に於ておもへらく。我はチャンプを救ひて我が義務を果さざる可らず、然らずして我永く町長として會無町に在り、名譽を得とも尊敬せらるるとも、善事を爲すとも善根を施すとも、只此一事の存するあらば我が心は猶暗憺たるべしと。かくて彼は終に自首するの決心を爲せり。

忽ちにして半椿がこと胸に浮びぬ。嗚呼此憐むべき女を如何せん。此に於て我巴爾我又おもへらく。自首して一身を潔うせんと欲するは私慾なり、人間最高の義務は人の爲に在り、我若し徒らに一身を潔うせば、此工場、此工人、此町、此町民を如何せん。我は千萬圓

の財を作りて町民に散せん。決して一身の爲にするにあらず、我が意
 決せり、我は既に我巴爾戎にあらずして眞手倫なりと。かくて彼は深
 く藏したりし昔の革囊、杖、股引等を取り出し、悉く之を焼きて我巴爾
 戎を忘れんとせり。されど其灰の中に焼く可らざる一個の銀貨ありて
 燦然たるを見る。是れ疑ひもなく里の子より奪ひたる彼の銀貨なり。
 忽ちにして呼ぶ者あり。曰く『我巴爾戎、我巴爾戎、忘れよ、忘れ
 よ、何事も忘れよ、而して此チャンプを冤罪に落せ。冤罪を被りて獄
 舎に苦む人ある時に、汝は町長として眞手倫たれ。汝が眞手倫として
 名譽あり富ある時、我巴爾戎の名を負せられたるチャンプは鐵鎖に繫
 れて歩むなるべし。』我巴爾戎の額に汗流れぬ。我巴爾戎終に決するこ
 と能はず。決すること能はざるが中に夜は明けて、昨夜命じたる馬車
 は來ぬ。

は來ぬ。

(十二) 頭髮一夜に白し

我巴爾戎は終に決すること能はざるが中に、馬車に乗りてアラスに
 向ひぬ。其途上、彼は一刻をも猶豫せずしてチャンプの裁判宣告前に
 アラスに達すべきを勉めながら、猶且止むを得ざる事故の爲めに自づ
 から時刻の後れんことを私に願へるなり。馬車の車輪の損せし時、彼は
 我にもあらで喜びしなり。到底今日中にアラスに達すべからずと馭者
 の言ひし時、彼は嘆息しながら實は心に喜びしなり。されど彼は猶あ
 らん限の方法を講じて一刻も早くアラスに達せんとするなり。此矛盾
 躊躇の間に誘惑と良心との闘ひありて、彼は終に夜に入りてアラスに

達しぬ。

此間、半椿は定刻に至りて眞手倫の來り訪はざるを怪みて待ちこがれ、町長は他行せりと聞きて、必然小節登を迎へに行きたりと信じ、明日は我が子を見得べしとて打喜び、醫師に向ひて、己が寢床の傍に小き寢床を設けて、小節登をそこに置くことを許し玉へなど打語り、而して朝暮わが子の愛らしき顔見んと謂ふなり。

翌朝、半椿の眠いまだ醒ざる時、眞手倫町長靜かに入り來ぬ。眞手倫は昨夜法廷に自己の戎巴爾戎たることを告げて後、夜をこめて一たび會無町に歸り來れるなり。その法廷に於ける詳細は此に記すに違あらず、只讀者宜しく其心中の苦痛煩悶を察すべきなり。

看護婦は眞手倫を見て先づ驚きぬ。『町長、如何にしたまひてか、一夜の中に髪の毛の眞白になりたるは。』眞手倫も驚きて、鏡を取りて我が顔を寫せば、實にや、苦痛なりし一夜の中に我が髪の毛は眞白にぞなれりける。

眞手倫はおもむろに半椿が寢床の帷を掲ぐるに、眠りたる半椿の顔の色何となく輝きたり。今は只乙女の美しさを是にのみ殘せる長き瞼毛、眠れる顔にあざやかなり。やうく眼さめて、眞手倫の立てるを見るや、只靜かに『小節登は』と問ふ。眞手倫が小節登の迎に行きしを露疑はず信せしなり。『眞手倫様、小節登は何處に。此寢床に置くを許したまへ』とさへ曰ふなり。

眞手倫は答ふる所もなくであるに、入り來たる醫師はそれに代りて『半椿よ、卿が愛子は既に此に在り。心を落ちつけよ』と曰ふ。半椿

の眼は光を帯びて『何處に、何處に、早く我に抱かせたまへ』と曰ふ。母の眼には小節登はまだ抱くばかりの子ともや見えけん。『否々、今少し卿の心しづまらでは見せられず、氣を落ちつけて待つべし』と曰へば、『否、小節登を見せたまは、我が病は癒ゆべきに、愚なる御醫者よ』と曰ふ。『それ、左様な荒き言葉を使ふほどなればこそ見せがたしと云ふなれ』と醫師にたしなめられ、こたびは半椿深く詫て『されば靜に待つべきにより、成るべく早く見せたまへ』と萎れたり。

それより半椿、眞手倫に向ひて、低智慧の事など様々問ひて、『小節登は奇麗なる服装したりしか、せめて其れだけ聞せたまへ』『小節登を愛らしと見たまひしか』など限なし。眞手倫は半椿の手を取りて、『實に小節登は愛らしき子なり。程なく此處に連れ來べければ靜にして待つべし。あまりに多く物言ふゆゑ咳の出るなり』などと慰むる中、窓の外に小唄うたひながら打笑ひて遊ぶ小娘の聲聞えたり。是は草とる男の娘なるべし。半椿はそれを聞きて『ア、愛らしき聲や、かの聲は小節登なり、たしかに覺ある小節登の聲なり』と曰ひしが、又小聲にて『其處に居るものを見せぬとは、憎き御醫者よ』と獨語ちぬ。

此時半椿、室の戸の開くに其方ふりむきて、打震ふばかりに驚きぬ。入來たるは邪破土なり。

(十三) 汝は終に此女を殺せり

邪破土は昨夜アラス裁判所の檢事より、會無町長眞手倫即ち前科者戎巴爾戎を逮捕すべきことを命せられ、今其職務を執行せんとして來れ

るなり。靜に戸を押しあけて、闕の上に鉛直に立てり。片手は外套の
 匿に入れ、片手は後にして大きな棒を持てり。儼然たる其姿は實に
 天晴なる警部なり。振向く眞手倫と顔見合はせたる時、動かず、身じ
 ろかず、揺かず、紊れず、而して只一層儼然たり。彼今終に戎巴爾戎
 を捕へんとす、其喜び知るべき也。邪破土は酷なりと雖も不義の人に
 非ず。其正なる事、其直なる事、其の法を守る事、其確信ある事、其
 情を制する事、一步誤らば殘忍に至るべしと雖も、正しく之を用ゐる
 は美德也。

半椿は邪破土を見て、是れ必ず己の爲に來れるなりと思ひ、「眞手倫
 様、助けたまへ」と哀訴す。戎巴爾戎は徐ろに曰く「半椿、恐るゝこ
 と勿れ、汝の爲に來れるにはあらず」と。而して邪破土に向ひて曰く

『我能く君が要する所を知れり』と。邪破土は大喝して曰く『速に來
 れ』其聲は實に人間の聲にあらずして猛獸の咆哮するが如くなりき。

半椿は此聲を聞きて打震へたり。而して室内を見まはすに、己の外
 に捕へらるべき人あるを見ず。然るに驚くべし、眞手倫町長は邪破土
 の爲に引立てらる。

戎巴爾戎は竊に邪破土に語りて曰く『願はくば三日間の猶豫を與へ
 よ。此哀なる女の爲めに其子を連れ來る間の猶豫を與へよ。我は逃れ
 んとする者にあらず。疑はゞ其にも往くべし』と。邪破土は大聲に叫ん
 で曰く『何事ぞや。此女の爲に其子を連れに行くことや。予は汝を斯く
 まで愚人とは思はざりき』と。

半椿はいよく震へて『我が子を連れに行くことや。さらば小節登は

まだ此處に來り居らざるか。ア、眞手倫様、小節登を』と其聲あはれなり。

邪破土は又大喝して曰く『黙れ。淺ましき哉此町。重罪犯人を町長とし、賣淫婦を伯爵婦人の如くに看護す。されど其れも既に終はれり、時來れる也』と。邪破土は更は戎巴爾戎を引立てながら『汝等能く聞け。最早町長もあらず、眞手倫もあらず、只重罪犯人たる戎巴爾戎といふ奴あるのみ。』

半椿は驚きて身を動かし、が、其まゝに息絶えぬ。戎巴爾戎は邪破土に向ひて『見よ、汝は終に此女を殺せり』と曰へば、『予は説教を聞く耳を有たず。只速かに來れ』と邪破土は曰ふ。

戎巴爾戎は僅に邪破土の許を得て、死したる半椿に近づき、其手を

取り、其顔を見つめ、まばらしく低聲に何事か語りぬ。語りしは何事ぞ。死したる人は之を聞きしか。只後々まで看護婦が語りし所に依れば、此時怪しくも死したる半椿の顔に光ほのめきたりきとぞ。

戎巴爾戎は此に於て邪破土に向ひて曰く『今は既に君が爲すまゝに従ふべし』と。

かくて半椿は土に歸しぬ。土は吾人が有せる共同の母なり。半椿は其母に歸せし也。

(明治三十年秋、福岡日日新聞所載)



茨の花

茨の花を我れ愛す。
 瘦せたる莖、瘦せたる葉、
 さ、やかなる白き花、
 露帯びて朝風に笑める時、
 より清きものやある、
 より高きものやある。
 櫻の色に我れ耻ぢず、
 牡丹の容に我れ傲はず、
 我れに我が幽かなる香あり、
 蝶來り、蜂來る、をのづから。
 我れに又我が細き針あり、
 聊か世を刺し、又人を刺す。

(家庭雜誌第二號所載)

不知所往列傳

(一) 馬渡甲子郎

馬渡甲子郎、生は山形なりといへど、若きより諸處に流浪して日本國中知らぬ處なしといふ。齡は其名の甲子といふにて元治元年の出生なること知らる。父母なく親戚なく妻子なしといふ。福岡に來り住すること二三年なりしが、その何處より來りしかは知る者なし。

馬渡甲子郎、新聞社に在りて筆硯に従事したりしかど、曾て慶應義塾に在りしといふ事の外、聊かも其過去の姿を漏さず。啻に過去のみにあらず、現在の今と雖も時としては其姿を匿すことあり。親しき人

々も其居所を知らず、一ヶ月ばかりも閑として其音沙汰を聞かぬ事あるかと思へば、又何處よりともなく人間に出で来るなり。されば、馬渡甲子郎は隱身の術を知れりとさへ言ひはやされ、新聞社にては奇人として、變人として、名物として、編輯局に置かれたりしなり。此平凡なる事務世界に於いて、馬渡甲子郎の如き人物の飼はるゝ處は、豪傑の玄關と新聞社の編輯局との外には在らざるなり。而も馬渡甲子郎は常に當世豪傑の甚だ稀にして、新聞社の漸々事務的營業とならんとするを慨嘆して止まざりき。馬渡甲子郎が新聞紙上に於いて尤も人目を牽き得たる文字は、例の隱身半月ばかりの後、飄然として歸り來り、編輯局の薄暗き一隅に座して、苦吟すること大凡五時間にして脱稿したる『彦山天狗談』といふものなり。是れ馬渡甲子郎が彦山の高峰望氣

氣なる處に於いて、『日暮天壇人去盡』したる時に於いて、老杉の下に大少幾多の天狗と相會して、閑談清語したる所のものなりといふ。其記す所、荒唐無稽なりと雖も、其奇想天外より落來る所、到底人間の物にあらず。馬渡甲子郎の人物性行を知れる者は、其の眞に彦山に天狗と相會したるべきを信せんと欲するなり。或人は之を評して曰く『馬渡甲子郎君が其不可思議なる頭腦を彦山々巔の松杉鬱々たる間に埋めて、沈思冥想すること多時ならんには、神契默會、天人相通じ、油然而として雲起り、轟然として雷鳴り、沛然として雨降るが間に、先生獨り微笑して掌を拍つものあるや疑ふべからず、何ぞ必ずしも其文の荒唐を咎めんや』と。

馬渡甲子郎は斯の如くにして仙人と呼ばれ、行者と呼ばれ、飛行自

在なるが如くに傳へられ、霞を吸うて生活するが如くに樽せられ、畢竟是れ一種の異人と成り了し、漸々にして崇拜者を生じぬ。今此に馬渡甲子郎の風采容貌を記さん。其風采容貌は實に人をして崇拜せしむるに足る者あるなり。

馬渡甲子郎は先づ大兵なり。筋骨逞しくして其色と共に銅の如し。其裾短なる單衣などを着て仁王立せる姿は宛ながら眞の仁王の如し。稍三角形をなせる鋭き眼は寧ろ少くして深く凹めり。一文字に結びたる口元は常に霸氣を示して謂はゆる一癖あるべき面魂をなせり。兎もすれば琵琶の眼の如き豎皺を忿怒の額に現はせども、又時々には和ぎたる笑顔の頬に淺き笑渦を見することあり。猶此人の特徴とすべきは、甚だしく縮れたる髪と少しく張出でたる下顎となり。髭は黒と

赤との混じたる疎なる荒毛にして、専ら其張出でたる兩の下顎に多く、鼻の下には殆んど生ひずと謂ふも可なり。

常は黙々として靜なれども、忽然として其一文字の口を開き高笑に人を驚かすことも多し。怒りては吃々として語ることも能はず、只あらかに罵りさわぐが常なれども、又諄々として人を説き、温々として事を談ずる時もあり。又酒の量すぎて酔の度の昇れる時は、快辯縦横の馬渡甲子郎をも見るべし。

馬渡甲子郎の住所は或家の二階の一間なりしが、崇拜者なる書生二人を得てより、家を川添の春吉村に卜し、婆も雇はぬ男世帯を此に作りぬ。潮満ち來れば根を洗はる、背戸の柳に船一艘を繋ぎて、涼風の夕暮、望月の夜半、門生二人を隨へて必ず漕ぎ出で、遊ぶなり。艫を

押すにも棹を使ふにも妙を得たれば、時としては興に乗じて流を下り、海に出で、遊ぶ事あり。然るに此水上の悠遊、時に一朵の花を添ふることあるこそ眼ざましけれ。

對岸なる中洲より絃歌水を渡りて來る時、馬渡甲子郎、船を其方に進めて高樓の下に繋ぎ、一人の雛妓を拉して船に乗らしめ、相擁して怡々然として酒杯を銜むなり。其尤も好める雛妓、名は小茶羅、年十五。深く怪むを須ぬす、馬渡甲子郎は色を漁するにあらず、興去れば直ちに放ちやりて顧みざるなり。

博多祭禮の夕、馬渡甲子郎、門生二人と小茶羅とを携へて又船に在り。終日山笠(山車)を擔ぐに狂したる博多の壯丁、赤裸々の數十人、隊を爲し、群を爲し、篝火を磧に焚きて四斗樽の鏡を抜く處、壯烈限

なき光景を熟視して、馬渡甲子郎慨然として門生を顧みて曰く『壯なる哉、愛すべき哉、我に此一群の好男子を借さば、嗚呼我に此一群の好男子を借さば』と。

門生は解し得ず、先生の深意を問へば、先生片手に小茶羅を擁して片手に杯を舉げ『先づ飲まう酌せよ』といふ。門生やうくにして僅に悟る所あり、『先生の經綸を干り聞かん』と云へば、先生微笑して答へず、徐ろに吟じて曰く、『寧ろ百夫の長と爲るも、一書生と作るに勝れり。』須臾ありて又吟じて曰く『歎すべし知己無きことを、高陽の一酒徒。』

馬渡甲子郎是より交りを市井の徒に結びぬ。博多の壯丁好男子多し。されど馬渡甲子郎は父母ある者を取らず、妻子ある者に與せず、氣慨

ありて係累なき者を選びて七八人を得たり。是れに彼の書生二人を加へて十人あまりの壯士、常に馬渡先生に従遊す。馬渡先生の名やうく福博市中に噪がし。夕暮に柳の木の下、酒を置いて中流に浮ぶ此十餘人を見て、往來の人皆橋の上より指ざし、て曰く『是れ馬渡先生也、馬渡先生及び其門下也』と。

行者を以て目せられし馬渡甲子郎は、斯くの如くして豪傑視せらるゝに至りぬ。豪傑歎、行者歎、到底凡人にあらず。

馬渡先生の名やうく、豪傑視せらるゝに至れると共に、此豪傑の一群は果して如何なる團結を爲せるか、如何なる目的を有して如何なる事を爲んとするかといふ疑問は、皆人の心に起りぬ。その疑問に答へんとて種々雑多なる風説こそ流布したりけれ。

馬渡先生は十人の門下と血を啜つて誓を成せりといふ。馬渡先生が十人の門下を愛撫使役することは手足の如く、十人の門下が馬渡先生を尊敬愛慕することは父兄の如しといふ。馬渡先生は一種の魔力を有して門下を心服せしむといふ。馬渡先生が其琵琶の眼の如き立皺を眉間に寄せて吃りがちに叱咤する時は、門下十人殆んど戰慄せんばかりに恐怖し、其淺き笑渦を浮ばせて諄々と訓ふる時は、實に涙を垂れて隨喜すといふ。されば此豪傑の一群は皆互に死を決して相許せるなりといふ。されば此豪傑の一群は遠からざるに一大事を仕出來すべしといふ。善かれ悪しかれ一大事を仕出來すべしといふ。

其一大事に就ては實に無數の説ありき。支那内地、或は朝鮮、或は西比利亞に入りて爲す所あらんとするなりといふもの(一)、南洋無人

島に渡りて之に住し、こゝに一國を建てんとするなりといふもの(二)、是等は尤もありふれたる冒険の題目を此一群に擬したるに過ぎざるべし。海に浮びて海賊となるべしといふもの(三)、山に入りて山賊となるべしといふもの(四)、終には都府を横行する強盗となるべしといふもの(五)、是等は憎悪恐怖の念より割出だされたる想像なるべし。されど是等も亦、馬渡先生一群の士が、如何に社會の眼に映じたりしかを見るには足るべし。社會黨、貧民黨を組織すべしといふもの(六)、大臣暗殺の企てありといふもの(七)、富豪襲撃の計劃ありといふもの(八)、容易ならざる謀叛の準備最中なりといふもの(九)、爆烈彈密造中なりといふもの(十)、是等は最も多くの人々に信せられたりし所のものなり。飛びはなれたる説としては、一派の宗教を創立せんとする

ものなり(十一)、單に人おどかしの道樂なり(十二)、なども謠はれたりけり。

固より事の真相は知るべくもあらず。警察は非常の注意を以て探偵を盡すと聞えたれど、終に何事をも知ること能はざりき。新聞社にては此有名なる人物を編輯局員の數に列すれども、二たび彼の『天狗談』の如き奇文字を得て掲載することもなし。斯くて馬渡甲子郎の身邊には幾層の黒雲を湧かしめ、愈々奇異にして愈々偉大なる人物を想像せしめたりき。

一夜月明かにして露冷かなる頃、馬渡先生が家の脊戸口押開かれ、柳に繫げる船の纜靜かに解かれぬ。潮は今正に満ち來りて舷を叩けり。乗り移りて艫を取りたるは馬渡甲子郎なり。今一人乗せられたるは少

女なり。月の光の其面を照すを見れば、紛もなき彼の小茶羅なり。門下生十人は脊戸口に立てり。馬渡甲子郎は突如として大笑し、小茶羅を顧みて艦を漕いで去る。門下生は先生の船の影見ゆるまで見送りぬ。先生の船は小茶羅を乗せて終に見えずなりぬ。月は照りて潮は満ちたり。馬渡甲子郎は終に往く所を知らず。数日の後、新聞社は馬渡甲子郎の書を其紙上に載せたり、曰く。

予は終に何事をも爲さずして福岡を去れり。只雛妓小茶羅を携へて去れり。六尺の鬚眉男子、月夜海上に雛妓と相對す、何等の好景ぞや。予は長に此好景を貪らんと欲する也。諸君は二たび馬渡甲子郎の名を聞くこと無かるべし。予が門下の二三子を問ふこと勿れ。予は渠等を殺すに忍びざる也。

然れども門下の二三子は、猶馬渡先生の必ず何時かは何處にか現はれ出づべきを信じて疑はず、益々其志を砥礪して其用を爲さんことを樂むと云へり。

(二) 寺家村百太郎

大阪天満の瀧川町といふに寺家村百太郎といふ男住みたりき。年は三十ばかり、中肉中脊、凜々しき顔に赤味を帯びて好き男なりき。眼尻の釣りたるは疳持の性を現はしたれど、機嫌よき時はニコくとして愛嬌者なり。流行に後れぬ洋服リュウとして、忙がしげに駈けまはるは、保險會社に勤めるなりともいひ、新聞社に出るなりともいふ。我れは近處に住みて此人を知りたりしなり。交際も廣きらしく、金まは

りも可也に好きらしく、先は當世はたらき人のはしくれなるべしと思はれたりき。

此寺家村百太郎に就きて三つの評判ありき。一つは此人の轉居に就て、一つは此人の髭に就て、今一つは此人の細君に就て。

先づ寺家村百太郎は、他人の面倒がり、うるさがる轉居を以て道樂の一つとなせり。道ゆくついでに貸家札の眼につくことあれば、如何ばかり忙がしき折柄なりとも、必ず立寄りて見分し、若し氣に入らん乎、忽ちに談判を調べ、其翌日にも引越して住みこむが習はしなり。住みこみて當座半月ばかりは、頻りに新宅を喜びて、わざく友達を連れかへり、刺身の一皿に麥酒二三本の馳走を惜しとも思はねど、ツイその刺身を取寄せる仕出屋が遠いとやら、湯屋の好いのが近くにないと

やら隣の娼が氣にくはぬとやら、便所の都合がわるいとやら、前裁が思はしからぬとやら、種々のなんくせを直につけて、又もや新宅を探しまはるなり。されば大阪四區廣しと雖も、半月なり一月なり寺家村百太郎が住みて試ざりし町とてはなく、此四五年間に都合三十幾回の引越とぞいふなる。

次は髭。或時は鬚髯ながくと天神様の如く、或時は上髭みごとに八字をなせり。誰やらにかぶれて頬髭に丹青を凝すかとすれば、忽ち又名残なく剃りすて、青々としたる痕を撫で、奈破翁は髭なかりきなんどいふ。寺家村が落魄れて行倒となりたらん時、人相書の廣告出づとも、髭は心當の種になるまじと或人はいへりとかや。

扱その次は細君。細君が評判の一つなりといへば、絶世の佳人で

もあるかといふに、否々。さらば氣毒ながら十人並はづれた醜婦でも
もあるかといふに、否々。さらば成程、よくある奴の、其細君が有名
な嫉妬家でももあるかといふに、猶且否々。さらば一體いかなる譯に
て。マアサお急ぎやるな、緩々語らん。

寺家村百太郎の細君の評判といふは、恰も渠が轉居の評判と同じ譯
柄にて、眼につきたる女あれば、忽ちに談判調へて、其翌晩にも結婚
するが習なれど、例のなんくせを直につけて、程なく離縁するがお極
りなり。されば寺家村百太郎の細君は、又恰も渠の髭と同じ譯柄にて、
或時は細面の瘦形の居るを見るべく、或時は丸ボチャのどつしり者の
座りたるを見るべし。眉をおとして繻子の襟かけたる大年増に出あひ
たる客もあれば、赤いてがらの十七八が花嫁然としてお茶くむを戴き

たる友達もあり。斯くて此事評判となりければ、たまに寺家村の家を
訪ふ人は必ず新しき細君を見る事と合點して、若し去年來見覺えたる
顔に出あふ時は、『や、まだあなたか』とは悪口なるべし。

三十幾回目の瀧川町の家に移りたる時、寺家村百太郎又獨身なりし
が一月前に追歸したる細君は、丁度八人目なりきといふ。或人曰く、
實は十人目なりと。然れども或人は又之を辨じて曰く、『僅に三日があ
ひだ居たりし淫賣あがりのお何を一人に數へ、一度別れて半年の後又
戻りたりしお何を二人に數ふれば、實に或人の説の如く十人目に當れ
ど、予は猶八人目と認むるを以て穩當なりと思考す』と。二説いづれ
か是なるを知らずと雖も、我れは姑く後の或人の説に従ひ、八人目と
記しおく也。

寺家村百太郎、卅幾回目の瀧川町の家に在りて、銳意九人目の細君を探しつゝ、ありと聞えたりしが、程もなくして稍陰氣なる、小作の、併しながら可也の美人にして、品格ある細君を見るを得たりき。寺家村百太郎頗る之を愛して北新地の小何に似たりと稱し、友達を招きて小酒宴を催すこと常よりは屢々なりき。さるに此新細君は兎角に浮立たずして嬉しとも思はぬ様なりき。

後に聞きし所に依れば、此細君の身の上こそあはれなれ。内氣なる温順しき善き人なるを、二度まで夫に嫌はれて離縁せられ、罪はと問へば、氣がきかずとやら、馬鹿なりとやら、『馬鹿も氣のきかぬも生れつきなれば、モウく一生男は持ちませぬ』と、堅く思ひ定めたりしを、脆くも又或老婆に口説きおとされ、此上もなき好き人、此上もな

き安樂なる家と聞きて、扱こそ寺家村百太郎に歸ぎしなれ。固より九人目の女房ぞとは知らざりしなるべし。百太郎はた三人目とは知らざりしなり。

来て見れば、此上もなき安樂なる家にもあらず、此上もなき好き人にもあらず。されど内氣なる温順しき善き人なれば、苟且にも夫たる人に逆はんとはせず、如何なる事ありとも三度目の此家を出でんなどゝは夢にだも思はざりしが、或日、唯一人の叔母の許に泣きにゆきてさまざま唧ちたる言葉の中に。

第一女房たる者を賣女かなんどのやうに思うて居らるゝが淺ましくお客があれば何時も變らぬ聞苦しい色話の耻かしさ。可愛さうに私が何とやらいふ藝妓に似てゐるとやらぬとやら。それかと思へば又私

の事をば『家の娘が』『山の神が』と口ぎたない言ひ様。『奥様』の何のと立てられたいでは無けれども、御自分の品も下らうに、現在の女房を下司のやうに仰しやらずとも、それかと思へば連立つて外に出た時など、是非とも相乗の車と仰しやる。いつぞやなどは寫真屋へ車をつけて、厭らしい眞似ばかり。夫婦らしうすることなら、二人並んで寫真をとるに不思議はなけれど、立たせられたり、座らせられたり、人形でもあるかのやうに玩弄にしられて、戯けた眞似をさせられるを見られるが耻かしさ。是までに辛いと思つた事は數おほけれど、今度のやうな耻かしい、情ない、厭らしい思ひをした事は御座いませぬ。

寺家村百太郎は九人目の新細君を愛するのあまり、稍濫に及びたり

しなるべし。されど是れ寺家村百太郎に取りては尋常の事にして、それが爲め新細君の心を傷つけんなどは少しも思ひ至らざりしなり。然るに少し高尚にして眞面目なる此新細君は、常に窃に其眉を擧め其身を慄はせたりしなり。

よしさもあらばあれ、寺家村百太郎は頗る此新細君を愛し、半年の長きに及びて未だ離縁の沙汰を聞かず、それと共に轉居の癖も休みてや、珍しくも瀧川町の家に住むこと將に一年ならんとす。斯くて家と細君と共に久しく變らず、三つの評判の中、只變化を髭のみに留めたるを見て、寺家村百太郎の知人間には不思議なる事に噂せられたりしが、一夜忽然として一珍事こそ起りけれ。

寺家村百太郎の細君身を井に投げて空しくなれりといふ。近處合壁

の騒動一方ならず。窃に聞く所に依れば、昨夜寺家村百太郎酒に酔ひて家に歸り、何處にて聞きて來にけん、細君が男を持つこと既に七八度に及べるよしを責めて、恐ろしき古狸なりと罵り、己は九度目なるの身を以て、痛くも細君を辱しめ、直ちに離縁するよしを告げて又出で行きたりしといふ。細君は泣きに泣きて辯ずることも得爲ざりしが、夜深け人静まりて後、終に身を投げたるなりとぞ。

寺家村百太郎は翌朝何處よりか飄然として歸り來り、昨夜の珍事を聞きて大いに驚き、面色土の如くに變りたりしが、混雜の最中に、何時ともなく消えうせて在らずなりぬ。

寺家村百太郎は終に往く所を知らざる也。或は曰ふ、遠く新潟地方に在り、十八目の妻を得て共に棲めりと。

(三) 古賀狂生

我が浪華天王寺のほとりに住みたりし頃、時雨癖ある空の、朝は澄みわたりに暖かき或日、裏は白き鼠無地の綿入を尻はしをりて、よごれたる足袋股引、ちびれたる日和下駄、日に焦げたる檜笠、尺八もたば虚無僧とも見ゆべき男、枯川々と門外より呼ばはりて入り來ぬ。

「古賀よな」と我れは其聲にて知りぬ。姿も見えつれど、餘りに打變りたれば、聲ならでは知るよしなし。其聲は二年ばかり聞かざりし懐かしの聲なり。なつかしの其聲を月日経たればとて如何で忘れん。只其一聲の耳に響けば、幾年の交情一團となりて胸に浮び、涙も出づべきばかり嬉しきなり。

「古賀か」と出で迎ふれば、手を笠に仰ぎ見る珍らしき其顔の、瘦せ
たれども、黒けれども、嬉々として喜べる色あるに、我が胸は又嬉し
ていよく躍りぬ。

語るには野外こそよけれとて、古賀は強いて我を誘ふ。我れ豈故人
の意に反かんや。恍然として二人野を行けば、語は短くして意は長く、
聲低くして情多し。虫をよけて稲束にうちもたれ、落穂つみつ、言葉
なき時、古賀卒然として我れを叩いていふ。「來れ枯川、塔に上りて空
中に語らん。吾れは地上を好まず」と。

此日の事は我れ露だも忘れず。特に深かりし當時の感を、回顧の度
毎に新にして、晝の如く我が心に残れるなり。此時我れ實に古賀が言
行の昔に變りて稍奇異なるを怪みたりき。古賀固より凡々たる俗物に

あらざりしかど、温和平靜の人なりしなり。今や情の濃かなるは二年
の昔に異ならざれども、霸氣あり圭角あること殆んど同じ其人にあら
ざりしなり。相別れて二年の後、霸氣の没せるを見るならば、誰かは
之を怪しとせん。さるるを古賀は之に反せり。我が怪みたるも道理なる
べし。

古賀は終に我を拉して天王寺五重の塔に登りぬ。而も酒一升を懷に
藏して登りぬ。晝に近き空なほ澄みわたりにて白光の天に充ちたるに、
大阪城よりかけて大阪市中を下瞰する心地よさ。古賀は頻に快哉を叫
びて酒を徳利の口より啜る。此くの如き酒量を何時か養ひけん。我が
酒を飲まざるを見ては、口を極めて我が勇なきを罵り、罵りやんでは
呵々大笑して又啜る。

我は怪みながら、未だ古賀の身上の變遷を問ふの機を得ざりしが、此に於て始めて彼の二年間の運命を問ひ試むるに、古賀勃然として色を作し眉を擡め、やがて又呵々大笑して『過去を語る勿れ』といふ。されど我れいかで問ふことを休めん。『友人の氣遣ふ心を安んずるの意なきか』といへば、彼れ只愁然として徳利と相對して語らず。『友人を疎んずるか』と責むれば、『友人を苦むるか』といひて大息す。

我れも終に黙してあれば、彼れ忽ち又大笑して曰く『過去を語る勿れ。再び問ふ勿れ。再び問はゞ吾は今より直ちに去らん。枯川、且一杯を飲め』と。我れも終に強ゆること能はずして止みぬ。

古賀は又我が飲まざるを見て、腰を探りて小き包を出だしぬ。彼が旅の糧なるべし。開けば握飯あり。曰く、『枯川、汝饑ゑたるべし。之を食ひて姑く忍べ。吾れには酒あり。興いまだ盡きず』と。

我れは實に饑ゑたるまゝ、握飯くひながら話頭を轉じて、さりげなく此空中の會合の樂しさを語れば、古賀は急に起ちて塔の柱に對ひ、矢立の筆もて詩句を題す。句は白樂天のなり。『不二開口咲一是痴人』。題し了りて口を開き、例の呵々大笑せんとしたりしが、笑は涙に和して哭聲に變じぬ。哭して又笑ひ、笑ひて又哭す。醉なるか、狂なるか、古賀は終に打仆れて啜り泣く。泣くかとすれば何時か眠りて甦を成せり。

五層樓の上、天地の間、此狂せる友人が、檜笠を布きて徳利を枕にし、空に憑りて眠れるを見て、我れは無量の感に堪へず。欄干に依りて茫然として二年前の事を思ふ。天を仰ぎて思ひ、地に俯して思ふ。

美しかりし古賀の妻はや。温和なる夫、洒々たる妻、笑みそめたりし彼の稚兒はや。若き夫婦、肥えたる稚兒。樂しかりし家庭かな。家を舉りて東京に向ひし時、春蕩々、望洋々、枝垂れたる柳が下に、汽車待つとて並び立ちしを、今も眼に見るが如。怡々たる幼き者、清楚なる若き母、悠々たる若き紳士、爾後音信全く絶えて勿々二年、今將如何ん。

愁に堪へずして首を垂るれば、我が脚下に横たはれるは其人なり。古賀は眠り我れは護る。塔に登り來る者は目交して去る。時は幾許か經にけん。空は何時しか搔曇りて時雨の一むら横さまに我れと古賀とを襲ふ。

古賀は忽然として醒め、猛然として起ち、我れに添うて欄干に依る。

時雨は猶來る。古賀は面を背けず、我れも亦濡れて立つ。卒然として古賀の曰く『飛んで此處より落ちば亦快ならんか。』我れ驚いて古賀の背を抱けば、大笑して古賀の曰く『安んぜよ。僕いまだ命を惜む。』やうくにして相伴うて塔を下り、我が家に歸らんとすれば、古賀袂を拂つていふ。『僕今夜生駒山を越えて奈良に入らざる可らず』と。我れ古賀の決して久しく止らざるべきを見て、せめてはとて一宿を強ゆ。古賀猶肯かずしていふ。『君と一日の歡會已に盡せり。願くば吾れを縛する勿れ』と。我れ猶強ゆれども古賀終に肯かず。將に別れんとす。別れんとして躊躇ふ。古賀急に大笑して走り去る。走りながら叫んでいふ。『桔川、桔川、又會はゞ空中に語らん』。

我はたゝすみて檜笠の影きゆるまで見送りたりき。爾後復古賀狂生

のなつかしき聲を聞かず。

(四) 藤 権兵衛

處は特に記さじ。高くはあらぬ或山の半腹の、一むら茂れる森陰に
小き社あり。眞黒なる樹間より、社の棟の一角が僅に白く露はれて見
えたるを、人皆好き景色に稱へたりき。この社、久しく守る人もなく
てありしを、或豊年の満作の餘を以て、壞れたりし片棟に修繕を加へ、
それと同時に小き家をさへ傍に作りて、神主一人そこに住ませつ。我
が此に傳するは即ち其神主藤権兵衛が上なり。

藤権兵衛、年五十ばかり、色黒き痘痕面の小男なれど、げにくくし
く尊きところありき。我れ或時、彼が白衣を着けて若葉の蔭に立てる
を見て特に尊く覺えし事ありき。此尊き藤権兵衛は全く獨身なりき。
曾ては在りし妻子今は無く、親類縁者とても血を分けたるは一人も無
く、固より此地の人ならねば友達といふほどの者も無く、心易き交り
といふほどの者すら無かりき。

藤権兵衛にして若し園碁の少しをだに知りたらしましかば、いづくん
ぞ其友なきを憂ひん、熱心なる碁客到る處に在り。藤権兵衛にして若
し俳句の些かをだに解したらましかば、いづくんぞ其交りなきを憂ひ
ん、風雅の俳人到る處に在り。さるに藤権兵衛は俳を解せず、碁を知
らず、たましく和歌をよみいづれども、人能くその心を解するなし。
かくて藤権兵衛は山の半腹に於て全く孤獨の生を送りたりき。嵐木枯
の吹きすさぶ夜など、能く寝る事よと餘所ながら哀に見られたりしが、

人こそ知らね眠られぬ夜も多かりけんかし。

藤権兵衛が獨り其浩然の氣を養ふの法は、只其朝毎の神前の禮拜に在りしなり。世はまだ眠りて曉ほのぐらき頃、露霜ふみしだきて清淨の大氣を吸ひ、掛巻も綾に畏き大神の御前にひれふしく、冴ゑに冴ゑたる拍手うちならしく、畏み畏みて白す言の葉に、心をのづから神に通ひ、尊くいみじく得も言はれぬ清々しき心地すと、自ら語るを我れ聞きたる事ありき。

短からぬ禮拜の終る頃には、今しもさしのぼる旭の光、御鏡の眞只中を射照して、莊嚴靈妙又得も言はれぬ心地するが常なりきとぞ。禮拜終りてよりは社前の掃除に餘念なく、織塵を留めず、一葉を殘さず、是にも亦心の清々しさを増し、掃き終りて家に入れば、座を清

めて先づ茶を煎ず。茶は其尤も好む所にして價高きを厭はず、玉露の風味には一飯をも換ふべしといふなり。さるに怪しきは、正に其好める玉露を風味する其時、何とはなしに物足らぬ感あるが常なりきとぞ。一日我れ藤権兵衛を訪ひて語りし時、殆んど泣かぬばかりにして我れに是等の事を訴へたり。一たび物足らぬ感の起り來れば、曩の莊嚴靈妙も烟と消え、清々しき心地も夢となり、只懊惱煩悶して堪へがたきを覺ゆとぞ。日は日永うして堪へがたく、夜は夜長うして堪へがたく、曉に至りて始めて靜なる心に復るを覺ゆとぞ。権兵衛は蓋し孤獨寂寞の感に堪へざりしなり。曾ては在りし妻子今は無く、親類縁者なく、友人なく、交りなきに堪へざりしなり。朝まだき神の御前に座する間は、其靈光に輝されて、其威徳に酔ひたれども、

歸りて家に入れれば、人なく情なき一室の、索然として味ひなきに堪へざりしなり。藤権兵衛は神に仕ふる身なれども、猶人なりければなるべし。

かくて権兵衛は頻りに同情を求むるの人となり、たましく山に登り來る人を強いて留めて、其一身の孤獨の情を訴へたりき。我れも亦即ちそを聞きし一人なり。其訴ふる所は只淋しくといふ。

権兵衛の淋しくの身上話は一郷の噂となれりき。

或人終に権兵衛に妻持てと勧めたりければ、権兵衛頓に悟る所ありしもの、如く、『然り々々』と連呼したりとかや。それより権兵衛は妻求むる人となれりき。

娘なんどの打連れて社に詣づるがあれば、権兵衛は喜びて之を迎ふ

れども、それ等が中より我が妻を選び出づべくもあらず。氣輕ならぬ男の重くろしき言葉に娘等を笑はせも得せず。娘等が永くも居ずして立歸るを淋しげに見送たりしなり。『彼の年老いたる翁が妻求めつゝありとよ』とて、娘等が後に打笑ふを、権兵衛は知りきや否や。

堪へずやありけん、権兵衛は逢ふ人毎に妻の事頼みきこえたりけれど、月日経ちてさるべき話もなかりければ、例の淋しくの嘆聲いよく繁く、朝毎の拍手の響いよく冴えて聞えたりき。それを哀れがる人々は多かりけれど、われその妻にならんといふ女は終に出でざりき。

或霜の朝、例の拍手の響聞えず、次の朝も其次の朝も聞えざりければ人々怪みて見に行きけるに、社前に落葉深く積りて神主藤権兵衛は

在らざりき。

(五) 貝塚十平

我友貝塚十平、乾齋と號す、鳥取の人なり。久しく山陰の天を望んで而うして敢て故山に入らず、我れと共に落魄して浪華に在り、我れと歳を同じうし、我れと病を同じうしたりき。病とは醉を貪りて情を恚いまゝにするなり。時に歳正に二十五。

嗚呼是れ數年前の事也。月冴ゑて霜置きたりし曉、一たび梅田停車場に凍れる手を別ちてより、我終に二たび乾齋を見ざる也。其の曉、我れは東に向つて去り、乾齋は西に向つて去りぬ、彼れ百里、我れ百里、二人の間は忽ちにして數百里を隔てぬ。何の故によりて二人は斯

の如く相別れし乎。將に別れんとせし時、乾齋我れに語りていへらく、「僕一事を成就するまでは君を見ざるべし」と。

相別れてより三月の後、我れ始めて乾齋の書を得つ。書は廣島より來り、封皮の文字には醉態あり。披き見れば惡筆縱横、「廣島遊廓某樓玉柳花魁の部屋に於て貝塚乾齋」と大書す。他に一字なし。

我は只乾齋の病猶癒えざるを知りしのみ。後又數月、我れ一葉の端書を乾齋より得つ。鉛筆にて書かれたり。其文に曰く。

予は今周防國を旅行しつゝあり。昨夜は路傍に野宿したり。夏の月夜ほど愛すべきものはなしと予は思ふなり。予の懷中貯ふる所、僅に數錢、而も猶葉書代の一錢を惜まざるは、月夜露臥の興を君に知

らせたきが爲めなり。
 我れは此書に依りて乾齋が月夜露臥の情を想ひ、其の必ずしも負惜の言にあらざるべきを覺りぬ。乾齋實に這般の趣きありし也。然れども乾齋、徒手周防國に入りて何事を爲さんと欲する乎。我れは敢て乾齋の赤貧を氣遣はざれども、只其前途の方向を知らんと欲すること切なりき。

後又數月、我たま〜福岡新聞紙上に於て貝塚十平の名を見き。貝塚十平は新に福岡縣巡查を拜命せるなり。貝塚十平といふが如き、稍奇なる姓名の全く相同じきが、多く在るべしとも思はれず。果して是れ乾齋乎、されど乾齋は巡查を拜命しさらなる男にあらず。されど又乾齋が擊劍に長じたりしを思へば、猶是れ彼の貝塚十平なるべしと思

ひぬ。貝塚十平巡查を拜命す、其窮想ふべし。月夜露臥は十平に取りて寧ろ風流也。巡查拜命は十平に取りて尋常の苦痛にあらざるを我善く知る。而して乾齋此事に就て終に書を我れに寄せず。

後又數月、博多正福寺扶桑最初禪窟と肩書したる乾齋の書を得つ。又葉書也。曰く。

僕近來粥を啜りて禪を學ぶ、跌坐、托鉢、皆妙なり。憾むらくば君をして此味ひを嘗めしめざるを、月夜露臥の興の比にあらざるなり。乾齋の書信の簡短にして、其體を備へず、其詳を盡さざるは常なり。而して趣味は却て其間に存するなり。

貝塚十平は巡查を免職せられやしけん。巡查一轉して禪僧となる、我れは實に乾齋の變化多き面白き生涯を羨みたりき。

後又數月、乾齋の書又馬關より到りぬ。例の委しき事は無く、只、米相場の中おのづから禪味あり。一得千金、一失萬金。千萬金烟の如し。得失夢の如し。愉快、大愉快。

惡筆縱横、醉態甚だし、數日を経て又一書至る。曰く。

僕昨五百金を一攫せり。夜來妓を携へて春帆樓に在り。明日又千

金を獲んこと必せり。始めて花柳界の大盡たり。然れども君と飲ま

ざれば此酒甘からず。僕決して久しく馬關に留まらざるべし。

巡查、禪僧、相場師、乾齋も亦奇人なる哉。我は乾齋と相見ること

の近きに在るべきを思ひ、大に酒を酌んで其冒險の奇談を聞かんことを

を樂み待ちたりき。

後又數月、東京の消印ある乾齋の書到る。乾齋は終に東京に來りし

なり。我が喜び知るべきなり。されど乾齋は何故に直ちに我が家を訪

ふことを爲さずして、氣長くも書をば寄せたる。訝しみて封を披けば

何時になき稍長文なり。

僕昨東京に着せり。然れども未だ一事を成就せず、君と相見るを

得ざるなり。然れども僕情禁する能はず、昨夜窃に君の家の門前を過

り、燈火によりて窺に君と君の細君との姿を窺ひ見たり。僕情禁す

ること能はず、忽ち戸を叩いて君の名を呼ばんとしたりしが、急に

意を強うして自ら制したり。僕未だ一事を成就せず、故郷に入らず

友人を訪はず。僕は君が舊態を改めて平靜なる生活をなせるを見て、

喜びて殆んど泣かんと欲したり。僕には此狂を宥せ、然れども君に

は不可なり。願はくは細君に告げよ。君の友人に貝塚十平といふ者

あるを。江湖に放浪して産を治めず、敝衣垢面の一措大なれども、能く情を解し涙を有する者なることを告げよ。又、蔭ながら満腹の敬意を君と君の細君とに寄することを告げよ。他日相見るの期あるべし。馬關の千萬金は煙の如し。得失は夢の如し。

嗚呼是れ乾齋が最後の書なり。爾後三四年、杳として消息なし。我は幾度か夢に乾齋を見れども、現には見ることを得ず。夢醒めて後常に思ふ、乾齋は何の日を以て能く一事を成就せんとするか。

又思ふ、乾齋の來らざるは善し、何が故に書をば寄せざる。何が故に書を寄せて其落魄の狂態を報ずること前年の如くならざる。月夜露臥、巡查、禪僧、相場師、大盡等の状を我に報じたるの筆を以て、何が故に其後の變化の多趣多情なるを報せざる。

嗚呼貝塚十平は死したるか、老いたるか、將た生ながら東京市中、人百萬の間に葬られ了りたるか。

（明治卅二年春、讀賣新聞所載）

別荘と公園

山深く、水清し。
 老いたる人、若き人、自由に遊ぶ温泉場。
 其の谷川の川岸の、巖に立てる一少年。
 『成功秘決』を手に持ちて、慨然として嘆ずらく、
 あ、此の風景、愛すべし、我が別荘にしてしがな。
 都の美女を携へて、我れ獨り來て遊ぶべく。

門高く、扉長し。
 盛装の人、車馬の人、競ひて入り來る大邸宅。
 其の裏庭の生籬の、外面に立てる一少女、小き妹の手を取りて、
 愁然として嘆ずらく、あ、此の風景、美しや、善き公園にしてしがな。
 知るも知らぬも打連れて、皆共に來て遊ぶべく。

僕にもオバアさんが欲しい

(西洋の或雑誌より反譯したるもの)

是れは西洋の御話。十二月の朝の七時頃、夜あけの薄い光は窓掛に遮られて、部屋の中はまだ真暗い。然し、其部屋の中に居る一人の爲には、暗くても明るくても、そんな事に頓着は無い。彼れは寢床の上にムツクと起きあがつた。暫くは兩の手で目を擦つて居たが、やがて其部屋の中に居る今一人のマダ善く眠つて居るのを起しはじめた。

「オツカさん、オツカさん。お起きよ。今日は僕のお誕生だもの、そしてお客をするのだもの。」
 垂枝夫人は目をあけた。此暗い寒い朝を、今少し寢て居たい。

「秀さんまだ起きる時ではありませんよ。サ、床にはいつてモ少しお休みなさい。お客は晝からの四時だもの、秀さんが今から幾ら寝ても大丈夫。」

所が秀さん中々承知せぬ。

「だつて僕モウ眠くないのだもの。僕の目はモウつぶつてるの厭だと言ふのだもの。僕は下に行つてお菓子だの、お茶だの、並んでるか見て來なくちやならない。」

垂枝夫人もモウ到底ダメだと明らめた。

「それではね秀さん。おネマキでも着かへて、そしてコ、に待つてお居でなさい。まだ下になぞ行くのぢやありません。お茶も、お菓子も、まだ並んであるものですか。朝の御飯を食べて、晝の御飯を食

べて、それからの事ぢやありませんか、秀さんのお客は。」
 それで秀さんも止むを得ず下に行く事は見合せて、其代り母の寢床にもぐりこんで、待ちに待ちたる今日のお客の事を、色々と話して居る。

此お客と云ふのは、半分は秀太郎の誕生の爲、半分はクリスマスの爲の催しであるが、垂枝夫人は貧しき孀であるので、固より極めて手輕なお客事である。即ち只、クリスマスの木を飾つて、そして茶と菓子とを出すだけの趣向である。(クリスマスとは基督祭と云ふ事で、基督の誕生日なる十二月廿五日を祝ふのであるが、丁度年末の事ではあるし、チヨット日本のお正月と云つたような景氣である。そして、家中に大きな木を立て、それに色々な贈り物をくゝりつけて、夜にな

ると其れに火をとぼす。其贈り物は丁度お年玉といったような者で、親しき間の者が互に贈りかはすのである。それが即ちクリスマスの木である。垂枝夫人は只これだけの手輕な催しですら、丸瀬が秀太郎と一しよになつて、總べての手配は私がするからとセガんだので、それでヤツと承知したのである。丸瀬といふのは垂枝夫人の手助けの女中で、凡そ此の倫敦中に垂枝の奥様ほどよいお方はなく、此世界に秀さんほどよいお子はないと思つて居る。

此ストークトン町の小き家は、殆んど丸瀬が一人で切つてまはして居るのである。丸瀬は、垂枝夫人お紫がマダ母の翼の下に浮世の榮華を樂しんで居た頃からの召使で、お紫が母の心に背いて貧しき畫家の許に走つた時にも、やはり一しよに付いて行つたのである。それから、

お紫の母の怒が強くて、お紫が送る詫手紙を封も切らずに突返して來た時、それを様々と慰めた者も此丸瀬であつた。

お紫の母は、お紫が若し勝手な結婚をするならば、其日から死んだものと見做すからソウ思へと云つて居たが、お紫の心では、それは只一時のオドシであると思つて居た。それに又お紫は、畫家としての夫の技倆を堅く信じて居たので、名譽も富も直ぐに得られる者と思つて居た。然るに、それは二つとも當がはづれた。母は其言葉を嚴重に守つて少しも動かぬ。夫は命さへあつたなら實に妻の信仰に酬いたでもあらうが、それから僅に二年の後、熱病にかゝつて死んでしまつた。それで孀のお紫は秀太郎と丸瀬と三人で、其當時住んで居た伊太利をスゴくと引きあげて、倫敦に歸つて、音樂の教師になつて、其僅な

収入でストーケトン町のさゝやかなる家を支へて居た。そうしてモウ母の許は到底得られぬものと諦らめて、二たび便つて行く心も無かつた。それも其筈、秀太郎が生れてから何週間目かの日に寫眞を取つて其笑ひを含んで居る可愛らしい顔の下に、『オバアさんへ、秀坊より』と書きそへて送つたれば、『子の無い者に孫のある筈が無い』と云つて、其儘寫眞を返されたのであるから。

それでお紫は夫の死んだ時にも母の助けを求むる心は無く、現在母がドコに住んで居るやら、それも知らぬ事になつてしまつた。

扱こゝでお客事の話に立戻る。元來、此お客事は秀太郎の思ひ立ちで、いつやら秀太郎が春田の源さんと云ふ友達の家のお客に呼ばれてそれが大變に嬉しかつたので、秀さんのお内でも今にお客をするのだ

と云ひだした。それで秀太郎の誕生日（即ち十二月の二十六日）が丁度善からうと云ふ事になつたので、丸瀬が一人で菓子だの、團子だの、拵へる、お紫は色々の贈り物をクリスマスの木にくゝりつける、秀太郎も去年の誕生日に母から貰つて今まで大事にして使はなんだ二十錢銀貨を、今日こそと取出して何とやら云ふ菓子を買つて來た。

秀太郎は母の側に仰向に寝ながら、さも嬉しげに御馳走の品々や贈り物の品々を數へあげて居る。お菓子に、お團子に、お茶に、林檎に、それから人形もある、旗もある、繪本もある、など、指を折つて居たが、フット急に思いついたらしく母の顔の方に振りむいて、

『オツカさん。なせ僕にはオバアさんが無いだらう。』
お紫は返事をしかねて居る。

「僕にもオバアさんがあると善いなア。春田の源さんなんぞ二人もオバアさんを持つてる。此間のお客の時にも一人のオバアさんが来て、お茶を汲んだり何かして居た。髪の毛の眞白い、親切なオバアさんで、僕の顔にもキッスをして呉れた。僕より外の者は皆んなオバアさんを持つてる。オバアさんと云ふものはクリスマス木の叔父さんが持つて来て呉れるのか知ら、えオツカさん。』

秀太郎は廿六日に生れたので、是れはクリスマス木の叔父さんから、お紫への贈り物であつたが、叔父さん方々に廻つて餘り忙がしかつたので、廿五日には廻りきれずに、とう／＼廿六日に持つて来たのだと云ふのが此家の話になつて居る。それで秀太郎は、オバアさんと云ふ者もやはりクリスマス木の叔父さんが持つて来て呉れるのかと思つて

居る。

そこに丁度丸瀬が、「秀さんにお湯をつかはせませう」と云つて来たので、暫くオバアさんの問題は忘れられてしまつた。

それから朝飯も済んで、クリスマス木の飾や何かをするにつけて秀太郎は又オバアさんの事を考へだした。オバアさんと云ふ者はクリスマス木の叔父さんが持つて来て呉れる事があるに違ひない。そして、秀さんが一日おくれて来たやうに、オバアさんも一日おくれて来るかも知れぬ。秀太郎は斯う考へて居た。

秀太郎は春田の源さんの所で、柔しい顔をした、懐かしい聲のオバアさんを見てから、何だか頻りにオバアさんが欲しくなつて、源さんの事が羨やましくなつて来たのである。源さんにはオツカさんもある、

オトウさんもある、赤ん坊の妹もある、猫もある、オバアさんもある、それに秀さんにはオツカさんと丸瀬との外に何んにも無のであるから如何にも寂しくてならぬ。若や、若しや、今日のお客にオバアさんが来て呉れたら、と思つたばかりで秀太郎はツク／＼するほど喜んだ。然し又考へて見ると、若しオバアさんが来るとすると、其オバアさんに贈るべき品物が無い。そこで、

『オツカさん。クリスマス叔父さんは今日オバアさんを僕に持つて来て呉れるのぢや無いか知ら。それだとアノ木につけてある贈り物が足りなくて僕困るがなア。』
母は決してオバアさんの来る事はないと答へた。従つて贈り物も入らぬと云つた。

秀太郎は黙つて居たが、まだ母の言葉を信じて居らぬ。晝が過ぎて、母は暫く寢室に行つて休息する、丸瀬は臺所に忙がしくして居る、其間に秀太郎は又獨で考へた。オツカさんはア、云ふけれど、用心の爲にオバアさんに贈るべき物を買つて来て置いたがよいと。それで秀太郎は臺所に行つて丸瀬にお錢を呉れと云つた。丸瀬は今忙がしいので、秀太郎の云ふまゝ、白銅貨を一つ渡してやつた。

秀太郎はそれを持つて驅けだして、二三町先のおもちや屋に行つて、腹の所を摘めばピイ／＼と鳴く美しい鳥を一羽買ひ取つたが、嬉しさの方に方角も忘れて、内に歸るつもりでズン／＼と先の方へ走つて行つた。折しも雪は降り出す、人はドン／＼と走り出す、往來は混雑を極めて居る。秀太郎は向ふから走つて来た小供に突飛ばされると同時に、後

から驅けて來た二頭立の馬車に驚かされて、キヤツと云つてソコに倒れた。人だかりがする、巡査が來る、何でも大怪我だと云つて、醫者が腕をまくつて來る、一時は大變な騒ぎであつたが、秀太郎は一向平氣で、泥だらけになつて涙はこぼして居るが、僕は何ともないと云ふ。馬車の中から下りて來た年寄つた婦人は、此寒いに兎も角もと云つて馬車の上に秀太郎を抱き上げて、内が知れぬなら一先づ警察署まで此馬車で送り届けてやりましようと言つた。秀太郎はジツと其老婦人の顔を見て居たが、

『ア、ナタ秀さんの所に來て呉れたオバアさんじゃ無いの』

老婦人は、それは何の事かと聞いた。秀太郎は今日の事の一部始終を話して、手に持つてゐる美しい鳥を老婦人に見せた。『ア、私が悪か

つた。あんまりキツイ事を云つて、とうとう會ふ事も出来ないようになつてしまつて』など、獨語を云つて居る。秀太郎には何の事やら分らぬけれど、何でもオバアさんは悲しくて泣いて居るのだから、是は何か見せて慰めねばならぬと思つて、ポケットの中を探して居たが、探し出したのは迷子札であつた。

『秀さんが道で迷つたら、是れ人に見せるのだとオツカさんが云つたよ。』

老婦人は『オ、それがあれば』と云つて迷子札を取りあげたが『ストークトン町、垂枝秀太郎』とあるのを見て、驚いたも驚いたか、いきなり秀太郎を抱きすくめて、『お前は私の孫だ』と云つた。

それから馬車は直ぐにストークトン町の垂枝夫人の家の前に付けら

れた。秀太郎は馬車から下りて母の手に飛びつきながら、

『オツカさん、オツカさん。僕はオバアさんにあげる物を買ひに行つたの。そうすると馬が秀さんを蹴たふしたの。そうすると、クリスマスマスの叔父さんが秀さんのオバアさんを連れて来て呉れたの。』

老婦人は震へた聲で、

『お紫、お紫。私が悪かつた。よくマア無事で居ておくれた。』

跡は記すまでも無い。賑かなお客事があつて、秀太郎は源さんのよりもモット善いオバアさんが出来たと云つて大喜び。オバアさんは又秀さんの贈り物の此鳥を、イツまでも大事にして取つておかねばならぬと云つて、嬉し泣きに泣いて居た。

(明治卅六年夏、家庭雜誌所載)

小供の導き

(西洋の或雜誌より反譯したもの)

春坊は今チヨコくと大急で往來を走つて行つた。春坊ことし四つになるが、其の短かい足が眞丸に太つて居るので中々早くは走られぬ。其跡を追ひかけて行く乳母も、是れも随分太つて居るので、喘ぎく走つて居る。此日は春坊の爲に大得意の日である。なぜかと云へば、春坊此日はじめてポケットのある上衣を着せられたのである。日本で昔風に云へば、始めて袂のある着物を着せられたのである。そこで春坊うれしくて堪らず、オツカさんや女中達に幾度か見せて大自慢をした揚句、今度は外に出て誰かに見せてやりたいと思つて、ウツカリ

して居た乳母の目を逃れて、今しも走つて行くのである。

春坊は夢中になつて走つて居たが、フト或小さな家の前で立ちどまつた。其家の入口には一人の婦人がポンヤリと立つて居た。春坊はイキナリ其婦人の前に歩み寄つて、

「オバさん、僕は春坊と云ふの。春坊の上衣にはコラこんな善いポツケットが付いてるの。オバさん見て頂戴な。そしてオバさん、コン中におカチ入れて頂戴な。エ、オバさん、おカチあるでしよう」
婦人はニコリともせず、むつかしい目付をして春坊の顔を見て居たが、

「そんなイヂの汚い事を云ふ者ではありません。間食をするのはお腹の爲に悪いものです。お菓子、の事かね、おカチくと云ふのは。

お菓子など存つたとして遣りはしません。それよりかサア早くバアヤの所にお歸りなさい」

と厳しい言葉。春坊はビツクリして逃だした。今の今まで光りかゞやいて居た此世界が急に暗くなつてしまつた。ポケットのある新らしい上衣を着て、皆の者には譽められて、サモ得意であつた所を、愛嬌のない六かしげなオバさんに叱られて、春坊は殆んど泣きだしそらになつて居る。それでやうやく乳母の所に走つて行くと、乳母は春坊の獨りで行つたのを叱る筈であつたけれど、ヒク／＼と震へて居る其の唇を見た時に、叱るどころか慰めるのに骨が折れた。

「オ、よしく。アノ厭なオバさんが春坊を叱つたの。オ、よしくバアヤが付いて居ますからね。珍田のオバさんなんぞ怖くはありま

せんよ。アノお人はね、子供の事なんぞ知らないのだから、一こと口を利いてもスグに子供を怖がらせてしまふ。ホントに困つたオバさんですなえ。オ、もうよし〜』

春坊は乳母の云ふ事など分りはせぬが、乳母に手を引かれて歩きながら、店に寄つてお菓子を買はうと云ふので、もうイツの間にか怖いオバさんの事など忘れてしまつた。

珍田と呼ばれた婦人は春坊と乳母との後姿を見送つて色々の感じを起した。乳母が自分の悪口を吐いて居るらしいのは左まで氣にも掛からぬけれど、春坊のアレほど美しかつた笑顔が忽ちに變つたのはドウした譯であらうか。自分は子供の爲をこそ思つたのであるに、其言葉がそれほど恐ろしく聞えたかと、思へば何とやら堪らぬよ

うな氣もして來て、ムシヤクシヤとして内に入り、編物などやりはじめたが、思へば又、ホんに子供は譯の分らぬ、面倒くさい、ぶしつけな、イヂの汚い者ではある。濱田の内では子供を甘く育てると聞いて居たが、知りもせぬ他人に菓子をネダルなど、今少しは羨もありませんもの。

此珍田嬢と云ふは、小兒の教育について大變嚴重な説を持つて居る人で、其説は誠に立派であるが、自分に子供を持つた事は無いので、其説を應用する機會も無く、説は只どこまでも説だけであつた。それで自分の古い友達は、或は死に、或は遠方に去り、或は結婚してしまふ間に、此人ひとりには色々偏屈な説を貯へて、イツの間にやら年を取つて、謂はゆる老嬢と化し去つて、今では此田舎に裏寂しい生活をして

居るのである。

珍田老嬢は今其のキチンとした小き居間に坐つて、一心に靴下を編みはじめた。然るに何とした事やら一向に心が編物の上に止まらぬ。どこやらから可愛らしい子供の聲が聞える。イツの頃から聞いた事も無い柔しい聲の響である。それで編物もうるさくなつて、次の間の食堂に行つて薔薇の植木の枯葉など撈りはじめた。すると又、其薔薇の花の真中から子供の顔の幻が見えて来る。永く、永く封じられて居た心の奥が、此子供の顔の爲に開かれたとでも云ふのであらうか。そうすると又それに連れて色々な昔の事が思ひ出される。久しいあいだ忘れはて、居た様々の心持がムラ／＼と湧いて来る。彼の子の愛らしき目を思ふと同時に、清しかりし昔の人の目元も思ひ浮べられる。其清

しき目元に情を含んで其人の我れに向ひし時、思へば短き楽しさであつたるよ。珍田嬢は斯く思ひつゝ、シヨールを堅く身に引纏うた。やがて其戀人の偽が現はれて、其短かき楽しさの消えた後、嬢は全く世に背いて、恨多き哀れの人となり了つたのである。其後、嬢は曾て我が愁ひを散じようともせず、寧ろ其愁ひを胸に潜めて、之を養ひ育て、居たのである。されば其れより久しき今、心は全く冷えきつた（と思ふ）今において、只彼の一人の小兒の爲に、昔の、昔の情でゝろが忽然として活きかへつたは、實に々々我れながら不思議の思ひがするのである。

翌朝珍田嬢は、是れも我れながら不思議な心の働きから、ツイ近處の菓子屋に行つて何やら少しの菓子を買つて來た。そして春坊が又昨

日のようにチヨコくと前の往來に出かけて来た時、嬢は我が家の門に寄りそうて、「坊や、チヨイトこ、にお出で」と手招した。

春坊はモウ昨日の事は忘れて居る。嬢は菓子を出して春坊に與へた。春坊は大喜びで其れを貰つて居る。嬢はサモ遠慮げに春坊の頬に接吻した。

乳母は此の變つた有様に驚いて、目を丸うして春坊の母親に其次第を告げた。濱田夫人は平生から珍田嬢の噂を聞いて氣の毒に思つて居たので、此後とも春坊を珍田さんに遊びにやつても善いと乳母に話した。

それから、毎日々々、春坊が往來に出る度に、珍田嬢はイツも門の側に立つて居る。一方は其よろめく足の到る所に愛と光の天地を作る

四歳の小兒、一方には其一生涯を寂しさと悲しさととの間に送つて来た四十歳の老嬢、此二人の間にイツか不思議な友情が生じて来た。時々春坊が此オバさんに招かれて、手を引きあつて庭の芝原を歩く事もある。植木の種々を指さしては、廻らぬ舌に其名を聞いて喜んで居る事もある。菓子は必ず毎日春坊の爲に用意せられてある。嬢の教育説は元の儘であるけれど、今はそれも力を持たぬと見える。只モウ春坊の來て居る間は嬉しくて楽しくて、歸つた跡は寂しくて悲しくて、又明日の日は待ちに待れる程であつた。

然るに或朝、嬢が窓から眺めて居ると、春坊が例の如くチヨコくとやつて来た。黙つて見て居ると、オヤク門前を通り過ぎる、こちらをば見向きもせず。そして今日は獨かして跡から乳母の姿も見え

ぬ。是れはドウした事かと云ふに、春坊二三日前に大通の人形店で兵隊の列をして居る所を見て、それが欲しくてくならぬけれど、乳母がドウしても買つて呉れぬ、それから春坊の心は只モウ兵隊の事ばかり思うて居る、それで今日は乳母の目を逃れて、自分ひとりでアノ店に行きさへすれば、必ず兵隊が貰へる事と思つて、それでセツセと急いで居るのである。珍田のオバさんの事など今日は全く忘れて居るのである。

珍田嬢は春坊が獨りでチヨコくへ行つたのを見て、キツト内の人知らぬ間に出たのであらうと思ふと、何だか氣遣になつたので、急いで門まで出て見て居ると、春坊は遙の向ふに猶チヨコくと走つて居る。嬢は何を思ふ暇もなく其まゝ、駈けだして跡を追うた。丁度嬢が

追ひつかうとした其時、春坊はチャツとそこに立ち止まつた。何をするかと思へば、向ふ側の店に例の欲しいくと思ふ兵隊の人形の飾つてあるのが目について、脇目もふらず道を横ぎつて行かうとするのである。そこに馬車が駈けて来る、ソレ危いくと云ふ聲がする、馭者は手綱を搔いくつて馬を急に止めうとする、ドタ／＼バタ／＼と騒ぎが始まる、春坊は其中に何にも思はずチヨコくと走つて行く。今にも誰ぞ抱き止めねば、あはれ此蕾の花は蹄の塵と消えねばならぬ。纔に今駈けつけた珍田嬢は、アレ危いと云ふ中にも、さすが暫く躊躇うたが、其暫くの瞬間に、思へば何の楽しみも無い此身、せめて此子に此頃の慰めを得て居るに、若しも此子を失ふならばと、ヒラリと閃く決断に我が身の危さは全く忘れて、其まゝ馬の前に駈けこんで春坊を

引んだかへ、逃げる拍子に我が頭を烈しく何かで打たれたと思ふたきり、グラ／＼と目が暗んで、其後は何んにも知らず。

やつと氣が付いて目を開けば、身は我が家の寢床の上に横たはつて、側には若き婦人が付いて居る。其婦人の顔を見れば、問はずと知れた春坊の母親。珍田嬢はやうやく記憶が戻つて来て、「アノ子は、春坊は無事ですか」と先づ問うた。濱田夫人は嬉し涙に暮れながら、嬢のお蔭で春坊は何事も無く助かつたが、嬢は其時馬に蹴られて、今日で三日と云ふもの人事不省であつた始末を物語つた。嬢は安心したもので、それでも春坊の顔を見ぬ中には、まだ何やら氣に掛かると云ふので、夫人は直に春坊を連れて來た。春坊は相變らずの元氣で、イキナリ嬢の寢床に飛びあがり、様々其時の話をしながら嬢の顔など突ついて居

る。嬢は全く例の教育説をも抛つて、そんな事せられても無駄など叱りもせず、只春坊の手を取つて、「今にオバさんが善くなつたら、春坊と一しよに行つて兵隊の人形を買ひましようね」

全快の後、珍田嬢は濱田夫婦の申出に依り、其寂しき獨住の家を去つて濱田家に引移り、住心地よき一室を借り受けて、絶えず春坊の見舞を受けながら、楽しき日々を送る事となつた。(をばり)

猫すて、戻る野道や秋の風
 白壁にぶつつけて見る熟柿かな
 間びきたき人間多き花見かな
 母うせて人なつかしき春日かな
 落葉かきて賣らばやと思ふ貧家哉
 海の月、五尺ばかりの身は何ぞ
 猶刺すか秋のあぶれ蚊あはれ也

細君の説法

(是れは英國に有名なるミセス、コーツルス、カーテン、レクチュアの中から二三節を抜いたのであります。西洋の細君が御亭主に向つてドンナ説法をして居るか、それを見るのも一興でありましょう。)

(一) 五圓の金を友達に貸したる罪

モシあなた、あなたは中村さんに五圓お貸しなされたとネ。ヘン、呆れもしない、あなたは有りあまつた金持ですからね。ア、馬鹿らしい、誰が五圓と云ふお金をアナタに貸しますかよ。女房はこんなナリをして、眞黒になつて内で働いて居るのも知らずに。マア考へても御覽なさい、五圓あれば、色々な事が出来るぢやありませんか。それを

往來で拾つてでも来たかのように、本當にアナタのような馬鹿はありはしない。私が繻子の帯側を欲しいと思つて居るのは三年このかたの事ですよ、それも五圓あればチャンと立派に出来たのちやありませんか。私はどんなナリをしても善いのでしようよねえ。皆がソウ云ひます、私はアナタの女房としてイツでも不似合な身なりをして居るテ。全くソウですもの。それでもアナタには何とも無いのですからね。そして外に出ては友達や何かに善い顔ばかりして。成程、人はアナタの事を氣前が善いとか何とか云ひましようよ。そしてそれが皆んな家内の者の頭に掛かつて来るのです。

娘達にも帽子を買つてやらねばならぬに、ドコから其お金が轉がつて來ますよ。五圓の半分もあれば買へただけけれども、モウ仕方が無

いから帽子なしで外に出しましようよ。娘だつてヤツパリあなたの子でしようにねえ。

今日は又今日で役人が水道の税を取りに來ましたよ。だけどマア考へて御覽なさい、税なんぞドウして拂つて行かれるものですか、人が貸せとさへ云へば直に五圓も投出してやるような人に。

それから、あなたはマダ御存じあるまいが、今朝源太が寢室の窓硝子を叩きこわしましたよ。私は硝子屋を呼んで直に繕はせて置かうと思つたけれど、五圓も人に貸したと聞いてはソナ事など仕ては居られません。風の吹込む破れ窓の下に子供を寝せるのは可愛そうだけれど、それもアナタの心柄だから仕方が無い。源太は此間から風も引いて居るが、破れた窓の下に寝たなら屹度六かしい病氣になりましよう

よ。そして死んだら嘸あなたも満足でしようよ。窓なんぞ迎も繕事
は出来やしない。

それから又、此次の水曜日には火災保険の掛金をせねばならぬが、
どうしてソナナものが拂へるでしようかねえ、アノ五圓があればお釣
が来るのだけれど。ア、もう火災保険も駄目になつてしまつた。そし
て此頃の火事の多いこと、私なんぞ夜ツピて寝られやしない。それで
アナタは何とも無いのですからねえ。氣前の善い人は違つたものだ。
女房や子供は焼殺されても、友達に金さへ貸して居れば氣が済むのだ
から。

ア、馬鹿らしいく、此夏は鎌倉にでも行かれるかと思つて居たの
に。清はアノとほり病身で、せひとも海岸の空氣を少し吸はせねばな
らぬと云ふのに、可愛そうに其れも駄目になつてしまつた。もうく
ドツコにも行かれやしない。内にはばかり閉ぢこもつて居るのだ。ねえ
アナタ、そうですねえ、それが善いのですねえ。清はいづれ肺病にで
もなりましたらよ。私はモウ明らめました、アノ子は死んでしまひま
すよ。子供を助けるよりは友達に金が貸したいと云ふのだから仕方が
無いサ。

アラク、あなたにはアレが聞えませんか。窓の板戸がガタ／＼が
タ／＼と風に扇つて居る。あれも早く直したいと思つたけれどモウ迎
も仕方が無い。アラク、煙突の中に煤の落ちる音がする。ナニ、掃除
をさせろですと。掃除も只では出来ませんからねえ。五圓も棄て、歩
くようドウして煙突の掃除まで出来るものですか。オヤ、鼠が天井

を飛びまはる。ナニ鼠ワナを掛けるですと。鼠ワナも只では買へませんからねえ。毎日々々五圓づゝも振りまくようでもドウして鼠ワナなど買へるものですか。

あゝく、まだそれから菊も齒醫者に連れて行かねばならぬけれどそれもモウ迎も駄目だ。可愛そうに齒が三本も缺けて、あれが段々悪くなつたらキリヨウも何もメチャくだ。あれさへ直せばドンナ立派な所へでも嫁入が出来ただけれど、齒の無い娘を買ひ人なんぞありはしない。あゝく私達の死んだ跡でアノ子は嘸困る事だらう。それでもアナタには何とも無いのですからねえ。あゝく幾ら云つても駄目な事だ。あなたの勝手に五圓でも十圓でも振まいてお出でなさい。

△シヤツの釦問題

あなた今朝何だつてアンなに怒つたんですよ。オヤ、又此人は口笛を吹くよ。口笛なんぞおよしなさい。あなたは本當に人を馬鹿にしてる。昔はソウでも無かつたのですがねえ、あなたは段々にイケナクなつてしまふ。ナニ、もう寝せて呉れですと。厭です、厭です、寝せる、ものですか。今より外に話す時はありはしない。マアお聞きなさいよ。タマに私が小言を云ふのちやありませんか。

あなたマア考へて御覽なさい。只つた一度シヤツの釦が取れて居たからとて、何も屋根の飛んで行くほど怒鳴らなくなつて善いでしょうにねえ。何ですと、怒鳴りはしなかつたんですと。あなたは自分の怒つてる時には何んにも分らないのですよ。あれが怒鳴つたので無くて

外に怒鳴りようがありませんかよ。一體シャツの釦の取れた位が何ですか。ためしにヨソ外の女を女房に持つて見たが善い、あなたの不平がソナ事ことで済むものですか。私は本當に針を手から離した事は無い程ですよ。あなたと子供との爲に私は丸で奴隷になつて居るのですよ。そして私はドンナお禮を貰ふでしょう。馬鹿くしい、一生に只つた一度シャツの釦が取れて居たからとてスグにお叱りを戴くのだから。え、く只つた一度ですとも。一度で無くたつて二度か三度ですよ。私くらゐ善く釦に氣を付ける者はありはしないのだから。あ、惜しい事をした、婚禮前にあなたの持つて居たシャツを取つて置けば善かつたものを。それに釦が付いて居たか居なかつたか見せてあげたかつたものを。

ナニつまらない事があるものですか。あなたはイツでもソナ事ことを云つて人を押しつけてしまふ。あなたは自分の怒る時にはサンザ怒鳴つておいて、そして人が何か云へば直に黙りこんで聞きもしない。男をとこと云ふ者は本當に勝手なものだ。女くらゐ割に合はない者はありはしない。

あなたの考へでは、女房なんと云ふ者は亭主のシャツの釦の事ばかり考へて居る者と思つてゐるのでしよう。男はソナ考へで結婚するのだもの、女の身こそ可愛そらな者ですわねえ。ヤレ釦が取れた、ヤレ何がドウした、斯がドウした、そんなウルサイ事ばかりが女房の役目なら、日本一の男にでも結婚はせぬが増した。ナニ、結婚せずにドウするかと云ふのですか。立派にやつて見せますさ、あなたのような男

なんぞ無くたつて支へはしませんよ。

それに私ソウぢや無いかと思ふのですよ。シャツの釦が獨りでに取れたのぢやありませんまい。屹度あなたが引ちぎつておいて、そしてアソナ事云ふのでしよう。それに違ひありませんよ、あなたイツでも大業に無理を云ふのですもの。一體そうく釦の取れるのが不思議でならない。私くらゐ釦の事でウルサイ目を見る女は無いのだもの。本當に不思議でならない。

然しモウそれも永い事は無いのだから、私も助かりますよ。私はあなたに責め殺されるに極つてますからね、モウあんまり永く御面倒は掛けません。アラ此人は笑ふよ。笑ひごとですかよ。善ござんす、善ござんす、人が死ぬると云ふのに、タントお笑ひなさいよ。私は何ん

にも云はずに黙つて居るけれど、日にく瘦せ細つて行きますよ。今に私が亡くなつたら、どんなにか善い後妻が来て、嘸かし善く釦の世話をする事でしょう。其時になつたらこそ始めて違ひが知れましよう。其時私の事なんぞ思ひ出したつて何の役にも立ちませんよ。

いゝえ、私やアナタの云ふようなソソナやかましい女ぢやありません。あなたこそヤカマシ屋で、何でも斯でも大業に怒鳴りたてるぢやありませんか。それに若しか私が同じように喋べりたてたら、それを大變な事になりますよ。一度あなたにガミく云ふ女房を持たせて見たい。そしたら違ひが知れるでしょう。ナニもう是れで澤山ですと。馬鹿におしなさい、私がソソナ女ですかよ。

えゝもう、是れからドウしたら善いだらう。あなたは毎日々々ドレ

もコレも鉦を引きちぎる、それを一々付けて居て堪つたものではない。
私はモウ鉦の事なんぞ知りませんよ。あなた鉦つけの女でも一人お雇ひなさい。それが善い、それが善い。そしたら私はモウ………そしたら私はモウ………

△傘を人に貸した結果

あなたモウ是れは正月から三本目ですよ、蝙蝠傘を無くするのが。構ふのですかアノ人なんぞ、雨の中に突出してやれば善いのに。濡れて惜しいような物を身に着けて居るぢや無し、構ふもんですか。ナニ、風を引く。アノ人が風を引くなんと云ふ柄ですかよ。アレをお聞きなさい、アノ雨の音をさ、ザア、ザアと窓に當つてるぢやありませんか。

んか。ナニ、一向に聞えないんですと。馬鹿におしなさいよ。アノ音の聞えない聲がありますか。此分ぢや屹度五六週間も續きますよ。その間チヨツとも外に出ずに内にばかり居るのですかねえ。オホ、あなたはアノ人が傘を返すとお思ひなされるの。今時、借りた傘を返すような人があるものですか。私やソナ事を眞に受けるような馬鹿ぢやありません。アレお聞きなさい、段々烈しく降つて來ますよ。これで六週間も降りつめて、内には傘が一本も無いと來て居る、マア何といふミヂメな事だらう。

明日から子供はマアどうして學校に行くだらう。此雨の中に傘なしではやられないし。仕方が無いから私はモウ明らめた。子供には何んにも覺えさせなくて善いのだらうから、幾日でも内にばかり閉ぢてめ

て置くとしよう。それで大きくなつて何んにも知らなかつたらお父さんを怨むが善い。子供の事なんぞチットも考へないお父さんだもの。お、それ、私あなたに傘を貸した譯を知つてますよ。明日私がオツカさんの所に行く筈なものだから、それでアナタ態と傘を貸したのでしよう。私がオツカさんの所に行くのを邪魔しようと思つて、それでアナタ態と傘を無くしたのでしよう。あなたがソナ事したつて私行きますよ。雨がバケツを引くりかへすように降つても私行つて見せるから善い。車になんぞ乗るものですか、そんなお錢がドコから出ると思ひます。あなたぢやあるまいし、お錢は使ひあるいて子供は乞食のようにしておく、そして蝙蝠傘は無くしてしまふ。そんな事で家持が出来ますかよ。

マアお聞きなさい、アノ雨の音を。私それでも明日オツカさんの所に行きますよ。雨の中をズブぬれになつて歩いて行つて見せるから善い。私は屹度それで死ぬかも知れませんが。馬鹿な女ですと。私が馬鹿よりかアナタが幾ら馬鹿ですか。吾妻コートは無し、傘は無し、風を引くに極つてる。それでもアナタは何とも無いでしようよ。お醫者の書付が來てからビックリなさるな。其時はじめて、傘を人に貸すとドンナ損があるかアナタにも分るでしよう。私はアノ晴衣を着て行きますよ、アノ帽子も冠つて行きますよ。そしてそれを皆此雨に濡らしてしまふのですよ。ナニ、着て行かねばならぬ事はないと。いゝえ私は着て行きますよ。ハイ、私は見苦しいなりをして外に出ることは嫌ひですよ。私が月の中に幾度此家の鬨を跨

ぐと思ひます。タマに出るには少しは人らしいナリもせねばなりませ
ん。ア、善く降る雨だ、窓も何も破れてしまひそうだ。

あゝ、明日は本當にドウしたら善いだらう。ドウしたらオツカさ
んの所に行かれるだらう。ダツテ死んでも私行かなきやならない。厭
ですよ、人の傘なんぞ借りる事は。若しかアナタが明日ドコからか傘
なんぞ持つて来ようものなら、私スグに窓から往來に投げ出して棄て
てしまふからソウお思ひなさい。私自分の傘で無くちや厭、それで無
くちや持たない方がヨツポト善い。

そう、それにアノ傘はツイ先達て爪金を新しく仕替へて置いた
のだつた。馬鹿らしい、爪金まで新しくしておいて人に呉れてしまふ、
あなたはそれで善いでしょうよ。あなたはそれで安々と眠れるでしょ

うよ。辛抱づよい女房の事や、可愛そらな子供の事は何んにも考へな
いのだから。あなたはモウ蝙蝠傘を人に貸す事より外、何んにも考へ
ないのだから。

あゝ、明日行かなかつたらオツカさんが何と思ふだらう。何です
と。幾ら先つき私が行くと云つたからとて、ドウして行かれるもので
すかよ、此雨に。考へても御覽なさい。行けば少しぐらゐ小使も貰つ
て來られるのだけれど、傘の無いばかりに其のお金も貰ひそこなふ
し。あゝ、本當にツマナイ。

子供だつてソウですよ。幾ら何だつて學校にやらすに置けますかよ。
降つても濡れても學校にはやりますよ。そして風でも引いて死んでし
まつたら、それこそアナタのセイですよ。私本當に子供が死んでしま

つても知りませんよ、傘を無くしたのはアナタですもの、私ホントに知りませんよ。善でござんすか、善でござんすか、私ホントに知りませんよ。アラくぐグウくぐと鼻をかいて、ホントに憎らしいこと。

△オツカさんと同居するの説

あなた、今夜はモウお風は少しは善いのですか。明日はもうスツカリお直りでしょうね。本當に氣をつけて下さいよ。あなたは平生から弱いのですもの。

今夜はオツカさんが大變に喜んで行きましたね。アラあなたモウおよるの。モウちつと目をあけて入らつしやいよ。オツカさん今夜は本當に喜んで居ましたねえ。ドウだか知らないツて。アラあんな事を。

あなた見て居て知れてるぢやありませんか。本當にオツカさんはココに來るとイツでもニコくして上機嫌なんですもの。柔らかで、滑くて、手ざわりが善くて、私あんなの縷子機嫌と云ひますわ。そしてオツカさんが又何かにつけてアナタの肩を持つ事と云つたら、それは大變なものですよ。私はイツでもソウ思ふのですよ。あなたが若しかオツカさんの本當の子であつても、今より上に好きようはありはしまいと。本當ですよアナタ。あなたソウ思ひませんか。よう、返事して下さいよう。ドウだか知れたものぢや無いツて。アラあんな事を。あなた見て居て知れてるぢやありませんか。オツカさんはアナタの喜ぶような事を考へるのが一番の樂みなんですよ。

あなた此前の木曜日の晩の蠟のスティューを覺えて居らつしやるでし

よう、大變たいへんにおいしいと仰おつしやつた。あれは皆みなオツカさんが拵こしらへたのですよ。『お楨まさや、今夜こんやは大層たいそう寒いから何なんぞ暖あつたかい物を拵こしらへてあげたら善よからう』なんて云いふのですよ。それでアノ晩ばんはアンナ嬢かきのスキューてきが出来たのですよ。アラあなたモウおよるの。モウちよつと、五分間ふんかんだけ起きて、下くださいな。タマに私わたしがお喋しゃべりをするのですもの。それからアナタのお留守るすに、上靴うはぐつが火ひの側そばに置いて暖あためてゝもあるまい者ものなら、それはオツカさんが悪わるく云いひますよ。それは感心かんしんですつて。感心かんしんですとも、オツカさんはイツでもソシナですよ。それに此頃このころはアナタにあげると云いつて一生懸命しやうけんめいに銀貨入ぎんくわいれを編あんで居ゐますよ。それがモウ五六ヶ月げつも前まへからの事ことなんですもの。私わたしあなたに内證ないしよにしておく約束やくそくだつたけれど、マアほんとに嬉うれしいぢやありませんかねえ。あの悪わるい目めでさ、あの年としをしてさ。

それからオツカさんは又料理またれうりが上手じやうずでしてねえ。つまらない物ものでも本當ほんたうにおいしくして食たべさせますよ。私わたしどうかしてオツカさんのようにしたいと思おもふけれど、トツテモ及およぶ事ことぢやありません。それやママやらせて御覽ごらんなさい、色いろんな物を拵こしらへて食たべさせますよ。私わたしには逆とてもそれが出来できません。それに私わたしや子供の世話せわに手ては取とられるし、仕したいくとは思おもつても、逆とても料理れうりまでは手てが届とどかないですもの。アラあなた寝ねちや厭いやですよ。モウ五分間ふんかんで善よいから聞きいて下くださいな。私わたしねえ、あなた、此間このあひだからソウ思おもつて居ゐたのですよ、ドウかしてねえ、オツカさんを内うちに來きて居ゐて貰もらつたらと思おもつてね。アラあなた寝ねてらつしやるの。嘘うそ、嘘うそ、ツイ今咳いませきをなさつたぢやありませんか。本當ほんたう

に若しかソウしてオツカさんに來て居て貰つたら、どんなにか便利だらうと私思ふんですよ。そうすればアナタだつて毎晩およる前に暖い物も食べられるし。何ですって、そんな物は入らないツテ、入らないものですか、あなた體が弱いのですもの。

それにオツカさんは經濟が上手だからお錢も残して呉るだらうし。買物と來たらオツカさんほどの上手は又とありはしませんからね。本當にそれは重寶ですよ。

それからお菓子を持つる事も上手だし、お酒だつて手作をやるし、ジヤムは大變に得意だし、それに縫物は御飯より好で針を離した事は無いと云ふ人ですもの。子供の着物の繕ひなんぞ獨りで引受けて呉れますよ。それにアナタが夜遅くお歸りの時など、どうせアナタはおつき

あひもある事だし、おりに遅くなるのは其筈ですから、其時なんぞイツまでとも起きて、呉れますよ。そしてそれがアノ人には嬉しくて堪らないのですもの。

そんなですからねえ、あなた、私どうしてもオツカさんに來て貰ひたいと思ふのですがねえ。イケナイでしょうか、え、あなた。あなた、寢てらつしやるのちや無いでしょうか。返事して下さいな。え、善いでしょう、ソウしても善いでしょう、ソウしても善いんでしよう。アラいけないの、いけないのですって。マア、私どうしよう、マア……。

(明治卅六年夏、家庭雜誌所載)

植ゑし人は白髪になりて山の脊に、三十年の杉村立てる。
 静かなる一夜の寒さ地に入りて、霜柱 たつ白金の里。
 朝日さす目黒の里の畑幾畝、霜おきわたす壬生菜、辛菜。
 我家に爐あるを知るや君と共に、此の長き夜を語らまほしき。
 さゝがにの糸にかゝれる花瓣の、風に吹かるゝ是や我戀。
 いひいでゝ辛かりせばと徒らに、亂るゝ心あはれとも見よ。
 今はたゞ君が御膝に取りすがり、泣きに泣かばや心ゆくまで。

敵

(兵隊となりたる露西亞農夫の話)

一體何で鐵砲なんぞ持つて人を撃たなきやならないのか、和助は其譯を知らなんだ。苟且にも殺人をするのだもの。

「馬鹿だなア」と友平はそれを嘲つた。

「人の前でそんな事を云ふと笑はれるよ。考へても見な、敵ぢや無いか、撃たなくてドウする」

「己にも敵があるのか」と和助はビツクリして問ふた。

「當り前よ、お互みんなの敵ぢやないか」

と聞かされて和助は眞に驚いた。彼は世界中に一人の敵も持たぬと信

じきつて居たのだもの。寺の和尚さんがイツでも『和助を見よ、あの男を可愛がらぬ者があるか』と云つて居たのだもの。

然るに、それが今、見も知りもせぬ何千と云ふ敵を持つて、そして其敵が鐵砲を持つて押寄せて來ると云ふのだもの。

マア何と云ふ恐ろしい事だらう。彼は一日も早く其敵を見たいと思ふた。『一體マア其敵はドウして己を知つたのだらう。己はそんな人に

爪の垢ほども悪い事をした覚えは無いのに。でもマア善いわ、今に會つたら一言位話も出來やう。そしたら思ひ違ひも解けるか知れぬ』

友平は狂者の如くに高笑をして和助を嘲り、國の政治と云ふ事を知らぬ馬鹿者だと罵つた。

『いゝやソウで無い』と和助は云つた。

『何にしても馬鹿らしい事ぢやないか、敵が鐵砲で己を撃つと云ふのに、何故己は態々撃たれに行くのか。雪や氷の中まで分けてさ。彼奴の來るまで待つて居たらドンなものだ。そしたら又、彼奴も考へ直すか知れぬぢや無いか』

それでも和助はやはり皆の者と一緒の勇ましく進んで行つた。日の經つに連れて、彼は少しも早く敵を見たいと、其事ばかり氣に掛けて

『敵はまだ來ぬか』敵はまだ來ぬか』と毎日人に問ふて居た。『和助、今にドツサリやつて來るから驚くな』と或者は答へた。

或日の事、隊中が急に色めいて騒ぎ出した。敵！敵！敵は終にホントに現れた。騎兵僅かに五六騎、それでも敵に違ひは

無い。十餘騎のコサツク兵が列を抜いてマツシグラに駆けだした。ア

ツケに取られて居る和助の側を駈け抜けて。

『ありや何しに行くのだ』

『敵を襲ふのよ』

友平は不意に和助の腕を攫んで云つた『それあの音聞えたか』

『何を』

『鐵砲を撃つてるぢや無いか』

然り、和助も亦砲聲を聞いた。火蓋は既に切られたのである。今に自分の番が来るのだ。和助は動悸が喉元まで詰めかけて居る。それも其筈ぢや無いか。大隊長は列外に馬を乗り出して、狂者の如く其劍を振りまはしながら、兵隊に向つて何事か叫んだ。顔の美しい小柄な少尉殿が、それに續いて出来るだけ高く其劍を振あげて閃かした。斯くて彼等は一度にドット攻め寄せた。

忽ちにして和助は物に躓いた。見れば死人が雪の中に轉つて居る。

體は硬ばつて、片手は雪の中に埋もれて、片手は拳を握りかためて居る。

和助は初めて死人を見て、全身がズーンとした。

敵は斯くの如く我等を殺すのか、何にも知らぬ悪い事もせぬ者を、

敵は斯くの如く殺すのだ。して見れば敵がまだ餘計に人を殺さぬ前に少しも早く之を撃つのが善い譯だ。待て、待て、今に己が出くはしたら。

和助の氣は荒れに荒れて、少しも早く敵に遭ひたいと燥つて居た。

程なく前面に、黒い長い線が見えて來た。それが即ち敵なのだ。進め！進め！忽ち敵陣に砲火が閃く。和助の朋輩は左右にバタ／＼と仆

れる。和助の體にも血のシブキが掛つた。悪人よ、暴漢よ、進め！進め！

和助は血みどろになつた其朋輩の上を越えて進んだ。地から手が生えて彼を引止める様な心地もするけれど、彼は敢てそれを振切つて進んだ。

進め！進め！彼の美しき少尉は常に前面に立つて居る。忽ちにして又、全隊腹這になつて、パチ、パチ、パチと屋根に降る霰の如くに砲撃する。死骸を乗り越えては、血の中、雪の中を這つて行く。それかと思へば忽ちにして又起きあがり、進め！進め！進め！

モウ敵が前に見えて居る。あれが憎むべき敵なのだ。『劍を抜け！進め！突け！』

忽ちにして一人の小兵が和助に切つて掛つた。

『貴様！貴様が敵か。己や貴様を見た事も無いぞ。それに貴様、己を殺すか。ウヌ畜生奴！』

和助は待ちかまへて劍を以て其敵を刺し通した。

進め！進め！進め！小柄の少尉は矢張り前に立つて進んで居る。忽ちにして一隊の騎兵が突進して來た。泡を噛んで嘶き立つたる荒駒を跳らせて、恐ろしき劍をば打振りく、縦横無盡に駈まはる。少尉の顔は眞向より踏みつぶされ、人は人を踏み、馬は馬を踏み。和助は只狂氣の如く、切る、刺す、突く、打つ、滅多切り、滅多打ち、敵も味方も分らばこそ。恰も其時忽然として……忽然として變な氣になつた。何やらダクくと流れて居る。暖かい、生暖かいものが流れて居る。

そして氣が遠くなつて、妙に體が弱つてしまつた。
それからフット夢の醒めた様に氣が付いて見れば、和助は寢床の上
に居る。右にも左にも向側にも寢床がある。そしてどれにも人が寢て
居る。

『何處だ、何處だ、此處は何處だ』

周圍には見た事の無い人ばかり立つて居る。一人は手眞似で『靜に
せよ』と云ふ。そして隣の床に寢て居る男が『此處は敵の病院だ』と
露西亞語で教へて呉れた。

『それぢや己等を殺すのだらう』

『そんな事があるものか。療治をして呉れるのだ』

サア分らなくなつて來た。敵が自分を療治して呉れるとは。それぢ

や敵でも何でも無いのだ。それなら矢張り友達ぢや無いか。彼は初ッ
ウ思ふて居たのだ。

で、若しソウとするなら、彼は畜生の様な事をして來たのだ。

和助は十字架を空中に畫いて、黙つて泣きだした。悪い事をした、
悪い事をした。彼は啜り泣いて居る。友平が嘘を吐いたばかりに、
こんな親切な人達を、敵だ、敵だと思ひ込んで居たのだもの。

(明治卅七年秋、平民新聞所載)

逝きし兄、逝きし妻と子、打並び、立てる墓場よ、我れ去りがたき。
 去りがてに墓場の庭にたゞめば、冬の林に鶯啼きしきる。
 我妻の墓の卒塔婆の偈に曰く、一夜落花雨、滿城流水香。
 同じ偈に、禪味幽かに又曰く、梅瘦占春少、庭寛得月多。
 子の墓は母の墓より低くして、風雨いつとせ朽ちんとすらし。
 悲しきに泣かざる男の子、情に餓ゑて、今些かの嬉しきに泣く。
 何となく旅寝うれしき二夜三夜、家なき人の趣きぞ是れ。

一人の要する土地幾何

トルストイ

(一) 占めたく

或時、都の姉が田舎の妹を音づれた。姉は商人に嫁し、妹は農夫に嫁して居た。二人は茶を飲みながら物語をした。姉は反身になつて、都の暮しの便利な事、子供を奇麗にして置く事、おいしい物の食べられる事、芝居見に行かれる事など自慢した。妹は少し困つたが、負けぬ氣になつて「私はヤツパリ田舎が好き。田舎には面白い事の無い代りに心配も無い、そりやアナタは立派にお暮しですさ、けれど諺にも云ふ通り、利益には損と云ふ弟が付て居る。明日が日にもアナタが私

の家の門に立つまいものでも無い。そこになると田舎の暮しは確かなもので、いつになつても何不足はありません』と遣りかへした。

妹の亭主パクホムは暖爐の側に横になつて、女達の話しを聞いて居たが『そうだ、全たくそうだ。年中土を掘つて暮して居れば、こんな安心な事はありません、只地面の少いのが一つの疵だが、地面さへ澤山にあれば、悪魔が来たつて恐い事は無いわい』と口の中につぶやいた。

先程から暖爐の後に隠れて居た悪魔は一部始終を聞取て、頷きながらホク／＼して『占めた／＼。ヤツパリ地面が欲しいと云ひくさる。今に地面を澤山呉れて此方の者にしてやらア。』

(二) 地主になりすました

此農夫等の地主は温和なる貴婦人で、元は農夫等と至極仲善くして居たが、今度軍人あがりの監督者を置いたので、農夫等は辛い目を見せられる事になつた。パクホムなども毎度罰金を取られては、涙をこぼして怒つて居た。

其年の冬になつて、貴婦人が其土地を此野武士に賣ると云ふ噂があつた。農夫等はそれを聞いて震へあがつた。そこで皆が貴婦人の處に行つて、土地を自分等に賣て呉れと願つた。貴婦人は承知した。それから彼等は相談して、共同で其土地を買はうとしたが、幾度集會しても話がチツトも進まぬ。實は悪玉が其中に手を出して一致を妨げて居たのである。

それでトウ／＼銘々の力次第別々に其土地を買ふ事にした。貴婦人

はそれにも同意した。
 パクホムは其の隣人が十町の土地を買つたと聞いて少しく焼けて来た。そこで女房と相談の上、馬を賣り、蜜蜂を賣り、息子を奉公に出し、無理な事して七八町の土地を買ひ取つた。それから諸事好都合に運んで、一年の後には借金も拂つてしまつた。パクホムは今は地主になりすました。野に出てツグぐと見渡すに、元の土地とは丸で違つた者の様であつた。

(三) 急に心が動いて

斯くてパクホムは頗る愉快に月日を送つて居た。そこに或日旅の農夫が来て、南の方ヴオルガ川の下流では、大麥の間に馬が隠れて見えぬ程土地が豊饒で、或農夫の如きは全く二本の手ばかりで出かけて行つて、去年一度の收穫に千圓の利益を得たと云ふ話をした。

パクホムは急に心が動いて、次の夏、遙々とヴオルガ川を下つて其土地を見に行つた。行て見れば聞きしに優る有様で、其村々は喜んで移住民を迎へ、一人につき五町づの土地を貸與し、猶金ある者には何程にても土地を賣り渡すと云ふのであつた。パクホムは早速内に歸つて来て、一切の物を賣拂つて金に代へ、家族と共に其の新開地に赴いた。

(四) 乗氣になつて

パクホムは其新開地に落ちついて、今迄に二倍する土地を得て、今

迄の十倍も善く暮して居た。

斯くて最初の間は何もかも善く見えて居たが、段々そこに慣れて見ると又色々の不足が起つて來た。收穫の一番多いのは小麥であるが、小麥の出来る土地は甚だ少い。誰もそんな土地ばかり欲しがるので争ひが起る。金持の農夫は善い土地を握つて容易に離さぬ。パクホムは止むを得ず年々借地をして小麥を作つたが、何分往返の道が遠くて不便でならぬ。それに考へて見れば、自分に田地を持つてそれを人に貸して小作をさせるのは至極善い商賣である。パクホムは何卒して田地を買ひたいくと考へ出した。

五年たつ中にパクホムは大分金を残した。そこに或農夫が借金に困つて二百町の田地を棄賣にすると云ふので、パクホムはそれを買ひに

掛つて、ネギリコギリの末が千圓と云ふ所まで漕ぎつけた。そこに又旅商人が來あはせて、バスキル地方に行けば千圓で二千町の土地が得られると話した。パクホムは乘氣になつて色々の事を尋ねた。『十二箇長に何か土産でも呉れて欺せば善いのだ』と旅商人は答へた。そこでパクホムは考へた。同じ千圓で二千町の土地の得られる處があるのに、何もコンナ處に居て二百町ばかり買ふには及ばぬと。

(五) 何がをかしいか

パクホムは女房に留守をさせて、一僕を連れて終にバスキル地方に出かけた。

二人で三百里ばかり歩いて漸くソコに到着した。成程茫々たる平野

が川の邊りに横たはつて居る。土人は牧畜ばかりして、少しも土地は耕さずに、羊の皮で蔽ひをした車の中に住んで居る。パクホムの姿を見て、土人はゾロ／＼と車の中から出て来て、此の見なれぬ人を取巻いた。都合よく通辯が居あはせたので、パクホムは土地を求めに來た旨を彼等に告げた。

彼等は喜んでパクホムを車の中に招じて羊の肉を切つて御馳走した。パクホムは土産物を出して彼等に贈つた。彼等は何か御禮をした。いから遠慮なく欲しい物を云つて呉れと通辯に云はせた。「私の一番好きなものは土地だ」とパクホムは答へた。通辯が其意を通ずると、土人等は頻りに分らぬ事を話しあつて居たが、何がおかしいか腹を抱へて笑ひだした。やがてそれも静まつて、通辯はパクホムに向ひ「皆がソ

ウ云つて居ます。土地ならお前さんの望み次第幾らでも上げますが、一應酋長に話して見て下さい」と云つた。

(六) 一つの條件

丁度そこに狐の皮の帽子を冠つた人がやつて來た。それが即ち酋長であつた。パクホムは上等の上衣と茶の一壺とを出して酋長に贈つた。酋長は土人等の話を聞いて微笑しながら「左様か、土地なら幾らでも上げますよ」とロシア語で云つた。パクホムは少々驚きながら其價を問うた。「價は一日に千圓と極つて居ます」と酋長は無雜作に答へた。パクホムには一日と云ふ意味が分らぬので説明を求めると、一日に歩いて廻つたゞけの土地を皆やると云ふのである。「一日歩けば随分

「廣く廻れるが」とパクホムが呆れて居ると、酋長は微笑しながら斯う云つた。『そうです、それが皆アナタの物になるのです。然して、一つの條件があります。』

『若しアナタが日の入までに出發點に戻つて來なんだ場合には、金の出し損になるのです。』

パクホムは委細承知して、翌朝日の出に出發點に會合する約束をして酋長と別れた。土人等は柔かき床を作つてパクホムを寢せた。

(七) 埒の無い夢

パクホムは横になつても眠られず、土地の事はかり考へつゞけて居た。實にウマイ事があればあるものだ。丁度日の永い絶頂ではあるし、

一日歩けば二十里は確かなものだ。二十里歩けば少くも五千町の廣さは廻れる。五千町の地主なら大したものだ。』

それでパクホムはとう／＼夜どほし眠れず、漸く少しトロ／＼したのは明方近くで、ツイ其間に夢を見た。夢の始りは誰やら外の方で大變に笑ふ聲が聞える、誰か知らんと思つて出て見ると、彼の酋長が腹を抱へて笑つて居る。何を其様に笑つて居るか、とパクホムが問うた時、其人はモウ酋長では無くて、此のバスキル地方の事を知らせて呉れた彼の旅商人であつた。『オーお前イツこゝに來たか』とパクホムが驚く中、其人は又變つて先にヴォルガ川の新開地の事を知らせて呉れた、旅の農夫になつて居た。それから又見直すと、今度は人では無くて、角の生へた惡魔が何かを見やつて頻りに笑つて居る。一體何を其様に

笑ふのかと思つて善く見ると、そこにシャツと股引とばかりになつて
 轉がつて居る男がある。足は泥まぶれになつて、仰向になつた其顔の
 色は蒼ざめきつて居る。一體マア誰であらうとパクホムは猶善く其男
 の顔を見ると、それは外でも無い彼自身であつた。
 パクホムはキヤアツと叫んで目を醒ました。目を醒ましてパクホム
 は考へた。『夢と云ふものはホンに埒の無いものだ！』

(八) イビツの領地

パクホムは其儘起き出で、人々を促し立て、打連立つて出發點なる
 小高き丘へと赴いた。酋長も直に來て丘の上からアチコチ指さしながら
 ら『見渡すかぎり我々の所有です。いづこなりとも御勝手に』と云つ
 た。そして例の狐の皮の帽子を脱いで丘の頂上に置き、それを出發點
 と定めた。

パクホムは其帽子の中に千圓の金を入れ外套を脱いで甲斐々々しく
 身仕度を爲し、パンと吸筒とを腰につけ、太陽の水平線に出づるを
 待ちかね、西に向つて出發した。バスキルの若者ひとり、馬に乗つて
 其の跡に續いた。パクホムは大抵一里づゝの處で、若者に竿を立てさせ
 ながら、段々と進んで行つた。二里ばかりも行くとき少し體が汗ばん
 で來る。又二里ばかりも行くとき大分暑くなつて來る。パクホムは胴着
 を脱いだり、靴の紐を占めなほしたりして進んで行つた。凡そ六七里
 も進んだ頃、振返つて見れば丘の上の人影が蟻の様に見えて居る。パ
 クホムは歩きながら吸筒の水を飲んで、そこから左に折れて進んだ。

太陽を見ればモウ丁度晝飯時になつて居る。パクホムは立ちながらパンを食つて又進んだ。

其方向に四五里ばかり進んだ故、モウ又左に折れようと思つたが、丁度そこにサモ肥沃らしい善い地面があつたので、それを見逃すが如何にも残念で、又一里ばかり真直に進んだ。それから漸く左に折れて第三邊を進みはじめたが、太陽を見るとモウ大分傾いて居る。パクホムは少し驚いて、まゝよ己の領地の少し位イビツになるのは仕方があるまいと、其の方角には僅に一里ばかり進んだきりで、今度は出發點に向つて一直線に進みはじめた。

(九) 正に五尺の土地を要した

パクホムは此時モウ疲れきつて、足は腫れて痛くなるし、躓きく歩いて居た。それに太陽を見れば、誰か上から押落す様にズンくと低くなる。パクホムは考へた。『おやく、こりや遣りそこなつたかな。チト廣く取りすぎたか知らん。是だけ骨を折つて金の出し損ぢやア堪らない。』

パクホムは更に氣を引立て、走りだした。上衣も脱ぎすて、ズボンも脱ぎすて、靴を棄て、帽を棄て、シャツと股引ばかりになつて、足からは血の出るにも構はず、汗しどろになつて走りだした。

丘の上ではバスキル人等がオーイ／＼と呼びながら頻りに手を振て居る。狐の皮の帽子も見えて居る。酋長の立姿も見えて居る、パクホムは又是れに力を得てヒタ走りに走つた。振返つて見れば、大きな赤

い太陽が今正に地平線に沈みかけて居る。丘の麓に達した時には、太陽は早既はやすでに没ぼつしてしまつた。モウ駄目だ！とパクホムは一時殆んど失望ぼうしたが、フト考へついで見れば、丘の上からはマダ太陽が見えて居るかも知れぬ、それを最後の頼みにして、パクホムは一生懸命、シヤニムニ丘の上に駆けあがつて、其儘そこに打倒れた。『でかした！でかした！』と酋長は叫んだ。パクホムは正に日没前に其出發點に歸着したのである。

パクホムの僕は駆けよつて主人を扶け起したが、其口からは血が流れて、パクホムは既に死んで居た。酋長は腹を抱へて打笑つた。

それより酋長は金を取つて立上り、バスキル人等を引連れて歸つて行つた。跡にパクホムの僕は穴を堀つて主人の死骸を埋めた。パクホ

ムの一しん身こゝは是こゝに至いたつて正まさに長ながさ五尺しやくの土地とちを要えした。

（明治三十六年秋、平民新聞所載）

清風廬

鬱々うつ／＼たりや夏木立、
 隱士いしんありて廬ろを結むすぶ。
 放はなてよ火矢ひやを、火ひの神等かみら、
 注そげよ火矢ひやを、篠しののごと。
 暑あつしと人は悶もたゆらん、
 苦くるしと人は叫さけぶらん。
 只我ただわれひとりは廬ろに臥かして、
 清せいしき風かぜに枕まくらとぞする。

人のあめりかに行くを送る

あめりかに君行くといふを我れ送る、送りて曰く、壯なる哉。
 あめりかに君行くといふを、よしさらば、行きませといひし君が妻はや。
 君が妻に代りて曰はん、あめりかに、君着く迄の夜を寝ね得んや。
 君おもへ、あめりかの野に假寝して、青葉の日本、若葉の京都。
 思へたゞ、日本の國に、束の間も、君を忘れざる人ひとり有り。
 思へまた、意氣に感ずる男子ありて、爲すある友の歸るを待つと。
 思ふかな、甲板の上の夜ふけて、太平洋の月に立つ君。
 ワシントンの出でにし國に留まりて、君學ぶなかれ、金作る道。
 人の世の到る處に誠あり、涙ある事を學ばんか君。

別莊拜見の記

(明治卅七年夏、平民新聞所載)

或日或處の海岸で、そこに有名なる或人の別莊を拜見に行つた。
 別莊は町の後の小さい山の上に在る。町の横町を折れて宮の脇の坂を
 少し登つて行くと、土手の様になつた藪があつて道が塞がつて居る。
 ハテナと思ふて善く見ると、其土手に墜道がある。墜道の中を四五間
 通りぬけると、忽ち眼界が打開いて、緩かな勾配を爲した奇麗な園が
 廣々として横たはつて居る。四方は森に圍まれて、一方は其森の上か
 ら町を隔て、大平洋を見渡して居る。山水の勝景が實に一眸の中に集
 つて居る。
 園内には、多く陸稻が作つてある。其陸稻の間には處々に蜜柑が植

てある。草花は殆んど無數に育て、ある。硝子張の植木室も設けてある。絲瓜もあれば唐辛もある。大根もあれば葱もある。芝原もあれば池もある。鶯鳥も居れば鯉も居る。門番も居れば百姓も居る。牝牛も一疋飼つてある。恰も是れ殿様のオモチャに拵へた一小村落の模型である。それで殿様のお館はと云ふに、墜道の側に和洋折衷の主家が一棟、それと少し離れて茶室風の亭が一棟、それから遙かの上手に、此園内の最高處に位ゐして、御殿風の棟がある。

主家を窺いて見ても、御殿を窺いて見ても、キチンとした裝飾品の外には殆んど何等の家具も無く、そして廣い座敷の恰好よき處に脇息をチンと据ゑて、そして其前に厚い座蒲團が二三枚重ねて置いてある。何だか芝居の舞臺を見る様な心地がした。

予は此の廣き園内を見まはり、更に眼を放つて近隣の町村よりかけて大平洋を打眺めた時、嗚呼この天然の風景に所有主があるとはと、覺えずも嘆聲を漏した。それと同時に、予は此風景の所有主を見たいと云ふ好奇心を起した。それで案内の人の指さすに従つて、遙かに彼の茶室を窺ふに、恰も今、一人の老翁が、脇息より立つて椽側の方に歩み寄る所である。中風にでも罹つたものか、只ヨボくとして見る影もない姿である。而して是れが即ち此別莊の主人である。彼れは會計官吏として久しく職を政府に奉じて居たが、今は愛妾と只二人して此處に退隱して居るとの事。

彼れが如何にして其の巨額の財を貯へ得たか、彼れの家庭が如何なる状態の下に在るかは、姑く之を問はぬとして、只此の垂死の一老翁

が其殘年を送らんが爲に、斯でま廣き家屋庭園を要する事が予に取ては如何にも不思議に感せられた。

見よ此庭園の寂しき事を。美しと云ふは其表面のみで、ジツと見詰めて居れば底の方から寂しさが浮いて來るでは無いか。彼の老翁は、此庭園を私有し、此風景を領有して、一步も他人の足踏みを許さぬと云ふ處に、自己の權勢を自覺して、其虛榮心を満足させて居るであらうが、これでも猶自然の寂しさを感ずるかして、近隣の人民が御別莊拜見を願ひ出づれば彼れは喜んで之を許して居るのである。

斯かる事ども考へながら、予は更に彼の御殿を打眺むるに、曩には芝居の舞臺の様に見えて居たものが、今度は古代の遺物の如くに感せられて來た。床の間の三幅對の掛軸から、六枚折の金屏風までが妙に古色を帯びて居て、天井、椽側の凝つた所など、何處やら奈良京都の見物をして居る様な心地がした。

そこで又善く考へて見ると、遠からずして彼の老翁が世を去り、彼の所有權も消え去つた曉には、此の別莊は當然近隣町村の公園となつて、此の御殿や彼の茶室は、今の京都の金閣寺や奈良の二月堂の如き地位に立つであらう。されば彼の老翁一人こそは、今日に於て其所有權の鞏固を信じ、其權勢の強大を喜んで居るであらうが、其間に此の不自然なる別莊は既にやゝ公有物たるの性質を現はし、此の無益なる建築物は、既にやゝ遺物たるの光景を呈しはじめて居るのである。

斯くて予は此別莊の拜見を終つたが、更に思ふに、此別莊は即ち今の資本家制度の社會を縮寫した者ではあるまいか。

永洲に寄す

君は何よむ、秋の風
 此の秋風の朝夕に、
 我が讀むものは白氏集
 はかなくもあるか、長恨歌、
 あはれにもあるか、燕子樓。
 我も歌こそ詠みたけれ、
 君が歌こそ聞きたけれ。
 臂を把りつゝ君と我、
 歌よまなんと契りしを、
 忘れやはする、いざさらは、
 樂天微之も見ずや君。

獄中生活

一空々零生

(一) 監獄は今が入時

寒川鼠骨君には『新囚人』の著があり、田岡嶺雲君には『下獄記』の著がある。文筆の人が監獄に入れば必ずおみやげとして一篇の文章を書く例である。予も亦何か書かずには居られぬ。

監獄は今が入時と云ふ四月の廿一日午後一時、予は諸同人に送られて東京控訴院検事局に出頭した。一人の書記は予を導いて彼の大建築の最下層に至つた。薄暗い細い廊下の入口で見送りの諸君に別れ、予は獨り奥の一間に入れられた。此の奥の一間には鐵柵の扉が附いて居

て中には兩便の爲に小桶が二つ置いてあるなど、既に多少の獄味を示して居る。此處に待たさるゝこと一二時間の後、予は泥棒氏、詐欺氏、賭博氏、放火氏など、共に、目かくし窓の狭くるしい馬車に乗せられた。乗せられたと云ふよりは寧ろ豚の如くに詰込まれた。手錠を締められなんだ丈が責めてもの事であつた。

程なく馬車は警視廳の門に入つた。『お歸りー』『旦那のお歸りー』など、呼ぶ奴がある。『今に奥様が迎へに出るよ』などとサモ氣樂げな奴もある。警視廳で又二時間ばかり待たされて、夕飯の辨當を自費で食つた。こゝでは巡查達も打解けて『何故別に署名人を拵へて置なかつたのです』と云ふのもあれば、『そんな事をしない所が社會黨ぢや無いか』と云ふのもある。そんな事から暫く其處に社會主義の研究會が開かれて、盛んに質問應答をやつたのは愉快であつた。

(一) 東京監獄

それから又同じ馬車に乗せられて（今度は巡查氏の厚意に依つて稍樂な席に乗せられて）、市ヶ谷の奥なる東京監獄に送られた。東京監獄に着いたのは丁度夕暮で、それから種々薄氣味の惡き身體検査、所持品検査等のあつた後、夜具と膳碗とを渡されて或監房に入れられた。

監房は四疊半の一室で、チヤンと疊が敷いてある。高い天井には電燈が點れて居る。室の一隅には宛かも爐を切つた如き便所がある。他の一隅には少き三角形の板張があつて、土瓶、小桶などが置いてある。是りや中々しやれたものだと思つた。予は思つた。其夜は其まゝ、フロツクコー

トの丸寢をやつた。

廿一日朝、瀧の様な挽割飯を二口三口食うたばかりで又取調所に引出だされ、午前十時頃でもあつたらうか、十五六人の者共と一しよに二臺の馬車に乗せられて、今度は巢鴨監獄へと送られた。

こゝでチヨット監獄署の種類別を説明して置ねばならぬ。先づ東京監獄が未決監、市ヶ谷監獄が初犯再犯などを入れる處、巢鴨監獄が三犯以上の監獄人種及び重罪犯などを入れる處の由。それから予等の如き輕禁錮囚及び何か特別の扱ひを受ける分は皆巢鴨に送られるのである。序に書いておくが女囚は八王子に置かれ、未丁年囚は川越に置かれてある。

(三) 巢鴨監獄

巢鴨監獄に着いて、サアいよ／＼奈落の底に落ちて來たのだと思ふと餘り氣味が善くは無い。

先づ玄關の様な一室で素裸にせられて、それから次の室で「口を開けい『兩手を揚げい』四這ひになれい』など、云ふ命令の下に身體検査を受けて、そこで着物と帯と手拭と禪とを渡される。いづれも柿色染であるが、手拭と禪とは縦に濃淡の染分になつて、多少の美を成して居るから可笑しい。着物は綿入の筒袖で、襟に白布が縫ひつけられて、それに番號が書いてある。此白布は後に金札に改められた。堺利彦は是れよりして千九百九十號と云ふ者に成り了つた。

此前後に姓名、年齢、原籍、罪名等について、それはく繁雜極まる取調べがあつた。薩摩なまり、東北なまり、茨城辯など、數多の看守が立ちかはり入れかはり、同じ様な事を幾度となく聞糺しては手帳に付けて行く。其混雜の有様、面白くもあれば可笑しくもある。中には『何時つかまつた』と問ふから『つかまつた事はありません』と答へると、不思議そうな顔をして解しかねて居るのもある。總てが泥棒扱ひだから堪らない。

それから領置品の讀み聞かせとなると其繁雜が又一通りで無い。繻絆、腹巻、襪、靴下、風呂敷、ハンケチ、銀貨入の小袋、ポロ／＼の股引など、それはそれは明細な事で、人の頭の一つや二つぐらゐる平氣で擲る癖に、事苟くも財物に關する時は、一毫の微、一塵の細と雖も、

決してく鹿略にはせぬのである。財産神聖の觀念は随分深く染込んだものだ。瘡の一つ二つや血の二三滴より、葉書一枚、手拭一筋の方が餘程彼等には貴く感ぜられると見える。

それから柿色の鼻緒の付いた庭下駄を穿かせられて外に出ると、『そこにシヤガンで待つてろ』と云ふ命令が下る。暫く待つて居ると、今度は『立て』『進め』と云ふ命令が下る。二足三足進むと『待て待て、帯の結び様が違ふ』と叱られる。謹しんで承けたまはるに、帯は蜻蜒に結んで、そして其の輪の方を左に向けるのだとの事。やつとそれを直して又行きかゝると、『オイ／＼手を振つてはイカン』と又叱りつけられる。諸君試みにやつて御覽なさい、手を少しも振らせずに歩くのは非常に困難なものであります。

行くこと半町ばかりにして、赤煉瓦の横長い建物の正面の入口に來た。鐵柵の扉に錠が卸してある。サア來た、いよく是れだなど思つて居ると『新入が十五名』と呼びながら、外の看守が我々同勢を内の看守に引渡した。我々は跣足になつて鐵扉の中に入つた。中はツウツト長い石疊の廊下で、冷やりとした薄氣味の悪い風がソヨリと吹く。『そこに座はる』と云れたので直ぐ前を見ると、廊下の片側に薄い俎の様な物が幾つも並べてあつて其上に金椀だの木槽だのが置いてある。善く見れば杓子も茶碗もある。云ふ迄もなく是れが御膳部であるのだ。そして人の座る處には、襪褌で拵へた蓆の様な物がズツト敷きわたしてある。そこで十五名一列に座ると、そこに突立つて居る看守から『禮』といふ號令か掛る。夫で一禮して箸を取る。予は僅かに二箸

三箸を付けたのみで、殆んど何物をも食ひ得なんだ。又『禮』と云ふ號令の下に一禮して立ちあがると、今度は右側の室の鐵の戸を開けて、七八人づゝ入れられた。

(四) 巢鴨監獄の構造

此處でチヨット巢鴨監獄の構造を説明して置かねばならぬ。

先づ正面の突當りが事務所で、其左右に南監と北監とがある。兩監とも手の指を擴げた様な形になつて五個宛の監に分れて居る。即ち合計十監あつて其一監が廿幾房かに分れて居る。それから遙か後の方に七個の工場が並んで立つて居る。其外には病監、炊所(附浴場)、洗濯工場などがアチコチに立つて居る。そしてそれらの建物の間には、奇麗な芝原だの、運動場だの、色々の畑だのが作られてある。

扱此監獄が日本第一たるは云ふ迄もなく、世界中でも何番目と云ふ

完美を極めたものだぞうな。さすが日本はエライもので、監獄までが
歐米に劣らぬほど繁昌するのだ。それは兎もあれ今の山上典獄と云ふ
は、謂はゆる文明流のやりかたで此の日本第一の監獄に着々として改
良を試みて居るとの事。

(五) 初日、二日目、教誨師

予の入れられたのは北監の第六監で、最初の日は懲役七八年の恐ろ
しい男共と一しよに、六七人で或房に居た。

甚だ落ちつかぬ一夜を明して二日目となれば、先づ呼出されて教誨
師の説諭を受けた。教誨師と云ふのは本願寺の僧侶で、

『平民新聞と云ふのはタシカ非戦論でしたな、勿論宗教などの立場から見ても、主戦論など

云ふ事は下ダイ在るべき筈は無いのです、然し又其時節と云ふものがありますからな、そ
こには又色々御議論もありませうが、ドウです時節と云ふ事も少しお考へなさつては』

と云ふのが予に對する教誨であつた。中中如才の無い事を仰しやる。
午後には無雑作にグルくと頭を舐られた。是れで先づ一人前の囚人
に成つた。

(六) 監房、夜具、食物

監房は八疊ばかりの板張で、一方の隅に井戸側の様な物があつて、
其中が低く便所になつて居る。一方の隅には水の出るパイプがあつて
其下にチヨイとした手洗鉢が取付けてある。天井は非常に高く、窓は
外に向つて一つ、廊下に向つて一つ、孰れも手の届かぬ所に在る。朝

早くなど其窓から僅かの光線の斜に刺し入るのが、何とも云はれぬほど嬉しく感ぜられる。

夜具は可なりに廣いのが一枚、それを柏餅にして木枕で寝るのだ。

着物は夜も晝も同じもので、只寝る時には襦袢ばかり着て着物を上に

掛けると教へられた。役に就く人には別に短着と股引とがある。

食物は随分ひどい。飯は東京監獄と違つて色が白い。東京監獄は挽

割麥だが、こちらは南京米だ。此頃麥の値が高くなつて南京米の方が

安く上るのだそらな。何にせよ味の悪い事は無類で、最初は殆んど呑

み下す事が出来なんだ。菜は朝が味噌汁、と云へば別に不足は無いな筈

だが、其味噌汁たるや、恰もそこらの溝のドブ泥を掬うて來た様なも

ので、其又木槽たるや、恰も柄のぬけた古杓柄の様なもので、其縁に

は汁の實の昆布や菜の葉が引かゝつて居る處など、初は随分汚なく感

じた。次に夕飯の菜は澤菴に胡麻鹽、是れは中々サツパリして善い。

時々は味噌菜もある、唐辛など摺りこんで是れも案外うまく拵へてあ

る。晝が一番御馳走で毎日變つて居る。先づ日曜が豆腐汁、それから

油揚げと菜、大根の切干、そら豆、うづら豆、馬肉、豚肉など、大がい

献立が極つて居る、豚肉など、云へば結構に聞ゆれど、實の所は菜か

切干かの上に小さな肉の切が三つばかり乗つて居る迄の事だ。それで

も豚だくと皆が大喜びをする。晝の菜の中で予輩の一番閉口したの

は、輪切大根と菜葉との時で、『ヤア今日は又輪大か』と嘆息するのが

常であつた。飲むものはヌルイ湯ばかり。

聞く所に依れば、此の三度の菜の代が今年の初までは平均一錢七厘

聞く所に依れば、此の三度の菜の代が今年の初までは平均一錢七厘

であつたが、戦争の開始以後は五厘を減じて一錢二厘となつたとの事
戦争はヒドイ所にまで影響するものだ。

(七) 特別待遇

六監に居ること十日ばかりの後、予は十一監に移された。此十一監
は十個の本監の外にある別監で、古風な木造の、チヨット京都の三十
三間堂を思ひ出させる様な建物である。監房は片側に十個あるだけで
前は廊下を隔て、無双窓になつて居る。房内は十二畳ばかりで、前後
は荒い格子になつて、芝居の牢屋の面影がある。後の方の格子には障
子が立てられて、其障子の内にタ、キの流し元と便所とが並んで居る。
便所の處には板で拵へた小さい屏風の様なものが立て、ある。總てこゝ

は廣々として、氣が晴れて、窓や障子を開けた時には、空も見える、
木も見える、雀の飛ぶのも見える、猫の來るのも見える、煉瓦と石と
鐵とで構うた本監に比べると、居心地の善いこと何倍か知れぬ。
承けたまはるに、此十一監は特別待遇の場所、輕禁錮の者、重禁
錮中の教育ある者(社會にて身分ありし者)、不具の者、老衰の者など
を集めてある。外に、モウ本刑を務めあげて、附加刑の罰金を輕禁錮
に換へられた、謂はゆる換刑の者もこゝに來て居る。

▲チヨット申しておくが、世間ではヨク監獄内の通用語として此世の中の事を娑婆々々と
云ふけれど、實際今ではソナ言葉は用ゐられて居らぬ、皆「社會」と云つて居る。

予は此監に來てから、最初一兩日は換刑の者と一しよに置かれ、次
に一週間ばかりは獨房に置かれ、最後には他の輕禁錮の者と共に三人

で置かれた。其同房の二人は衛戍監獄から來た軍人であつた。其他此監に居る者の中には、

▲恐喝取財未遂の辯護士 ▲詐欺取財の陸軍大佐 ▲官吏侮辱の二六新報署名人 ▲犬姦事件の萬朝報署名人 ▲恐喝取財の日出國新聞記者 ▲自殺幫助(情死未遂)の少年 ▲官文書偽造の中學校書記 ▲教科書事件の師範學校々長 ▲同上高等女學校校長 ▲明治小僧などの人物があつた。彼等は大がいに紙緘か麻糸緘をやつて居た。序に他の監に居る人物で囚人間の噂に上る者を擧ぐれば、

▲大盜渡邊金兵衛 ▲教科書事件の小倉信近及金尾稜嚴 ▲甲州の富豪加賀美嘉兵衛 ▲馬蹄銀事件の河野太三郎

等であつた。輕禁錮二個月の我輩などは、實に幅のきかぬこと夥たし。

(八) 一日の生活

扨て、一日の生活を叙せんに、先づ午前五時(六月以後は四時半)に鐘が鳴る。それを相圖に飛び起きる。蚊帳を疊む、蒲團を疊む、板の間を掃く、雑巾を掛ける。そうする中に看守部長が廻つて來て點檢がある。受持の看守が『禮ッ!』を掛ける。皆々正座して頭を下げる。

『千九百九十號!』『千八百五十三號!』などと番號を呼び立てる。『ハイ』と返事をしながら面を上げる。それが濟むと鹽で齒を磨きて顔を洗ふ。鹽は毎朝寢て居る中に看守が各房に入れて歩く。水は本監ではパイプから出る事になつて居るが、こゝでは當番の者が近處の井から汲んで來て配る事になつて居る。

暫くすると飯になる。本監では廊下に出て、看守の突立つた靴の前に座つて食ふのだから甚だ不愉快に感じたが、こゝでは膳を房に入れ

るので、殊に房の床が廊下よりズツト高くなつて居るので、其不愉快は少しも無かつた。

食事が済むと小揚枝を使ひながら正座する。小揚枝は月に一二本づつ渡される。正座と云ふのはチャンと膝をくづさずに座る事で、食後一時間は畏まつて居らねばならぬ。板張の上に筵を一枚敷いて其上に畏まるのだから随分足が痛くなる。

食後一時間たつと皆胡座をかく。之を安座と云ふ。それから重禁錮の者は仕事に取りかかり、我々軽禁錮の者は本でも讀む。然し本と云ふ奴がソウく朝から晩まで讀みづめにせられるものでも無し、退屈する、欠伸が出る、ヒソく話をする、馬鹿口を叩く、悪戯をする、便所に行く、放屁をする、鼻唄を歌ふ、逆立をする、それはく様々な事である。

日を暮す。勿論看守の目を忍んでやるので、時々は見つけられて叱られる。尤も是れは我々軽禁錮及び換刑の者の事で、役に就て居る者は却つて日が暮しやすい。そこで軽禁錮の者でも自ら願ふて役に就くのが少くない。

永島永洲君からの見舞の端書に、「永き日を結跏の人の座し足らず」と云ふ句があつたが、我々凡夫中々そんな譯に行かぬ。そこで色々な妄想、空想で僅かに自ら慰める事になる。

▲「チヨイトく旦那おあがんなさいよ」「品川さん、大森さん、川崎さん、おあがんなさいよ」「是れは赤い着物を着て格子の前に座つて居る處から自分を女郎に見立て、の戯れ言」

▲「へい今日はよろし、魚源で御座い、お肴は鯛に鰈に鮪の切身」

『あゝそれぢやア鯛を貰ひませう、片身をおろしてお刺身にして下さい、然し新しいかね、肴屋さん』(是れは後の障子と流し元との工合がサモ臺處口に似て居るからの洒落)

▲『あゝいゝ、天氣だな、今日はどこぞ遊びに行かうか』(そうさなア上野から淺草にでも出かけようか)『だが遠方に行くのは大儀だな、それよりか矢張りあの桐の木の下でも散歩しようか』(そうさ、それも善いな、ぢやアまア今日(けふ)は出かけるのはよそう)『是れは午後の運動の事を云ふたので、後に分る』

▲『あなた今夜のお菜は何にませう』(何ぞサツパリした物がいいなア)『ぢやア矢張りイツもの澤菴と胡麻鹽にして置きませうね』

▲『あゝ天ぶらが食ひたい』(をれはタツター一つでいゝから餅菓子か食ひたい)『何も贅は云はないが、湯豆腐か何かで二三杯やりたいものだ』

▲『是れで碁盤の一つもあれば別に退屈はしないがなア』(そしてチヨイと麥酒の一本も出て來るとなア)『そして林檎かビスケットでもあるとなア』(そして、お一つ召しあがれな、とか何とか云つて美しいのが一人も現はれて來りや申分なしたらう)『ハ、ハ、ハ、どこまで贅澤を云ふか知れたものぢや無い』

こんな馬鹿な事を云つて居る中に晝飯になる。晝の菜の當てツコをしたり、晝飯の菜の一覽表を作つたり、そんな事も消閑の一策になつて居る。晝飯は十一時で天氣が好ければ十一時半から十二時まで運動がある。▲是れは定役の無い者及び監房にて役を執る者に限るので、

工場に出て役を執る者には許されぬ。運動は監の周囲にある、桐の木の下だの小松原の芝の上だのを歩くので、矢張り嚴重なる監督の下に
 一列になつてグルグル廻るのだが、それでも話の出来ぬ事はなし、折々は立止つて蟻の戦争など見物する事もある。何にせよ運動は一日中の一大愉快で、雨の三日も續いた揚句は殊に然りだ。

運動後は又馬鹿話やら座眠やらで夕方になる。『モウ何時だらう』今の看守の交代が四時半だらう』ちやあモウ三十分で飯だ』など、いふ問答は大がいに毎日同じ様な事が繰返される。それから『僕は跡がタツタ百三日だ、譯は無』乃公は今日が丁度絶頂だ、明日から下り坂だ。タワイは無』君はモウ一週間で出るのだな』など、大概毎日刑期の勘定がある。

夕飯後に又點檢があつて、安座鈴が鳴る、薄暗い電燈がとぼされる、それから二時間ばかり又退屈すると、八時になつて就寢鈴が鳴る。それから来た！と大騒ぎで柏餅がゴロ／＼と並ぶ事になる。これがまあザツト一日の生活だ。或夜、夜中に目がさめて左の如き寢言が出来た。

隣室の扉に和して蛙鳴く
 紫の桐花の下や、朱衣の人
 桐の花、囚人看守曾て見ず
 行春を牢の窓より惜みけり
 永き日を『御看守様』の立盡す
 正座しても安座しても日の長さ哉
 永き日をコソ／＼話、安座する

夕ざれば監房毎の放屁かな
 正座して自慢の放屁連發す
 寂しさに看守からかふ奴もあり
 看守殿、退屈まざれに叱る也
 『本職は』昨日拜命したばかり
 『本職は』と云ふ時髭をひねる也
 看守部長とかく岩永になりたがり
 是れは又重忠張の看守長
 教誨師、地獄に佛の格で行き
 教誨師、袈裟高帽の御姿
 教誨師、お前さんはと仰せらる

(九) 入浴、散髪、手紙

其方はなど、看守の常陸辯
 永き日を千九百九十の座眠す

入浴は又獄中生活の愉快の一つで、凡そ一週間に一度、或は四五日
 ぶりに一度づゝ許される。

今日は入浴だと云ふと皆嬉しがつてソワ／＼して居る。時刻が來ると孰れも手拭を腰にさげて、庭下駄をはいて監の前に出て五人づゝ並んでシヤがむ。『立て！進め！』で浴場に向つて進む。浴場まではザツト二町ばかりある。『列を亂してはイカン』『キヨロ／＼と餘所見をするでナイ』『話をしてはイカン』『手を振つてはイカン』など、絶えず叱ら

れながら兎に角浴場の前に着く。又並んでシヤがむ。一列になつて二十人ばかりづゝ二組になつて浴場に入る。浴場は煉瓦作り、浴槽はタキで可なりに大きい。湯は蒸氣で湧かす事になつて、寒暖計まで備へ付けてある。我々はいつとも一番にはいらせられるので、清潔な點に於ては申分なかつた。『脱衣!』『入浴!』などの不思議な號令の下に、五六人づゝ列を作つて一番、二番、三番、四番、と二十人あまり一しよにはいる。浴槽の中はギツシリと詰まつてしまふ。三分間たつと『上浴!』『洗體!』と云ふ事になる。それから元の湯に又一度はいつて、次に上り湯の方にはいる。それから今度は一方の壁にズツと並んで取つてあるパイプの下に行つて、銘々に頭と顔とを洗ふ。然し其水は甚だ拂底で、儀式ばかりの様なものではあるが、何にせよ我輩等の住

んで居る角筈あたりの湯に比べると結構なものだ。

散髪も又チヨット善い氣ばらしになる。是は大概二週間に一度位の様だ。床屋さんも固より囚人である。湯屋の三助も、醫者の助手(看護夫)も皆やはり囚人だからをかしい。

床屋が廻つて來て廊下に陣を取ると、一房から十房まで順々に出かけて刈つて貰ふ。バリカンで只グルくくとやるのだから雑作はない。勿論顔も剃つて呉れる。特に髭を蓄へる事を願ふ者には許して置く。フケトリと鋏ともそこに置いてある。それで爪でも取りながら見張りの看守と話でもしてゐる時には、獄中生活も存外趣味のあるものだ。面會は囚人に取つて非常に愉快の事であるが、餘り再々人が來ると一々には許されぬ。手紙は大がいのものは見せられる。百穂君の畫葉

書丈は一枚きりしか見せられなんだ。それから中村彌二郎君が予の無聊を慰めんとして、昔話を書いた葉書を寄こされたが、それは『不得要領につき不許』といふ附箋がついて、出獄の時に渡された。

獄中では只無事(或は單調)に苦むのであるから、手紙、面會、入浴、散髪、運動等、何でも少し變つた事があれば非常に愉快に感ずる。

(十) 食事當番

今一つ氣ばらしになつた事は、四五日ぶりに一度づゝ、食事當番がある。他の監では役夫といふものがあつて、それが食事の世話やら掃除やらするのであるが、我々の監には無定役囚が多いので、別に役夫は置かず其の無定役囚の中から代り代り食事當番を出す事になつて居

た。當番は二人或は三人で、先づ炊所から運んで來た飯や菜を盛り付けて膳立をする。鐘が鳴るとそれを各房に配る。食事が濟むと跡片付をする。水を汲んで來て膳碗を洗ふ。洗物が濟むと廊下を掃く。それを一日に三度繰返すので、中々風流なものです。まだそれから、食事の世話の外に、流し口の掃除、裏庭の草取などをやらせられる時もある。存外おもしろいものです。甚だしきは皆の者を運動に出す世話をする爲に、草履箱から草履を出して各房の前に並べてやり、運動が終れば、其の又草履を集めて箱に入れてやる事もある。是等はズント風流なものです。

(十一) 眼鏡、書籍

最初予の一番困つたのは眼鏡を取られた事である。尤も眼鏡がなく
 ては何んにも見えぬと云ふ程でも無いが、十一度ばかりの近眼で、十
 餘年來寢る時の外、曾てはづした事の無い最親最愛の眼鏡であるから、
 今忽然それと別れた不愉快は非常である。直に跡で下渡してやると云
 はれた言葉を樂しみにして居たが、二三日たつてヤツト眼鏡下附願と
 云ふ手續が出来た。モウ占めたと樂しんで居ると、又二三日してヤツ
 ト醫者の視力検査があつた。モウいよくだと思ふて居ると、又二三
 日して漸くの事で下渡された。親子再會とでも云ふべき情合で、只何
 となく嬉しく心賑やかで、掛けて見たり外して見たり、息を吹きかけて
 拭いて見たりしてゐる中、どうも右の玉のゆがんで居るのが氣に食は
 ぬ。隣の人にもそれを見せて、こゝを少しコウ曲げて、など、云ひな

から恐々撓めて居る時、脆やポキリと眞中の金が折れた。サアしまつ
 た！こんな弱つた事はない。『見しやそれとも分かぬ間に雲がくれにし
 夜半の月』たまく會ひは會ひながら、つれない嵐に吹きわけられ』失
 望落膽、眞に喩へるものが無かつた。茶碗の破れたのすら繼ぎ合せて
 見るが人情だから、色々をやつては見たが、金と金との繼目の折れた
 のを、只指の先では如何にも仕様がなない。それでも何とか法の無いも
 のかと、様々にいぢつて居る中、是れを糸で結びつけてはと云ふ智慧
 が出た。それから着物の裾のシツケの糸を抜いて、それを二重に括り
 あはせて、兎も角も結びつけた。鼻の上に掛けて見ると、少々工合は
 變だけれど物を見るに差支は無い。あゝ眞に是で助かつた！
 眼鏡の待遠かつたよりも更に一層待遠かつたのは書籍であつた。初

日、二日目、三日目、漸く落つくと同時に漸く退屈する欲しいくは
 只書籍である。書籍は教誨師に頼んで下渡を願ふのであるが、教誨師
 先生よしくと受込んだきりで容易に運んで呉れぬ。一週間あまり過
 ぎてからヤット二冊だけ渡された。書籍は同時に二冊以上は見せぬと
 云ふ定めだそらな。役のある人ならば、日曜の外には二時間しか讀書
 の暇はないのだから、二冊と云ふ制限も善いか知らぬが、朝から晩ま
 で本ばかり読む人に、タッタ二冊とは情ない。然しマア二冊にせよ本
 は來たし、破れたにせよ眼鏡はある、モウ千人力だと云ふ心地がした。
 二冊の本は

Economics of Socialism (By Hyndman)

王陽明傳習錄第一卷

先づハインドマン氏の『社會主義の經濟論』を讀みながら、飽いて
 來ればチヨイくと傳習錄を讀んで、二日三日と愉快に暮したが、四
 日目位には兩方とも讀んでしまふ。仕方が無いから又繰返して初めか
 ら讀む。そうして居る中に、或日教務所長の武田教誨師と云ふが見え
 て、漸く予の房に入つて閑談せられた。氏は西洋の事情にも通じた人
 で、社會主義は世界の大勢ですから、早晚日本にも廣まるに相違あり
 ますまい。實にお氣の毒な事でした』と云ふ様な話であつた。
 それで予は書籍の事を訴へたれば、丁度其時予は獨房に置かれて居
 たので、『獨房の者には冊數の制限は入らぬ』との事で其翌朝早く予の
 持つて來た丈の本を悉く下渡された。予は殆んど雀躍せんばかりに嬉
 しく感じた。モウ千人力どころでは無い、實に百萬の味方を得た心地

がした。予の持つて来た本は前二冊の外、左の七冊であつた。

Encyclopedia of Social Reforms. (Bliss)

Nuttall's English Dictionary.

Progress and Poverty. (Henry George)

Truth. (Zola)

The Twenty Century New Testament.

王陽明傳習錄第二卷、第三卷

予は先づゾラの『真理』を讀んだ。是は予がさきに抄譯した『勞働問題』『子孫繁昌の話』と共にゾラ最終の三大作を爲す者で、主としてドレフュー事件を仕組み、佛國羅馬教の害毒を痛罵し初等教育制度改善の必要を叫んだ者である。此頃ロイテル電報などが毎度報じて來る、

佛國の宗教々育法の事なども此書に依つて始めて十分の意味が分る様になつた。予は此書に慰められて五六日を過したが、其間大抵毎一度宛位はシミぐと泣かされた。

次に予はヘンリー、ジョージの『進歩と貧困』を讀んだ。是まで拾ひ讀ばかりして居たのを今度初めて通讀した。其單稅論、其土地國有主義は我々社會主義者として勿論全然賛成する事は出來ぬが、然し其の違ふ所は只結論ばかりで、其結論に至るまでの觀察と議論とは全く社會主義者の所見と一致して居る。我々は只彼が何故に今一步を進めて社會主義まで來なんだかを怪むだけの事である。彼れの文章の妙に至つては、殆んど評する言葉を知らぬ。一面は文學的で、一面は科學的で而して又他の一面は宗教的である。勁拔の文、奇警の句、其のマ

ルサスの人口論を破するが如き、痛快を極め、銳利を極めて居る。次に予は新約の四福音書と使徒行傳の初の方少しばかりとを讀んだ。二十世紀譯は文章が今様になつて居るので我々には讀みやすくして誠に善い。基督教に現はれたる共產社會の面影などは殊に予の注意を引いた。

傳習録からは餘り得る所があつたとも思はぬ。プリスの『社會改良百科字典』は其題目の多きと其趣味の廣きとに於て予の獄中生活を慰めて呉れたこと幾許か知れぬ。殊に『犯罪學』『刑罰學』などに關する多少の知識を、囚人として獄中に得たのは、深く此書に謝せねばならぬ。

ナツタルの字書の功勞は今更云ふにも及ぶまい。或時の如きは退屈

の餘り、此字書の挿畫を初めから終まで一々丁寧に見てしまつた事がある。

(十二) 役、労働時間、工賃

予は自ら役に就かなんだので、役の實際は善く分らぬが、何にせよ七個の工場で種々なる労働をやつて居る。鍛冶屋もあれば靴屋もある。寢臺を拵へて居るのもあればツツクの鞆を拵へて居るものもある。足袋の底を織つて居るものもあれば麻繩を捩つて居るものもある。馬鈴薯やソラ豆を作つて居るものもあれば洗濯をやつて居るものもある。便所掃除の如き汚い役廻りもあれば炊所係の如き摘み食の出来る役廻りもある。何れも其の才能、性情等に應じて申渡されるので、異存を申立てる事

は決して相成らぬ。時間は最も長い時で十時間半、最も短い時で八時間半であつたかと記憶する。そして各囚人にはそれごとく定まつた課程があつて、それ丈の仕事は是非させられる事になつて居る。就役中は話も出来ず、休む事も出来ず、立つ事も出来ず、便所に行きたい時には手を舉げて許可を請ふのださうな。それから役には工賃が定まつて居て其十分の二三位は本人の所得となる。それで長期の囚人は百圓も二百圓も持つて出獄するのがあるとの事。

(十三) 賞 罰

囚人が反則をすれば直ぐに懲罰に附せられる。懲罰の第一は減食である。減食と云へば食物の量を三分の一位に減じられて、數日の間、

チヤンと正座させられる。それが辛さに首を縊る者が折々ある。平氣な奴でも體量の一貫目ぐらゐ忽ち減る。それから減食でもてたへぬ奴は暗室に入れる。重罪囚で手に合はぬ奴には鉄と云ふ物を施す。鉄とは即ち足械である。それでもてたへぬ奴には一二貫目もある鐵丸を脊負はせるとの事。

賞としては一週間に一度か二度か食事に別菜が付く。其外には、湯に先に入れる、着物の善いのを貸す、月一度と極つた手紙を二度出させるなどの特待があるばかり。

(十四) 理想郷

扱かく獄中生活の荒ましを語つた上で、予をして更に少しく監獄な

る者の全體を観察せしめよ。

監獄は先づ其建築が堅牢である、宏壯である、清潔である。棟割長屋に住む者より見れば、實に大厦高樓の住居と云はねばならぬ。衣服夜具の類もほゞ整頓して居る。冬期に於ては勿論非常の寒さに苦むには相違ないが、さりとして常に襪を纏ひ、或はそれすらも纏ひ得ざる者より見れば、實に有がたき防寒具と云はねばならぬ。食物も悪いには相違ないが塵溜を漁る人間ある事を思へば、必ずしも不平は云はれぬ。何にせよ監獄は衣食住の平等と安全とに於て遙かに社會より優つて居る。

監獄の住民は此の平等にして安全なる衣食住の間に、電燈、鐵道、蒸氣等、種々なる文明の利器を使用して、各其才能性情に應ずる分業

を爲し、ほゞ共同自治の生活を爲して居る。況んや心身の疾病の爲には、病院もあれば教會もある。殆んど何不足なき別社會と云はねばならぬ。

斯く見來る時には、監獄は實に一種の理想郷である。予が休養の爲め理想郷に入ると云つたのも亦決して嘘では無かつた。然しながら此理想郷を他の一面より見る時は、全く別種の觀が眼前に現れて來る。

(十四) 看守

監獄の住民は囚人ばかりではない。外に看守と云ふ者がある。看守は囚人を戒護する官吏であるが、其境遇の氣の毒さは決して囚人に劣る者では無い。或者看守は曾て予に語つて曰く、『午前三時に起きて、

三時半に家を出て、四時に監獄に着いて、四時半から勤務して、それから跡仕舞をして家に歸ると七時半位になる、靴も脱がずに椽側に腰かけて居ると、ホンの暫くの間丈、我家の庭の景色を薄光に見る事が出来る、湯などには滅多に行く暇がない、二週間に一度の休みは大がい寝て暮します」と。而して彼等の俸給は僅々十二圓か十五圓かに過ぎぬのである。

(十五) 看守と囚人

看守と囚人とを別々に見れば、共に氣の毒なる境遇の人々であるが、扱この二人種の關係を考へて見れば、滑稽と云はうか、馬鹿々々しいと云はうか、更に之を悲惨と云はうか、予は之を評する言葉を知らぬ。

囚人の獄中生活を理想郷の如しと云つたのは、若し政府の權力が、四方の高塀となりて現れ、看守の帶劍となりて現れて居らぬならばの事である。

二千の囚人に對する二百の看守は、恰かも腰繩の如く囚人に纏ひ、恰かも手錠の如く囚人を縛り、恰も疊の中の針の如く囚人を刺し、恰も鈞天井の如く囚人を壓して居る。多く事理を解せざる彼等は上官の命に依りて只其の峻嚴なる規則を執行するの機械となつて居る。而して何時しか人情を傷ひ、神經を鈍らせ、知らず識らずの間に苛察自ら喜ぶの風を養ひ來つて居る。

斯くて彼等は囚人を蔑視し、憎惡し、酷遇し、虐待し、寸毫の假借なからんことを期するに至る。此に於て囚人も亦看守を嫉視し、憎惡

し、機會あれば之を愚弄し、之に反抗せんとするに至る。乃ち看守は其威嚴を持し、其虚榮心を満足せしめんが爲に、屢々囚人を叱咤し、毆打し、殊更に之を侮辱し、殊更に之を所罰するに至る。囚人は又、其瘡癩を散じ、其不平を醫せんが爲に、時として不意に看守を襲ひ、之を苦め、之を傷つけ、或は之を殺すに至る。

看守と囚人との關係斯くの如し。而して此看守は囚人に對して國家、社會、政府等の權威を代表する者である。囚人が國家、社會、政府等に對して如何なる感情を抱くかは、之に依りて知られるであらう。悔悟、改悛などは思ひも寄らぬ事である。

(十六) 出獄前の一日

出獄の前日には満期房といふに移される。こゝには明日自由の身となるべき窃盜氏、詐欺氏、カツバラヒ氏、恐喝氏、持逃氏などが集まつて来る。いよく今日きりの一晝一夜を暮しかね明しかねて、様々の妄想を逞しうしながら馬鹿話に耽つて居る。

先づ一人づゝ呼出されて教誨師の説諭を受ける。教誨師も一向氣の乗らぬ調子で役目柄だけのお茶を濁す。囚人は只ハイ／＼とお辭儀をして、房に歸つては舌を出す。そして何を話すかと聞いて居れば、食ひたい、飲みたい、遊びに行きたい、大概は先づそれである。最も良心の鋭敏な奴が『モウ逆も眞人間にはなられない』と嘆息する。『是れがドウしても止められないとは、何たる因果な男だらう』と獨りで笑つて居るものもある。最も思慮分別ありげな奴の言葉を聞けば『いつそヤル

なら大きな事をやるか、それで無くちやスツパリ止めるのだ』
 多くの奴はテンデ止めるの止めないのといふ問題は起して居らぬ。
 彼等は只其の謂はゆる『商賣』を、更に如何に巧妙は行ふべきかに苦心
 焦慮して居るのである。彼等は此の暴戾なる國家の保護を要求する考
 へは無い。此の冷酷なる社會の人情に依頼する者では無い。彼等は敢
 て獨立して自己の運命を開拓せんと欲するのである。競争論者、奮闘
 的生活論者は、正に此種の人に向つて隨喜渴仰すべきである。
 予が最も趣味多く感じた一話がある。或カツパラヒの大將曰く、『小
 僧の二人も内にかくまつて置けば、其日々に不自由をする事は無い
 せ。鯉節が無くなれば鯉節を浚つて來るし、炭が無くなれば炭を浚つ
 て來るし、ホントに便利なもんだ。それに彼奴等義理が堅くて、取つ

かまつても滅多にボロを出しやしない。いつやら兄さんも一しよに來
 いくと云ふから従いて行つて見ると、或宮の境内に來て、兄さんは
 御酒が好きだから今に持つて來てやる、こゝに待つて居ると云ふ。暫
 くするとビールを二本さげて來た。コップが無いと云ふと、又走りだ
 して今度はガラス屋からコップを一つ浚つて來た。ホントに可笑しい
 様に便利なもんだせ。』

(十七) 獄中の音樂

囚人半月天を見ず、
 囚人半月地を踏まず。
 されど自然の音樂は、

自由じゆうにこゝに入りい来るきた』

朝あさは朝日あさひに雀鳴すずめなく。

我わが妻來つまきたれ、チユウくくく。

子等こらは何處いづこぞ、チユンくくく。

こゝに餌えあり、チユクくくく。』

夕ゆふは夕日ゆふひに牛うしの鳴なく。

永ながき日暮ひくれぬ、モオオオオ。

務終つとめをばりぬ、モオオモオ。

いざや休やすまん、モオくくく。』

夜よは夜もよすがら蛙鳴かはづなく。

人ひとは眠ねむれり、ロクくくく。

世よは我わが世よなり、レキくくく。

歌うたへや歌うたへ、カラコロコロ。』

晴はれには空そらに鳶とびの聲こゑ、

笛吹ふえふくかと思おもはるゝ。

羽衣はごろもの袖そでふりはへて、

舞まふや虚空こくうの三千里さんせんり。

舞まひすまし、吹ふきすます、

ピーヒヨロリ、ピーヒヨロリ。』

雨あめには軒のきの玉水たまみづの、

鼓打つづみつかと思おもはるゝ。

緒をを引きしめて、氣きを籠こめて、

打つや手練の亂拍子。

打ちはやし、打ちはやす、

トウ／＼タラリ、ポポンポン』

あゝ面白の自然かな。

あゝ面白の天地かな』

（明治卅七年夏、平民新聞所載）

風流乞食

欠伸居士

遊んで暮すは天理に背くと譏れど、其れは働く奴の勝手に定めたる
 理屈にして吾が知る處にあらず。花紅柳緑も古めかしけれど、兎に角
 見る通の森羅萬象、理屈も糸瓜もあつたものかは、乾坤もとより小なり
 と云へども、百萬や千萬の乞食を容るゝに足らざらんや。あゝ不憫なる
 かな凡夫、乳房に吸付そめしより末期の水呑み終るまでの間を、何程
 長いものと思ふぞ。粟飯の吹き上るをも待たで、頓てさめんとする夢
 の間なれば、如何なる有様にてもあるべきに、其れを過す爲めに氣を
 揉み盡す大たはけ奴。満足の世は麓にもあるを眼暗んで心づかず、慾

の坂路に汗水垂す中に短き今日の日暮れ果て、穴に入るの夕となり
 ては、金が何ぢや位が何ぢや、皆乃公がやうに其身其儘、白衣一枚の
 外身につくるもの無し。況して白骨に貴賤の差別あらんや。君も吾れ
 も同じ蛆虫、さう大きな顔し玉ふなときめつけられ、儲も面妖な乞食
 どと、呆れて見つむるを見かへして。ワツハ、、、と腹を抱へて臍
 をより、再び見向きもせで杖突鳴らして行くさま、垢つき破れたる衣
 の袖如として 孔子の早足にも似たりや。

寺の門前に至れば、雀賣る女の隣に、卒塔婆小町と云ふ風情なるが、
 破れ三味線の爪弾に餘念なし。これ婆殿今日は何うぢや、少つとは慾
 の薄い奴が來合はせたかと問へば。これを見なされ大分實收がよしと
 笑ひて、巾着ぶらつかして見するに手を拍つて喜び。着は乃公が持つ

て居れば其錢で酒を買はうよ、又例の夜櫻ながめての酒宴か。それ一
 段面白からうとたち上り、近き邊の酒屋を驚かして笑壺に入り、酒も
 肴も之れで澤山、いざ婆御座れ。

衣香人影のしげさに折角の春色を塵に埋めて、残す方も無き中に、
 此處は如何なる仙境ぞ、抜目なき俗物の目をのがれて、溪流潺々の涯、
 蒼翠四圍の間に、年々歳々靜に發き靜に散る櫻の一本、乞食夫婦が春
 の宿にとて、自然が與へたるものかと貴し。暫くは花の上なる朧月を
 燭火にかへて、満身の花影に衣の汚げなるを掩はれ、草の上にあぐら
 かきて、何處の馳走のお餘りにや、蒲鉾の切を齒根にもぐり、婆々
 が酌に酔を催ふす風情、何處まで長閑なる心なるらん。ヤレ面白や面
 白や、此中の味ひ家持つた奴は夢にも知るまい、婆殿今夜は泣歌やれ、

乃公が鳴物を受持たう。ホ、ホ、其れも變はつて興あるべし、さア
 引きなされ歌ひましよと、白髪頭が黒髪を歌へば、十筋右衛門が三線
 を弾く。

飽かねども深る夜を止かねて、最も手輕なる杯盤取かたづけ、飯子
 枕に三味枕、二人並らんで横になりぬ。やがて小雨降り來りてじめじ
 めと肌はだに浸む心地好さ。吾とも無く起き上りて、二人ながら苔蒸した
 る櫻の幹さくらに攀よち登るに、いよく肌心地好くて背伸すると共に、脱る
 ともなく身は脱出ぬげて、何れも肌の色輝くばかりの女の童男わらわの童とな
 り、裸はだかのまま、幹みきにしがみつきて、互たがひに後を見かへれば、虱しらみのまびれた
 る皺しわだらけの人ひと殻がら二つかゝれり。各自てんでの双さうの肩かたには萎しほれたる翼つばさ、息す
 る度たびに展のび廣ひろがり、空名そらな殘ごりなく晴はれて妙たえなる音樂おんがくの聲聞こゑきこゆるよと思へ

ば、紫雲しうん黐あいたいと棚引たなびき、得えならぬ薰鼻かほりなを穿うちて清風徐せいふうるるに起れば、空
 より花散はなちり亂みだれ、二人ふたりは何時いつか幹みきを離はなれて、歌うたひつ舞まひつ其間そのあひだにひる
 がへり、頓やがて手てを携たづへて紫雲しうんの中うちに入りしが、忽然こつねんとして天女てんによすめの姿光
 明めうの中うちに現あらはれ、二人ふたりの童わらわを兩腋りやうわきに抱いだきて、一入しほたえ妙たえなる音樂おんがくの聲諸こゑもろとも共、
 虚空こくうをさしてぞ上りける。

花はなを漏もれ來くる朝日影あさひかげに夢ゆめを破やぶられ、むつくりと起き上りたる乞食夫こじきゆう
 婦ふ、互たがひに語かたりて互たがひに驚おどろき、暫しばしくは呆あきれたるのみ。やがて老爺おやぢは一息吐いきつ
 きて。まだ總角あげまきの五十年ねんの昔むかし、汝そなたと二人手ふたりを執とつて咲さき亂みだれた五形田げんげだの
 中なかで、蝶々てうてう追おふて遊あそんだ時の面白おもしろさは丁度今てうどいまの心持こころもちと同じてあつた
 が、それもこれも夢一場ゆめいちやう、見みたり覺さたり果はたしなの世よや。

(明治廿五年、なにはがた所載)

俳句と和歌

欠伸居士

氣のちがひさらな夕や郭公
 秋風に獨り血を吐くやもめかな
 女なき家を五月雨の降くらす
 酒のんで見しよ去年は今日日月
 妻も子もある身なりしが秋の暮
 正月はまゝよ寝てくれう年の暮
 行く年や今年で二年家もなし
 夜もすがら梅をこそぐる雨の音

冷性の妻おもひやる夜寒かな
 春雨や妻にぬかする若白髪
 木守の柿赤うして時雨ふる
 燕は住めり柳は亂るれど
 玄鳥とすれちがひたる笈かな
 燕の龍の腮の玉子かな(或神社にて)
 幾度か春を罵る餘寒かな
 禿山は夏も禿げたるばかり也
 海士が兒は早や眞黒き卯月哉
 斷崖にしがみついたる躑躅かな
 人の世を萩の葉毎や露の玉

短夜といふは逢ふ夜の名なりけり
 朝寒や白粉くさき髻男
 ぬれて立つ佛貴し苔清水
 人間の口おそろしや水瓜船
 あれも聞く人か木か草か蟲の聲
 コロくと馬をくぐりし手鞆哉
 幼子のやつと持ちたる手鞆かな
 櫻一木茶店の婆がいのおち哉
 葉がくれの楓の花を見てやるべし
 月の秋櫻は葉さへ無かりけり

住む人はあらじと人のいふ迄に

むぐら茂れる我がいほりかな

名も知らぬ庭の小草に花咲きて

わがかくれ家の秋は來にけり

花に向ひ月に向ひて恥かしや

いのちをしとて酒のまぬわれ

生甲斐のありと思へばある世にて

なしと思へばなき世なりけり

人の世は流れうせんと思ふまで

はげしく雨のふれる此の夜を

日を追ひて身はいたつきに枯行けど

心は花のさかりなりけり

▲欠伸居士は予が兄塚乙榎也。曾て本吉氏を冒せし事あり。明治卅年八月、卅三歳にて死せり。彼れの數奇なりし生涯と、彼れの飄逸なりし性情とは、彼れの詩文の上に其の面影を止めたり。追懷の料に供せんため茲に其二三を併せ收む。

△欠伸居士の大阪より東京に往くを送りて

夜もすがら見よや百里の冬の月

△欠伸居士の失せたる時

とこしへに見よや幾千歳の秋の月

永久の満月

(一) 天、我れに辛からば辛かれ

坂本覺馬は富士の麓なる舊き友人の家を訪んとて、午前六時の一
番汽車に乗込んで、今新橋停車場を出發した。

覺馬は五年前に飄然として米國に赴き、それより遍く歐洲諸國を回
りて、再び日本の土を踏んだのは、やうやく二個月前の事であつた。

二個月前東京に歸つて來て、兼ねて計劃の事もあるし、直ちに多くの
新知舊知と往來して、殆んど應接に暇なく日夜を過でしたが、其計劃
もや、端緒に付きかけたし、餘りに體の疲勞を覺えたので、せめて二

三日間都會を去りて、靜かに保養を試みる事となつた。それにはドコが善からうかと考へる迄もなく、五年前相別れてより殆んど一日も忘れた事の無い親友、今度も東京に着いて誰よりも先づ第一に此人に會ひたいと思つて居た八木郁彦が、如何なる事情か善くは分らねど、富士の麓に退隱して居ると知つたので、さしづめソコを尋ねる事になつた。勿論、疾くに歸朝の知らせも仕てあるし、今日の一番で行くと云ふ電報も打つてある。

覺馬は五年ぶり故國に歸つて、此二個月間、昔を思ひだす事も随分に多かつたが、將來に對する大いなる計劃を抱いて居るが爲に、身も心も只それか爲に忙殺せられて、恣しいまゝに追懷に耽る餘裕も得なんだのである。それが今、纔に忙中の閑を得て、寒からず暑からずの

小春日和に、雑踏の東京を跡にして、舊友に會ふの望を持つて、小鞆一つ、ステッキ一本の輕き身を、餘り込みあはぬ汽車の中等室に半ば横たへて、そゞろに我が身、人の身の昔を思つて、限りなき追懷の感に打たれるのである。

汽車は品川、大森、川崎と過ぎてゆく。覺馬は巻煙草の煙の間に只夢の如く昔を思つて居る。五年前の殆んど同じ頃、日々相往來して居た八木の家と我が家とに、いづれ劣らぬ悲しき事が降つて湧いた。八木の家では三つになる男の子が其姉の跡を追うて同じ病で無くなつた。我が家では我が最愛の妻米子が急の病で無くなつた。人の家も、我が家も、忽ち火の消えた如くで、濕りがちに日を送つて、友達甲斐に互ひの愁を語りかはすのを、只せめてもの慰めとして居たが、我れ

は終に其無聊寂寞に得堪へずなつた。斯かる時、或人は酒に耽り、或人は遊びに耽り、又或人は更に新なる家を作るの望を起すのであるが、我れには其のいづれも爲し得ぬのであつた。さればとて、我れは又或人の如く、徒らに泣きくづをれて、くよくよとして一生を終るほどの女々しき男でも無かつた。そこで我れは終に蹶起して立つたのである。何程も無き金を懐にして、多くの人には知らせもせず、只八木と二三の人とに意中を陳じて、覇氣満々、或日飄然としてアメリカに向つて去つたのである。

其時の我が心は、今より思へばぐに幼きものであつたよ。よし天、我れに辛からば辛かれ、よし人、我れに冷くば冷かれ、我れは獨立の男子なり、天にも依らず、人にも依らず、我れは只我が力を恃むのみ、

と思つて居た。よし我が妻を奪はゞ奪へ、よし我が子を奪はゞ奪へ、我等は妻子を奪はれて屈する者にあらず、男子情に敗れて當に大に爲すあるべし、天をも恨みず、人をも恨みず、我れは只我が力の更に強からざるを恨むのみ、と思つて居た。嗚呼々々、愚かなる我が心であつたよ。天に依らず、人に依らずと思つたのは、其實、眞に天に依り、眞に人に依る事の、誠が足らなんだ迄である。天を恨みず、人をも恨みずと思つたのは、其實、大いに天を恨み、大いに人を恨んで、反抗を試みて居た迄である。

汽車は平沼、戸塚、大船と過ぎてゆく。覺馬は猶昔を思ひつゞけて居る。日はやう／＼高くして、汽車の窓は暖かに照らされて居る。

(一) 芽を出せば折り、芽を出せば折り

覺馬の思は我が身の上より人の身の上に轉じた。八木郁彦はもと相應の富家に生れて、小學を卒業し、中學を卒業し、そのまゝ進んで大學を卒業し、文官試験にも首尾よく及第して直に高等官となり、東京生れの美人を細君に貰うて家を持ち、一年の中にお時と云ふ女の子をさへ得て、何一つ不足なき幸福の身の上であつた。或時我れは彼れに向つて、『此世をば我が世とぞ思ふ、望月の、缺けたる事も無しと思へば』と云ふのは君の様な身の上の事で、君は是れから藤原の道長と改名するが善い、など、戯れた事もあつた。それくらゐであるから、八木には随分殿様風な所があつて、自惚も強く我も強く、何でも世間の

事は自分に都合よくばかり運んで行くもの、様に思つて居たらしかつた。それで自然、思ひやりも少く、察しも足らず、我れとこそは聊か相許す所があつて、特別に親しくもして居たれど、下の者などから慕はれるような男では無かつた。

細君はお久さんと云つて、まだ年も若し、美しくはあり、氣は利いて、若手の奏任官八木郁彦の夫人として、天晴れ似あはしき人であつたが、是れも苦勞を知らぬ東京そだちの派手娘で、人形ならば抱いてやるけれど、シ、をしたたり、ウンコをしたりする赤ん坊を、どうして私に抱けるものかと、それで濟まして居る程のお嬢様であつた。それで田舎に行くと云へば島流しにでも會ふ様に思ひ、貧乏人と云へば毛虫でも摘むほどに思つて居たのである。それでも自分の腹にアノ時ち

やんが生れてからは、さすが母親らしい所も出来て、ツイ人の子を愛嬌じるほどの柔しさも付いて来て、大ぶん氣質が變つた様に見えて居たよ。

それから八木夫婦がアノ時ちやんを可愛がつたことは又格別であつた。八木は自分の身がズン／＼と筍の延びる様に何の障もなくやつて来た如く、我が子も亦其通りに何の障もなくスル／＼と成長して行く事とばかり思うて居て、イツも時ちやんの健康を誇つて居た。お久さん(細君)は又、健康の事など考へもそめぬ様子で、只時ちやんのキリヨウばかりを誇つて居て、人の子を見る時には、『マア可愛らしいお子さんですと』など、愛嬌は云ひながらも、實は我が子と見比べて一段我が子に劣る所が、窈に愉快であつたに相違ない。

あれほどに可愛がつた時ちやんが、可愛ざかりの三つになつて、片言まぢりで憎まれ口を利く様になつた時、或日突然ひきつけて、脆くも三日の間に無くなつたのであるから、夫婦の嘆は無理も無い事であつた。彼等は始めて人生の悲惨を味はつたのである。始めて人生に不如意と云ふ事のあるを悟つたのである。而して始めて彼等の身も亦他の人と同じ運命を免れぬ事を知つたのである。筍の芽は始めて折られ、望月は始めて少し缺けたのである。お久さんは殊にアレから暫くボンヤリとして居た様であつた。

それでも、あれから程なく、丁度代りを與へられた様に、龍吉と云ふのが生れたので、夫婦は元氣を回復して、龍坊々と寵愛して、時ちやんと二人分大切に居たが、是れが又兎角病身で、八木は『何

に大丈夫』を繰返して居るし、お久さんは又、例のキリヨウ自慢に餘念も無かつたけれど、丁度時ちゃんと同じほどの大きさになつて、丁度時ちゃんと同じ様に同愛らしくなつた時、丁度同じ病氣を起して、忽然として無くなつてしまつたのだもの。氣の毒とも何とも云ひ様の無い次第であつた。あの時の夫婦の萎れようは、雷に打たれたと云はうか、谷底に落されたと云はうか、いづれにしても僅に息が通うて居ると云ふ程の見えであつた。折角最初の傷が癒えて、二度目の若芽を吹きかけて居た所を、それを又むでたらしう折つて棄てられたのであるから、夫婦があのように弱つたのも實は無理の無い所であるのだ。時ちゃんも三つで死に、龍坊も三つで死んだ。此後幾たり生れても皆又直に死んでしまひそんな心地がする。死ぬるほどなら生れないが

善いものを、折角三つまでも育てさせて置きながら、それを取つて行くとはアンマリ聞えぬ、と云ふのがお久さんの愚痴であつた。芽を出せば折れ芽を出せば折れ、それでは此上の勇氣の出ようが無いでは無いか、と云ふのが八木の不平であつた。不平たらぐ、愚痴たらぐ、八木家の望月は缺けて又缺け、今にも闇にならうとして居たのである。丁度其時こちらにも災が降つて来て、涙と涙、愁と愁、悲しき事ども語りかはして日を過ぎしたが、こちらは少し年も若し、子に別れたと妻に別れたとは又少し異なる趣きもあつて、とう／＼こちらは反抗心を燃し立て、あの通りにして飛びだした。其時あちらは彌々萎れて、八木は官海に於ける立身の氣も挫けて、はか／＼しくは勤めもせず、それにつけては健康も衰へて、兎角引籠がちに日を過ぎして居た。

お久さんは又、燃え立つて居た愛の火を消し盡して、氷の如き恨を抱いて、冷き心となつて、人の子などは見るも厭、手に觸れば身ぶるひがする様なと、横を向いて此世を渡るスネ者になつてしまつて居た。

其後は三千里かけはなれて、ツイ半年一年も無沙汰をすれば、扱イツ何から書いて善いやら、とうくそれなりに音信不通、互ひに居處も分らぬ始末で、三年立ち五年立つた今日となつて見れば、我が身の上にも、心の跡にも、變つた事が随分多いと同じく、必ず人にも變りがあらうが、果して如何に變つて居るやら、富士の麓の退隱と云へば、それだけで既に趣味のある、頗る詩的な題目ではあるけれど、扱其人々の心の跡、あゝく、楽しみな様な、氣遣ひな様な、何とも云

はれぬ心地ではあるわい。

汽車は國府津に着き國府津を發した。覺馬は頻りに思に耽つて居る。汽車は更に御殿場に着き御殿場を發した。晝近き太陽はいよく暖かに人を照して居る。

いざや汽車は覺馬の下るべき停車場に着した。

(三) 徳望ある此邊の長者

覺馬は小鞆一つ、ステッキ一本を携へて停車場におりたつた。是れよりいづれの道を取るべきかと、暫く立ちためらふ中、ツイ傍から

『オイ、坂本君』

と我が肩を叩く者がある。振向けば紋付の羽織を着た夫婦の人、それ

かと思つて見ながらも猶疑はれる容貌風采、されど善く見れば固より
其人の目元、口元、

『ヤ、是れは八木君、奥さんも御一しよで』

『ハイ、御出迎に参りました』

『近いから坂本君、ブラ／＼と歩いて行かう』

マア何と云ふ變りようであらう。人は是れを田舎じみたと云ふか知
らぬが、質朴で、温和で、さも愉快げに、さも満足げに、見るから床
しい姿である。三人打連れて野道を行くに、洋服の坂本を中に立て、
夫婦が右左から冊く様にして、あちらでは又坂本を變つたくと云ふ。
如何に變つたかと坂本が聞けば、

『大層おとならしくおなりなされて』

とお久は云ふのである。『をとならずしく』とは餘りのお言葉と云へば、

『そう申しては如何ですが、御苦勞をなされたセイか、おやさしき所
が見えます』との事。

『あなた方こそ打つて變つた、樂しげなお姿に見えますが』と云へば、

『ハイ、私共は、今ではモウ何より樂しい身の上で御座います』

『ナニ坂本君、我々は田舎者になつたまでの事さ』

八木は自ら嘲つて田舎者と云ひながら、其顔には満足の光が輝いて
居る。

『君の田舎者になつた所は、なせか知らぬが大變に尊く見えるよ』

『そるか。君はあまりハイカラにならないね』

『そう／＼、坂本さん。あなたはチットも洋行がへりの様では御座い

ませんよ』

『誰に見しよとてハイカラなんぞになりますものか』

氣輕げには云つてのけたが、覺馬の聲には聊か異様の響があつた。

『ほんとお氣の毒で御座いますねえ』

お久は早や其心を察して居る。覺馬は思はずもお久の顔を打眺めた。

どうして此人が此様にしほらしく、此様に思ひやりぶかくなつたかと、

怪しくさへも思はれるのである。

『奥さん、それからお子さんは』

『ハイ、今では十人ばかり御座いまする』

『ナニ十人』

『坂本君、今に善く話すよ。マア見たまへ、好い景色ぢや無いか』

打見やれば如何にも好い景色である。刈りほされたる一面の田に續いた富士山は、裾むらさきに頂しろく立つて居る。

『君の家はどの邊だね』

『あのソレ大きな橙の木の見える處だ』

橙の、木と云ふよりは森と云ふが適當で、一むら黒く茂つて居るが

中に、やうやう色づいた黄金の珠が累累と重なつて、遙に富士の雪と

映えあつて居るのである。其橙の木の蔭に大きな茅葺屋根の一角が

見えて居て、それが即ち代々八木家の邸宅であるとの事。

やうやう其家に近づくほど、鍬を肩にする人、牛を追ふ人、二人三

人行きあへば皆うやくしく敬禮して、一言二言、何か親しげに打語

りて過ぎゆく様、如何に此夫婦が徳望ある此邊の長者であるかは、覺

馬の目にも明かに知られた。

いよく其門に近づけば、橙の枝の蔽ひかゝりたる其門柱に、八木育兒院と云ふ札が見えて居る。覺馬は『ハテナ』と思ふ間もなく、又『なるほど』とうなつづかれたのである。

『君、こんな事をやつて居るのか』

『そうだ。我々夫婦は君、澤山な子持になつたよ』

(四) 永久の満月を眺めて居る心地

茅葺の軒を入つて、導かれたは十疊の廣間、昔風の此古き家に、多少の新しき裝飾を施して、そこに又一種の趣味を生じて居る。縁側の障子を明けはなせば、少し斜に富士が見えて、例の橙の枝が其麓の片

端を蔽うて居る。久しく歐米の風物に目なれて、歸つてからはマダ東京の雑踏より外を見なんだ覺馬には、此景色、此越きが、實に珍らしく、床しく、嬉しく感ぜられるのである。況んや、それが心おけぬ親友の家である。況んや、細君は兼ねて用意の膳部を持出して、其手料理の風味を誇るのである。膳部といふは、丸き大きな食卓で、それに主客三人前の料理が載せてある。ビールの栓も抜かれてある。『私もお相伴いたしましよ』と細君お久もソコに坐る。『あゝ、思へば随分久しぶりの會食だなア』と主人郁彦が云ひだせば、『實に久しぶりだ』『ほんとに久しぶりですね』と『久しぶり』が幾度となく繰返される。淡泊なる魚、淡泊なる野菜、厚き心、深き情、覺馬は此五年間に曾て覺えざる愉快を感じて、つくづくと今更に家庭の味みを思ふのである。

扱それよりは互ひの身の上を問ひつ、語りつ。先づ八木一家の變遷を聞くに、大要左の如き次第である。

望月の缺けはじめた郁彦の一身は、其後健康もいたく衰へて、肺さへ聊か悪いと云ふ、務の上にも種々面白くない事が生じて来る、お久もヒステリ！とでも云ひそるな容體で、始終くさくさとして暮して居る。其中又思ひもかけず國元の父親が頓死して、家の世話をする者も無いと云ふ始末、何やら斯やらで役も罷めて東京を引拂ひ、即ち今の此家に引籠つたと云ふのである。扱こゝに引籠つてから、母親の無くなつたと云ふ一事を除けば、運命の月は又此田舎の景色の間に光りはじめて、第一に郁彦の健康が回復する、お久の氣が變つて来る、其中この様な仕事を始めて、大勢賑かな家内となる、土地の者には尊敬せ

られる、おひく村の事をも世話してやる、郁彦の胸の中には折々功名心が湧かぬでも無かつたが、此田舎生活の樂しさに其れも消されて、今ではモウ夫婦ともに限なき満足、限なき愉快の中に住して、永久の満月を眺めて居る心地であるとの事。

覺馬は此話の一節を聞く毎に、『そうかなア』『そうかなア』と感に堪へぬ様子であつたが、最後になつて、

『そうかなア。世の中は實に不思議な者だ、人生は實に微妙な者だ』と又今更に感嘆の聲を漏して居た。郁彦は思ひついて

『跡の話は又今夜の事として、君一つ内の育児室を見て呉れたまへ』『ウム、それはゼヒ見せて貰はう。ドレ』と覺馬が立ちあがる。郁彦もお久も續いて立つ。其時フト覺馬の目についたは、二つ並んだ大き

な額、二つとも子供こどもの肖像せうざう、一つは女をんな、一つは男をとこ、問ふまでもなく時ときちやんと龍坊たつぼう、覺馬かくまは暫しばらく眺ながめて居ゐる、夫婦ふうふも側そばに立たつて居ゐる、覺馬かくまは幽かすかに嘆たんせい聲こゑを漏もしたが、

「君きみ、育いく兒じ室しつはアレかね」と忽たちまちに目めを轉てんじた。三人さんにんは打うち連つれて育いく兒じ室しつの方ほうに趣おもむいた。育いく兒じ室しつと云いふのは稍やう西洋せいやう風ふうの小ちいき建た物もので、半はん分ぶんは疊たたみ、半はん分ぶんは板いたの間ま、板いたの間まは遊あそび所どころ、疊たたみの上うへは寢ねる所ところ。今いま板いたの間まには五ごつばかりの男をとこの子こが木馬もくばに乗のつて遊あそんで居ゐる。三さんつばかりの女をんなの子こは手て鞆まりも持もつて其その側そばに立たつて居ゐる、疊たたみの上うへにはスヤすくと寢ねた子こが二人ふたり、乳母うばに抱だかれて乳ちを飲のんで居ゐるのが一人ひとり、そこに外そとから歸かへつて來きたのは、草花くさばなをドツサリ積つんだ乳母車うばぐるま、ムツクリふとつた二人ふたりの子こが、其その草花くさばなに埋うづめられた様ように向むきあつて乗のつて居ゐる、押おして來きたのは七しちつか

八はちつの女をんなの子こ、是これはモウ大分だいぶんお久ひさの手助てたすけになりそうな。

「おつかさん、此このお花ばなを活いけて頂ちやうだい戴だい」と七しちつか八はちつのが自慢じまんげに花はなを差さし出だす。

「オ、奇麗きれいな花はなですね。今いまに活いけてあげましよう」とお久ひさは其その勞ろうを惱ねがらうて居ゐる。

「菊きくちやん、お花頂戴はなちやうだい」と手鞆てまりこの子こが走はしつて來くる。

「僕ぼくにも、僕ぼくにも」と木馬もくばの腕白わんぱくもやつて來くる。そこに又またワアツと恐おそろしい泣聲なきこゑが聞きえて、四よつばかりの女中ぢやちゆうに抱だかれてやつて來くる。

「オ、どうしたく、轉ころんだか、よしく、おつかさんが抱だいてやりましよう」とお久ひさは其その子こを抱だきあげる。郁彦いくひこも側そばからアヤして居ゐる。

覺馬は此景色に深く打たれて、一言も言葉は無けれど、云ふに云はれぬ嬉しげの微笑を漏して、只つくねんとして立つて居る。

(五) 心の道行

覺馬は汽車の疲れを補ふ爲め、午後の二三時間を晝寢に過して、目さめて見ればお久が来て『お湯が沸きました』と云ふのである。

湯からあがつて、富士の晩景を眺めながら又晚餐の食卓に着けば、今晚はおやかましくとも子供にもお相伴をお許しなされてとお久の挨拶。成程、七つ、五つ、四つ、三つ位のが四人五人座つて居る。笑ふのがある、喋べるのがある、泣くのががある、それはく賑かな事である。例のビールなど傾けて見てあれば、お久と女中とが右左から守を

して、随分と世話の焼けた事である。さりながら覺馬思ふに、五年間の歐米の食卓に、是れほど楽しげな、是れほど心ゆく、風情ある景色を見た事は無いのであつた。

食後は又三人の對話が始まつて、今度は覺馬の身の上ばなし。覺馬は例のヤケ氣味の反抗心でアメリカに渡り、天にも依らず、人にも依らず、獨立獨歩で金さへ儲ければそれで善い、大金を攫んで日本に歸り、一威張り威張つて見せようと、只それだけの望であつたが、段々と不仕合せな目にも會ふ、案外やさしい外國人の手にも觸れて見る、少し考へも變つて来る、獨立など、威張つて見てもダメな事だと氣がついて来る、やはり人にも依らねばならぬと悟つて来る、我れ一人が無理な事して金持になつた所で、それでは我れ一人の安樂に止る事、

我れと人と相依つて、世界中の人が皆互ひに凭れあうて行かうとするには、大いに別な考へが入る事と、始めて是れまでの愚を覺つて、丁度其頃、或教師から社會主義の説を聞いて、豁然として夢の醒めた心地がして、我れ此主義の爲に生涯を捧げんと決心して、それから歐羅巴の諸國をも巡回して、社會主義の名士にも交はり、労働社會の事情をも探究して、モウ大概世界の形勢も分つたし、將來の大勢も見えて來たので、そこで此主義を日本に行ふ爲め、今度やうやく歸つて來たのであるとの事。

八木夫婦は此話に深く感じて、郁彦は頻りに社會主義の事に就いて語つて居たが、お久は又、

『それにしても阪本さん、早く善い奥さんをお貰ひなさらねば』と切

出した。覺馬は一向乗らぬ顔で、

『私は奥さん、今はソナ氣は全くありません』

『でもあなた』

『いや全くです』

それについて八木夫婦が覺馬の説を聞くに、覺馬はや、暫く沈吟した後、

『僕は君、最初、天にも反抗する氣で、我妻を奪はゞ奪へ、そんな事に屈するものかと思つて居たが、後に段々考へて見ると、それは淺はかな人間の我であつて、少し深く天意を察して見れば、如何なる場合にも謹んで天命に服従するより外は無いのだ。それで、妻があれば在る所で、それ相應の働きをする、獨身になれば爲つた所で、

それ相應の働きをする、それが正當であらうと僕は思ふ。夫婦者には夫婦者の天職があり、獨身者には獨身者の天職がある、いづれにしても天職を盡すのであるならば、僕は今現に獨身者であるから獨身者の天職を盡さうと思ふのだ。何も必ずしも人が皆結婚せねばならぬ事はあるまい。それに又、今の世に立つて社會主義などを唱へるには、進退自由の獨身者を要する場合が甚だ多いであらうと思ふ。そこで其必要に應ずるのが即ち僕の天職であらうと僕は堅く信じて居る。尤も、そんな強さうな事を云つて居ても、いつ又どんなに考へが變るか知れないが、變つたら變つたで、それも又人情の自然として、僕は敢て今の考へを固執しようとは思はぬ。然し兎にかく僕は今ソウ考へて居るのだ。それで僕は、今ではモウ、妻の死んだ事は

を恨みには思はぬ。死ぬるも生きるも天命だ。死ぬれば又死ぬる所に妙味がある。僕の今日の境遇に天職があるならば、妻の死は實に必要であつたかも知れぬ。妻の身から云へば、彼れの死其者が實に大いなる事業であつたかも知れぬ。奥さん、僕の考へはマア斯なものですが、あなたドウお考へなさいませす』

『其様に仰しやると何だか涙がこぼれそうに御座います』とお久は目をしばたいて居る。八木は頻りに感嘆して、腕を組んで大息を吐いて居たが、

『阪本君、君も大分悟つたね。お互ひにツライ目を見たからなア』
『そうさなア。苦勞もしたし、年も取つたし、ちつとはマジメにもならうぢや無いか。それでマア僕の方の話は濟んだが、君達夫婦が此

育兒院を思ひたつたに就いての、心の道行を話して聞かして呉れたまはぬか』

『いや、それを今折角話したいと思つて居たが』と郁彦はお久を顧みて、

『それは寧ろお久の事業だから、お久、お前からお話し申さぬか』

『では私からお話申しませう。實は私も聞いて戴きたいので御座います。私は御存じの通りの我儘者で、善いにつけ、悪いにつけ、自分の事ばかり勝手な事を考へて居ましたが……』

『そう、龍坊のお亡くなり跡で、奥さんは確か、人の子に手が觸ると身ふるひがすると云ふお話でしたね』

『そうでしたとも、そうでしたとも。人の子なんぞモウ見向くも厭で

御座いましたが、東京を引拂うてコチラに参りましたから、何だか寂しくて、物足らぬような氣が致しまして、又子供が欲しいと思ふようになりました』

『お久は君、元來の子供嫌ひで、それが二度の打撃にヒネくれてしまつて居たのだが、それでも一度蒔かれた愛の種はイツまでも枯れぬもので、とうとう又芽を吹いたのだらうと僕は思つて居るよ』

『成程。それに奥さんは又大の田舎嫌ひでしたね』

『え、く、田舎と蛇とは大の嫌ひで御座いましたが、龍坊が無くなつてから、賑かな所が厭になりました、ドコか人の一人も居ない所に行きたいと思つて居りました。それでコチラに引込むにも喜んで参つたので御座います。参つて見れば景色は善し、ホンに田舎は善い

者だと思ひました。之れも龍坊に教へて貰つた様なもので御座います。それから子供が欲しい、子供が欲しいと思つて居りましたが、宿も病身にはなりましたし、私も色々病氣が起りました、お醫者に聞いても逆もモウ子供の出来る望は無いと申されましたので、それからフト貰ひ子をしようかと思ひつきましたのが、今の仕事の緒口で御座いました。丁度其頃此村に、五つと乳呑と二人の子を残して夫婦ともに亡くなつた家がありました、村中が寄つて相談しても、別に親戚と云ふ程の者も御座いませず、どうして善いやら手の付け様も無い始末で、ほとほと困つて居ると云ふ話を聞きまして、ツイ私も見舞に行つてやりましたが、見れば其子供の可愛らしさ。乳呑の方が泣いて居るのでチョットそれを抱ますと其儘すぐに泣きやん

でしまふ、下に置くと又泣きだす、抱きあげれば又泣きやむ、如何にも見棄て、歸りかねましたので、とう／＼内まで抱いて來ましたが、それなりけり二人とも、とう／＼内で世話する事になりました、それが此育兒院の始まりで御座います』

『それでね、阪本君。僕はツク／＼と思つたよ。あ、云ふ性質のお久が、人の子供を大勢預つて、うるさいとも思はずに世話する様になつたとは、全く自分に子を持つたお蔭だね。して見ると我々は子供の爲にも感化せられて居るので、三つ子の感化力も亦随分あるのだと思ふね。そう考へて見ると、お時も龍吉も此世に生れた甲斐が無い譯では無い。君が君の細君について云ふ通りで、三つで死ぬれば三つで死ぬる所に大いなる意味があるのだ』

『そうだ、そうだ、實にそうだ』

『それでね、僕は其時深く考へた。先刻も云ふ通り、白状すればマダ僕にも多少の功名心は燃えて居たが、子供の死んだのも、僕の病氣になつたのも、こゝに引込む事になつたのも、お久の考への變つたのも、それが皆自然の配劑かと思はれて、それに従ふのが即ち君の謂ふ天職であらうと思つたので、それで其二人の子供を預つたのを手始めに、とう／＼此育児院を僕等夫婦の生涯の事業としたのだ』

『あゝ、そうか。實に君立派な事だね。僕は御夫婦に感謝する。それから此(肖像の額を見あげて)時ちゃんと龍坊とに深く感謝する。此二人が身を殺して君等夫婦に多くの孤兒貧兒を養はせるのだ。君の云ふ通り三つ子の感化力も實に恐ろしいものだね』

夜は既に更けて十二時となつて居た。三人は暫く無言で子供の肖像を眺めて居た。

(六) 無限の満足、無限の安心

阪本覺馬は富士の麓の好風景の中に、多くの孤兒と共に八木夫婦の暖かき情に打たれ、樂しき散歩と樂しき談話とに猶二日を過し、無限の満足を感じ、無限の安心を得て、四日目の早朝八木夫婦に送られて、東京に歸るべく再び彼の停車場に來た。

『それでは是れでお別れとしよう。八木君、僕は君の家を自分の内だと思つて居るから、戦ひに疲れたら又休息にやつて來る。奥さんドウザ外の孤兒とおなじ様に私を可愛がつて下さいませ』

「オホ、、、、又善い奥さんを見つけて置いて上ますよ」

「ハ、、、、又お願ひ申す時があるかも知れませぬ。然しマア今では

私は此主義を妻として置きます」

「そうさなア阪本君。君は社會主義を妻とする、僕等は育兒院を子と

して居るのだ。大小は兎もあれ、それで無くて事業が出来るもので

は無い。ヤア汽車が來たようだ。左様なら」

「左様なら」 「左様なら」

（明治三十六年夏、家庭雜誌所載）

予の半生

予は予の半生を人に語りたく思ふ。去年の暮、平民社の木下、幸徳、西川、石川の四君と共に懺悔會を開いて、各々その半生の歴史を語つた時、予はそれを其まゝ、平民新聞の紙上に發表する積りであつた。然し、それは都合あつて止めにしたが、今度は丁度その發表の好時機を得たので、茲に大略の事を物語らうと思ふ。

(一) 幼年時代

予の父の家は豊前小倉の城主小笠原大膳大夫に仕へて十五石四人扶持を賜はつたもので、父は御鷹匠、御書院番、檢見定役、後江戸に出

府して御臺場詰等を勤めたものである。然るに維新の際、小倉と長州との間に戦争あり、小倉の城は長州勢に焼かれて、小笠原の家中は豊津の高原に移り住んだ。

扱ての豊津といふは、昔から『なんぎよう原の晝狐』と云ひ傳へられて居たほどで、松と茅との茫々たる高原であつたが、それを切り開いて假の城壁を作り、邸宅を作り、道路を作り、市街を作り、や、新城下の姿を爲しかけて居た處に、廢藩置縣、版籍奉還と引續いて世の中が變つたので、此の瘦松原は只だ瘦士族の住所となり了つた。

予は明治三年十一月廿五日に生れ、此の高原の一部なる石走溪と云ふ處に成長した。予の家は四間より成れる萱葺の一棟で、庭、花園、竹籬、菜園に取巻かれて、『裏の山』と『前の山』とが更に其の外廓を

成して居た。『裏の山』は松林の丘で、『前の山』は小松原と桑畑とであつた。

予には二人の兄があつた。予は母の四十歳以後の子であつた。故に予が物を覚える様になつた頃には、予の父母は既に稍や老いたる人であつた。父は氣の小さい、正直な、そして何事にもチヨイト器用な人であつた。碁も打つ、花も活ける、俳句もやると云ふ風であつた。水瓜を作る事も上手、接木をする事も得意であつた。母は寧ろ不器用で、顔も姿も美しい人ではなかつたが、極めて在の儘を打出した、飾のない、情のある人であつた。二人とも無學で、母は殊に『いろは』の外、漢字は一字も知らぬ程であつたが、それでも學者風の家で育つたので、歴史に就ては多少の耳學問があり、それに淨瑠璃を多く聞かされて居

たので、頗る義理人情に通じて居た。和歌も少々やつて居た。予は父と母とが幾度か俳句と和歌との趣味に就て言ひ争ひ、遂に互ひに了解すること能はずして、笑ひながら物分れになるのを、頗る面白く聞いて居たことを記憶する。今日より思ふに、母は情を和歌に述べ、父は才を俳句に發して居たのである。予は斯くの如き父母の間に育てられて、才情二種の感化を受けて居た。然しながら予は才の感化よりも寧ろ多く情の感化を受けたと思ふ。予は物乞を憐む事、猫を愛す事、茸を取り蕨を摘む事などを母に學んだ。母が予を連れて山など歩き、「オ、えい景氣ぢやなア」など、心の底より自然に對する賛嘆の叫を發した時、彼は知らず識らず天地の美に對する予の幼き眼を開いて呉れた。予は又、淨瑠璃の文句を引用した、涙ながらの母の教訓に依つて、

幾度我が心の底を洗はれたか知れぬ。然し、躑躅の花ざかりの比に豆の飯を炊いて、『裏の山』の草原に毛布を敷いて、其上で晚餐をやつた事などは、父と母と共通の趣味であつたらうと思ふ。

予の幼年時代は、斯くの如き家庭に於て、福澤先生の『世界國盡』など諳誦しながら過された。『世界は廣し、萬國は、多しと云へど、大凡を、五つに分けし名目は』など、云ふ語呂の善き長文句を、一誦して忽ち記憶したと云ふので、予は先づ學問の才能ある事を稱へられて居た。

小學校は城の跡の半ば破れた建物の中に在つた。舊藩の思想がまだ半ば破れて残つて居た。予は士族の小坊様として、町の者や百姓の上へ一段高く立つて居た。そして舊藩主が東京から歸られた時、道端に

下座して之を迎へた事もある。然るに學校では、西洋のリード直譯の小學讀本を讀んだり、『マテマチカル、ジヨウガラヒーとは』など、譯の分らぬ(然しながら調子の善い)地理初步といふ本を空讀したりして居た。尤も一方には漢文の國史略など讀まされて、松苗氏の排佛敬神主義をも吹込まれて居た。

然し、要するに、小學校は多少の文字を予に知らしめたのみの事で、別段著るしい感化を予に與へたとも思はぬ。只だ予は常に優等の成績を誇として居た。

予の幼年時代は先づ是くらゐな平凡なもので、或正月、叔母の家に、行つて、黒砂糖の曲物と長崎といふ風とを並べて見せられ、どちらでも好きな方をヤルから持つて行けと云はれ、どちらにしようかと非常に

迷うた末、やつと決心して風を貰うて歸り、例の『前の山』でそれを揚げて、其日一日遊び暮した事を覚えて居る。

予の長兄は早くより東京に出て陸軍省の官吏となつて居た。予の兄は同じ豊津の本吉氏に養はれて居た。

(二) 少年時代

豊津の高原の一部、臺が原といふ處に中學校があつた。元は藩の學校で、後に縣立となつた。予は十三歳にして此の中學校に入つた。

予は此の中學校に於て、不完全極まる普通學の智識と、少しばかりの英語の讀書力とを養はれた外、餘り多くの感化を受けたとは思はぬ。若し多少の精神的感化があつたとするならば、それは矢張り論語、孟

子、八家文、史記など、及びそれを教へた諸先生とに依るのであるが、それとても朱子學の弊を極めた、因循姑息、小心翼翼、兎かく近處に事なかれ主義の學風で、予は寧ろそれが爲に人物を小にせられた心地がする。予の父の如きも亦、此の學風の最も通俗なる代表者の一人であつたかと思ふ。

然しながら、學校以外に於て、予は予の親戚の長者から甚だ多くの感化を受けた。

予の母の從弟に志津野範興(後に拙三)といふ人があつた。是は維新の際に於ける志士の一人で、志津野先生として青年書生の間には推戴せられて居た。ソコヒといふ眼病に罹つて、強度の眼鏡を掛けた姿が先づ人に異なつて、汚ない着物から破れかゝつた煙草入などまで、頗る

脱俗の趣きがあつた。此の人が藩の大參事か何かを勤めて居た時、貰つて來た月給を床の間に放り出して、書生輩の金を乞ふ者あれば、自由其の取り去るに任せたといふ様な逸話がある。予は此のナヂさんに屢々新聞讀みを命せられた事がある。そして善く讀むと云つて譽められた事を覚えて居る。此の人は歌も上手、字も上手であつた。そして其の歌にも、其の字にも、頗る飄逸の趣きがあつたと思ふ。

予の叔母(母の妹)の夫に篠田蒼安といふ人があつた。是れは醫者として、歌よみとして、字を善く書く人として知られて居つた。其の頃からモウ餘程の老人で、其の髪白く眉長き顔が、予の眼には實に尊く映じて居た。夜その家に遊びに行けば、此のナヂさんが一種奇妙な節で以て、『爾時、無盡意菩薩、合掌して佛に白して言さく』などと、觀

音經か何かの訓讀をやつて居るのを、何時でも聞かされた。

予の叔父(母の弟)志津野範雄といふは、黙々とした人で、是も歌な

ど詠んだ人であるが、まだ年は若し、明治の世の事業界に身を投じて、

或は金貸會社を起し、或は石炭採掘を試みたが、一時多少の繁昌をし

たにも係はらず、遂に大失敗を招き、其の揚句に酒に耽り、頓に病を

得て死んでしまつた。予は餘り親しく此のチヂさんに接した事は無か

つたが、只だ何となく稍や大膽なる人物として記憶して居る。

予の叔父(父の弟)廣瀬三津留といふは、節丸といふ農村に住んで、

三十年一日の如く小學教師を勤めて居る。予は此のチヂさんに依つて、

樸實恬淡なる性情と、簡易平靜なる生活との、如何に尊むべく樂むべ

きものなるかを、知らず識らずの間に教へられた心地がする。

予の父の從弟に森友力藏と云ふ人があつた。委しい事は知らぬが、

此の人は故あつて自殺した。予は此の人を見た事は無かつたが、兎に

かく予は此の人に於て氣節ある人物を想望して居た。字の餘程上手で

あつた人で、予は其の唐詩選を書いた折手本を習つた事がある。

此の人の姉に「おきの」といふ人があつて、婦人に稀なる讀書家で、

折々予の家に来て、八犬傳や西遊記の話をした事がある。此の婦人讀

書家が學問好の少年の好奇心を刺激した事は實に多大であつた。

右の二人の母(即ち予の父の叔母)も亦一風變つた人で、父に宛てた

手紙に『そんな事はをれはいやだ』と云ふ様な、思ひきつた言文一致な

どがあつた。予は幾度か此の人に連れられて、力藏氏の墓に參つた事

がある。

予の父方の祖母(即ち右の人の姉)は、兄弟中で一番に筆蹟の善かつた人と聞いて居た。又母方の祖父は非常の好人物で、邸の裏の蜜柑が熟すると、近處の子供を集めては、皆バラ／＼と撒いてやつた、といふ様な話を聞いて居た。

親戚以外に於ては、今の衆議院議員たる征矢野半彌君等が、卒先して國會開設の請願を爲し、引續いて自由民權の運動をしたのが、予等少年をして頗る崇敬の念を起させた。十五六歳の時、予等も亦た友達仲間、演説會など開いて居た。

人物の感化はマアこんなものであつたが、予は人物以外に於て、此の故郷の山水から多大の感化を受けたと思ふ。

豊津の高原より西方を望めば、連山重疊して一帯を成して居る。中に

最も高く秀でたるは英彦山(通稱彦山)である。國中第一の高山として、何となく敬慕の念が湧いて来る。西の方には稍や近く大坂山と馬ヶ嶽とが聳えて居る。大坂山はなだらかな丸い山で、夏になれば夕立が何時も此の山からやつて来る。馬ヶ嶽は稍や富士形を成した赭まぢりの角の立つた山で、頂上には松の老樹が村立つて、非常に好い景色を爲して居た。是は豊臣秀吉の手に攻め亡された古い城跡で、其の落城に就ては色々な傳説が残つて居る。予は幾度か是等の山々に登臨した。

彼の彦山より流れ出で、此の馬ヶ嶽の麓を流れる川がある。名は犀川と云ふ。處々に依つて花熊川、高崎川、天生田川とも云ふ。釣に行き、泳ぎに行き、網打に行き、ゴリ押しに行き、洗濯に行き、大根洗ひに行き、予は常に豊津の高原より此の川に下つて遊んで居た。此

の川の中で危く死にかけた事も二度ほどある。
予は是等山水の美を想ふ毎に、今でも魂飛び神迷ふの感がある。あ
、故郷！故郷！故郷の慕はしきは其の人の爲よりも寧ろ其の山水の爲
である。

予は是等の山水と人物との間に、謂はゆる郷黨の秀才として中學校
を卒業した。卒業前、予は秀才たるの故を以て某先生の推薦を受け、
中村氏といふに養子となつて居た。そこで予は中村利彦と名乗つて東
京に遊學する事となつた。

(三) 東京遊學時代

明治十九年四月、予は大阪、京都を見物し、伊勢參宮を爲し、四日

市より横濱まで汽船に乗り、戀ひこがれたる東京に着いた。予時に年
十七。

東京には予の養家の叔父に當る馬場氏といふが市ヶ谷に住んで居て
予は先づそこに世話になつた。此の馬場氏は當時陸軍の中佐であつた。
小倉藩出身の先輩の中には、今の奥大將、小川大將、元の小澤中將の
如き、陸軍の軍人が多かつたので、謂はゆる活潑なる少年は、多くは
士官學校入學を志望した。然しながら予は二三の友人と共に大學の方
に向つた。そして『卒業の後、何になるか』と叔父に問はれ、『代議士に
なる』と云つてヒドク其の不心得を叱られた事を覚えて居る。
予の國には舊藩主と有志者との積金に依りて、學生に貸費をする育
英會といふものがあつた。今でもある。予はその貸費と馬場氏の出

費とを受け、先づ小石川の同人社に入學した。同時に牛込簗笥町に月二圓六十錢で下宿した。同人社は其ころ、坪内雄藏先生がスペインの萬國史やマコーレーのクライヴ傳などを軍談流に講釋して、大いに生徒を喜ばせて居た。

次に予は神田淡路町の共立學校に移つた。共立學校と錦町の東京英語學校とが、當時高等中學校に對する二大豫備學校であつた。共立學校には其ころ、今の外交官たる宮岡恒次郎君、日置益君、それから二三年前衆議院議員になつた長澤市藏君などが、大學生の内職に教へに来て居た。予の同級の生徒中には、今の文學博士桑木嚴翼君なども居たと記憶する。予は駿河臺鈴木町の目下部といふ家に三圓五十錢で下宿した。此の目下部といふ家は、今では二階作りの大變立派な宿屋

になつて居るが、二十年間の進歩發達は實に恐ろしいものだ。

其の翌年の夏、予は首尾よく一ツ橋外の第一高等中學校に入學した。

小倉服の見すばらしい制服を着て大得意であつたのが、今思ふと吹きだしたくなる。

其秋より予は寄宿舎に入つた。寄宿舎で心易くした人の中には、今

の内務省の書記官清野長太郎君や、主獵官の小原詮吉君などが居た。

俵孫一(某縣書記官)、松田三彌(醫學士)、池内卓二(中學校長)、西加二

太(法學士)、末延直馬(鐵道作業局員)等の諸君も居た。同郷の同級生に

は、加來源太郎(長崎の裁判官)、小關雅樂(英國公使館在勤)、杉元平二

(三井銀行濱横支店詰)等の諸君が居た。

予は是等の諸友人から種々の感化を受けたに相違ないが、高等中學

その者からは別段の感化を受けたとも思はぬ。當時の高等中學は豫科三年本科二年で其の豫科は尋常中學の課程を繰返すのであつた。そこで予にとつては、英語の外、別に珍しいものは一つも無い。少々馬鹿にして強勉する氣も出ぬ。先生達の中にもアンマリ感心する人は居ない。校長は古莊嘉門君だつたらうと思ふ。何だか髭むちやの頑固な古物だと思つて居た。予は學科に勉強するよりも、ボート漕だの、器械體操だの、方が面白かつた。豫科二年になつてから、第二外國語が始まつて、予は政治科を志願した爲め獨逸語をやりかけたが、あの龜の子文字が厭でくくならなんだ。

或夜、寄宿舎の庭で、予は實に珍らしく新しき一種の感想に打たれた。夜ふけて只ひとり歩いて居る中、フト天を仰いで燦然たる星を見

た。此の星の光は小供の時から幾度見て居たか知れぬけれど、予は此の時はじめて其の意義を考へた。少しばかりの天文學の智識を悉く呼び集めて其の意義を考へた。而して宇宙の無限大なる事と此の『我』の極微なる事とを悟つた。是まで漢學流に『芳名を竹帛に垂る』とか、『期する所、功名に在り』とか云ふ位な、淺薄な野心と道德とを以て養はれた予は、此の『極微』の觀念に依つて非常に心細く感じた。塵の如く、泡の如き『我』を、實に詰らなく馬鹿々々しく感じた。それより後暫くは、夜になつて天を見る度に、此の厭な味氣ない感じを起すのが常であつた。

若し此の時に當つて、予に宇宙人生の眞意義を説いて聞かせる者があつたなら、予の其の後の生活は大いに異なつた者であつたらうと思

ふ。惜しいかな、予は其の頃より漸く酒を飲む事を覚えて、只だ眼前の物慾と客氣とに驅られて、宇宙の、人生のと、そんな迂遠な事は考へぬ様になつた。

予は寄宿舎を出た。悪友(！)と共に下宿した。そして『英學雜誌』といふものを發行して、二號か三號かで失敗した。是は三つ子の根性であつたかも知れぬ。然し其の相棒は、今では二人とも銀行家になつて居るからをかしい。此の雜誌騒ぎの前後に、予は遂に吉原に連れて行かれた。敢て今更辯解する譯では無いが、予は東京に來た當座、下宿屋の二階から夕暮の空を眺めて、故郷を思うて泣いた事も度々ある。然るに、彼の馬場家に行つて見ても、チヂさん、チバさんに會つて見ても、一向に暖かみを感じない。下宿屋にも、寄宿舎にも、勿論家庭の

暖かみは無い。予は知らず識らずの間に、非常な缺乏を感じて居たに相違ない。そこに謂はゆる悪友が來て連れて行くのだから堪らない。其の年の暮には、予は既に亂暴狼藉なる放蕩書生と化して居た。故郷を思うて泣いたシホらしさは何處へやら、酒量を誇つて磊落自ら喜ぶの悪少年となり了つた。

明治二十二年春、憲法發布の時など、予は悪友と共に頻りに酒を行つて氣を吐いて居た。學校の方は其頃モウ月謝不納で除名せられて居た。それより後、予は殆んど着る物もなく、古洋服を纏うて破靴を穿ち、一定の宿所もなき程の身の上となつた。

此の有様の間に、養家からは離縁の申込を受け、實家からは長兄急病死去の報知に接した。予は親戚間宮氏の助を得て、兎もかくも歸國

した。

(四) 大阪時代

予は兎もかくも歸國した。長兄は小倉の銀行に出て居たが、急性腹膜炎とやらで死んでしまつた。跡には財産も何にも無い。老父母は只だ當惑して居られる。中兄は本吉氏に養はれて既に子供まで出來て居る。予が跡を繼ぐより外に策は無い。それには幸ひ養家から離縁の申込を受けて居たし、早速其の手續に及んで、予は再び堺利彦となつた。其ころ中兄は大阪に行つて、『花かたみ』といふ雑誌など發行して、文學を以て身を立てんとして居た。そこで色々相談の末、予も亦た老父母を奉じて大阪に赴いた。

予は高等中學に居た時分から、二三年上級の尾崎紅葉君等が『我樂多文庫』などやるのを見て、稍そんな方に心を動かした事もあるし、歸國の時にも紅葉君の『二人比丘尼色懺悔』を持つて居た程で、國に居る間にも、譯の分らぬ短篇小説を一つ作つて『福岡日々新聞』に載せて貰つた事もあつた。それで大阪に行つて以後は、兄の尻についてスツカリ純文學の方にはいつてしまつた。然しながら予は何か職業に就かねばならぬ。或人が予を天王寺高等小學校の英語の先生に世話して呉れた。月給金八圓五十錢、後累進して十圓五十錢。予は兎にかくそれで天王寺の東門に家を借り、老父母と共に住んで居た。予時に年二十。斯くて予は四年ばかり英語の先生を勤めた。功名にはやつて居た多

望の秀才が、忽ちにして此の地位に下つたのであるから、予の心中の煩悶は實に甚だしい。不平、不平と云つては酒ばかり飲んで居た。折々は遊びにも行つた。然しながら、此の間に於て多少の學問もせぬでは無かつた。源氏物語も通讀した。伊勢物語、枕の草紙など、一とほりの和文の書類は目を通した。本居宣長の『詞のやちまた』も讀んだ、『詞の玉の緒』も讀んだ、『玉あられ』も讀んだ。古文法には一わたり習熟した。和歌の會、俳句の會にも出た。いづれも多少は作りおぼえた。其頃、西村天囚、渡邊霞亭、本吉欠伸(予の兄)、加藤紫芳、木崎好尙、磯野秋渚等の諸氏の間、浪花文學會といふが設けられて、『なにはがた』といふ小説雑誌が出た。東京では『都の花』『早稻田文學』などの盛んな時代であつた。予も亦た浪花文學會の一員に加へて貰つて、『な

はがた』に短篇小説の様なものを書きはじめた。アーヴィングの『肥えた旦那』など反譯した事もあつた。それより予は枯川と號して、愈々當世流行の謂はゆる文學者となつた。明治二十六年二月、予は大阪毎朝新聞といふ小さな新聞(中西牛郎氏主筆)の記者となつた。小學教員を罷めて新聞記者になつたのは、予に取つて非常な得意であつた。毎朝新聞では、予は小説など書かせられて居たが、ドウした事やら(多分生意氣だとか何だとか云ふ譯であつたらう)一二ヶ月にして罷められてしまつた。それより予は久しく浪人生活をやつた。其頃には枯川の名は稍や大阪界限に知られて、輕薄な少年や本屋の番頭などに『先生』などと云はれた事もあつたので、どうやらこうやら原稿料生活をする事が出來た。

處が、此の浪人生活は甚だしく予の行狀を悪くした。當時の文學者は一般に放縱で、花柳界に遊ぶ事を以て其の能事として居たかの觀がある。予の如きは、東京以來引續きの放蕩が、此の空氣に觸れて更に一層の甚だしきを加へた。と云つて金は無し、遊びと云ふ様な遊び方は出來なのだが、似たり寄つたりの相棒共と、随分耻かしい無茶をやつた。

二十六年十一月、予は又『新浪華』といふ新聞社に入つた。是は國民協會の機關で、熊本の數廣光氏が社長となつて居た。予は此に於て少しく政治の方面に觸れて來た。其頃、大阪朝日新聞には高橋健三氏が主筆となつて、東京の『日本』新聞と相應じて、盛んに國粹主義を鼓吹し、條約勵行論などが盛んに起つて居た。國民協會は其の保守思想に於て

稍や彼等と一致して居た。予は何となく其の思想の傾向を帯びて來た。

二十七年には日清戦争が起つた。予は生ぬるい小説など書いて居られぬほどに敵愾心が跳りあがつた。臨時議會が廣島に開かれた時、予は『新浪華』の記者として其の傍聽に出かけた。廣島では、佐々友房、古莊嘉門氏等の下に、國民協會の事務所に着つて居た。古莊君には毎度御縁のあつたものだ。其時同宿の新聞記者には、『中央』の水田榮雄、『新朝野』の杉田藤太、『九州日々』の山田珠一等の諸君があつた。

同年の暮、通常議會を聴かんが爲と、外にチヨットした詰らぬ企てがあつて、久しぶりで東京に來た。處が、久しぶりで東京に來た嬉しさに、二三の相棒と共に又大ぶん馬鹿をやつた。

馬鹿をやりつゝ、東京に滞在する中、大阪から『母危篤』といふ電報が

来た。是は實に予の頂門の大打撃であつた。予は非常なる恐を感じた。不孝といふ感が痛切に湧いて来た。此の五六十年の甚だしき貧乏ぐらしの間に、不安と寂寥とを味はひ盡させて、六十七になる母と七十になる父とを、何時まで生きるものと思つて居たやら、予は今更に眼の覺めた心地がした。『利彦の身の立たぬのは、我々年寄が何時までも厄介を掛けるからで、彼とて萬皿の馬鹿とも見え、足手まといが無くなつて、思ふ存分やらせて見たなら、又運の開ける時があらうも知れぬ』とて、予の母は曾て自殺しかけた事もあつたと云ふのだ。然しながら『年を取つては自分で死ぬほどの力も出ぬ、それにお前が出て行く後姿を見て居れば、又未練が湧いて来て涙ばかり翻れる』と語られた事もあつた。予は居る者、放縦の生活を續けて居る間にも、豈に幾分か心の底に應へる所なきを得んや。然るにそれが今、相變らずの馬鹿の爲に、母の死目にも會はれまいかといふのだ。

予は取る物も取りあえず大阪に歸つた。幸ひにも母はまだ生きて居る。『乳房にぶらさがつた奴共を見せず死なせるは如何にも残念と思つて居たが』と、父も非常に喜んで呉れた。母も勿論大喜びであつた。せめてもの事に、予は兄と共に看護の手を盡した。一月ばかりの後、母は遂に死んだ。

茲に又『新浪華』社に一大事が起つた。社長籙氏が何やらの嫌疑で一時監禁せられた。予は據なく跡の始末を付くべき地位に立つた。他の重立たる社員と相談して、色々やつては見たもの、元來が苦しい、苦しい、やりくり身上であるので、殆んど一歩も進まれぬ形勢である。

予は固より一文の月給も取る事が出来ぬ。數氏の家族も生活に差支へる。こんな有様で二三ヶ月を過して、『新浪華』社は遂につぶれてしまつた。予は折しも京都に来て居た佐々友房氏を説きに行つて、金鎖か何かを貰つて来て、老獺なる氏の爲に大いに感激させられた事などもあつた。

『新浪華』の没落前後、予は寧ろ滑稽な貧乏暮しをして居た。米を一斗二升づゝ買つた事もある。それでも『下女』と稱する者が雇つてあつたからをかしい。地方新聞に小説を書いて送るのが予の生活の綱であつた。此の際、色々縁談などもあつたが、此の生活の有様では話になりさうもなし、父をして更に甚だしき寂寞と不安とを感せしめた。

扱大阪時代に於ける予の思想の跡を検して見るに、先づ文學と政治との争ひがあつた。予は深き文學趣味を有して居た。然しながら當時の淫靡輕薄なる文學は(自分も其の淫靡輕薄に染んでは居ながら)どうしても十分に予を満足させる事が出事なんだ。予は又政治的の野心をも有して居た。然しながら予にはそれだけの素養もなし、又主義もなき生命もなき政治は、どうしても十分に予を満足させる事が出来なんだ。予は文學にも満足せず、政治にも満足せず、猶ほ其の奥に何物かを求めて居た心地がする。次に予の心中には國粹主義と世界主義との争ひがあつた。予は高橋健三氏、西村天囚氏等に依つて大ぶん國粹主義を吹込まれたが、又一方には澤福渝吉氏、徳富蘇峰氏等の文章に依つて、少からず其の感化を受けて居た。當時予は種々なる問題の解釋に苦しんで、痛く其の矛盾衝突に煩悶して居た。附記す、予は大阪

に於て、殆んど何から何まで西村天囚氏の世話になつた。氏が友人後輩に對する忠厚の心は多大の感化を予の一身に及ぼしたと思ふ。

猶ほ一つ書きたき事がある。予は此の放縱なる生活の間に、只だ一つ眞摯なる戀をした。予は或家の娘と相識つて、ほゞ其の將來を約して居た。然るに予の哀れなる身の上は、遂に彼れの父母の心を解くに足らなんだ。彼れは遂に病を得て死んだ。彼は歌を詠み、又俳句を善くした。予は敢て深く其の才を取るのでは無いが、予は別に彼に對して一片知己の感を抱かざるを得ぬ。當時、親戚知人の間に疎まれ盡したる落魄の予を、彼れ果して何の見る所あつて相許したる。予は三五の舊友に對すると同じく、彼に對して實に一片知己の感を抱かざるを得ぬ。

其の年の秋、予は田川大吉郎氏の招きに依つて、父を奉じて東京に上つた。

(五) 第二東京時代

明治廿八年秋、田川大吉郎氏が東京に實業新聞といふを始めた。實は改進黨の後身であつた。予は予の兄と共に會つて彼と相識つて居たので、招かれて其の編輯に従事する事となつた。厭なく大阪生活と、ヤット是で別れを告げた。

予は東京の新聞に従事する事の珍らしさに、非常の愉快を感じてやつて居たが、それでも一方には、放縱な癖を爲して、少しも改むる事が出来なんだ。

然しながら予は老たる父と共に何時まで下宿住居もして居られぬ。兎にかく早く家を持たねばならぬ、家を持つには妻を持たねばならぬ。予も色々考へた、友人も色々勧めて呉れた。當時讀賣新聞に居た堀紫山の妹をドウだと云ふ事になつた。予は「何でも善い、僕の家に来て年寄の世話をしてやらうと云ふ人なら、僕はドンナのでも満足するのだ」と友人に語つて居た。實に予はソウ思つた。どうせ今の世の中で善く知りあつて、思ひあつて、而して後に結婚すると云ふ様な事が出来るものではなし、況んや予の如き不自由の境遇に在る者が、選びだてをした所で何になるかと。そこで予は、苟くも一旦相約して夫妻とならば、先方の人物の如何に關せず、予は予の全心を擧げて之を愛すべしと決心した。それで話も漸く進んで、いよいよ近々に結婚する事となつた。

處が其間に二大事件が起つた。第一は實業新聞の滅亡。それに就ての事情や成行は、予の一身に關係が少いから何んにも書かぬが、兎にかく予は結婚を前に控へて浪人となつたのだ。予は又しても原稿料生活をやらねばならぬのだ。

次に廿九年の二月の末の或日、新富町の下宿屋の一室で、予の父が碁を打つて居て突然卒倒した。驚いて色々と介抱したが、遂に何の効も無かつた。予は實に茫然としてしまつた。而して囊中無一物であるのだ。それから友人の助に依つて漸く彼是の始末を爲し、折しも書きかけて居た或原稿を急に書きあげ、それを強いて讀賣新聞社に買つて貰ひなどして、どうやらこうやら葬式は濟ませた。

葬式の跡の数日、予は云ふに云はれぬ悲哀と苦痛とを感じた。七十に餘る老いたる父を何時までも下宿屋の一室に置いて、寂しい朝夕を送らせ、僅に一合ばかりの好きな寢酒をも思ふ様には成らせずして、そしてトウ／＼死なせてしまった。而も其の父は何と云つて居た。嫁になるべき人の寫眞を見ながら、『をれも此の分なら孫を見るまで生きて居るかも知れぬ』とて、猶ほ此の間に樂しき希望を繋いで居たのぢや無いか。そして天氣の好い暖い日に、椽側の日だまりに梅の鉢を置いて、其の梅の影の障子に映るのを樂しんで、そこに隣の猫の子の鈴の音が聞ゆれば、『それ又玉がやつて來た』と、そんな事さへ慰みにして、此の殺風景な下宿屋生活に、猶ほ且つ多少の趣味を見出して居たのぢや無いか。そして其の間に、予は猶ほ獨り俗惡なる興を追うて

遊びあるいて居たでは無いか。

初七日の夜には友人が大勢來て呉れた。其ころ予等の友人間に落葉社といふがあつて、俳句の會を催して居たが、何も本氣に俳句をやると思ふでもなく、只だ面白い、打とけた、睦まじい友人團體であつた。予は其時『落葉社、予の父を葬る』と何やらに書いた程であつた。初七日も亦た自然に此の落葉社の會合であつた。其の人々は永島永洲、杉田天涯、加藤眠柳、小林蹴月、上司小劍、堀紫山などの諸氏で、外に予の兄欠伸が居た。其の席上で書畫の合作が始まつて、永洲君は『眠雲』(予の父の號)の二字を題し、天涯君は『いよく御出發、芽出度存候』など、書き、其他詩歌俳句色々あつたが、予は筆を取つて『不孝兒』の三字を大書した。予は實にそんな事でも書かねば氣が濟まな

かつたのだ。

父の死後、予の貧は又甚だしく、家を借やうにも借りられぬ有様であつたが、友人相島勘次郎氏の世話に依り、目辻保五郎氏の築地の家に同居する事となつた。予は忽ちにして大家の主人の如くになつた。而して四月六日その家に於て結婚の式を挙げた。是も落葉社の結婚式といふ様なものであつた。妻の名は美知子、年は二十四歳であつた。生れは茨城縣下館町。

此の結婚は予の豫想して居たよりも好結果であつた。美知子は温良なる婦人であつた。予は不遇の文人といふ譯であつた。而して此の才子佳人は伉儷甚だ睦じくあつた。處が結婚後十日ばかりも經つと、モウ金は一文も無いのだ。新細君は早く既に其の晴衣の一枚を典するの

止むを得ざるに立至つた。それでも彼は存外平氣であつた。

其の月の末、福岡日々新聞の社長たる征矢野半彌君が、予に福岡に來ぬかと勧めて呉れた。新婚の浪人が此の申込を拒絶する事は出來ぬ。此際地方に行くのは餘り利益でもなく、且つ福岡の地位も餘り面白くは無かつたので、多少躊躇はしたものの、此の同郷の先輩たる征矢野君に對しては多少知己の感もあり、又久しぶり故郷を見舞ふ樂もあつて、ツマリ行く事に極めてしまつた。

それで五月の初、予等夫妻はサモ新婚旅行然として福岡に下つた。

(六) 福岡時代

福岡に着いて、予等新婚の夫婦は頗る平和なる小家庭を作つた。犬

あり、猫あり、花あり、庭あり、月給少しと雖も兎もかくも樂に暮せるのだ。而して此の平和なる家庭生活の間に於て、予の心には革命が起りかけた。

父母の死に依りて予が受けたる大打撃の跡は、此時更に烈しく痛みはじめた。過去七年の放縱なりし我が生活を思ふに、血に染み埃に塗れ、衣裂け髪亂れ、或は酔うて路傍に仆れ、或は怒つて人を罵るが如き我が姿の、ありくと目に見える心地がする。而して其の間に於て父母を苦め盡して遂に死に至らしめたる事を思へば、我ながら實に愛憎の盡きた、憎むべく、賤むべき、淺まし此の身であるのだ。予は白日獨り机に倚つて是等の感想に耽り、脊にも腋にも冷汗を流し盡して、遂に堪へずして歔歔流涕に沈み、妻の訝りを招いた事も幾度かあ

る。

予は漸く克己節制の趣味を感じて來た。酒を禁ずる、冷水浴を始めるといふ風で、放縱の性癖が段々と改まりかけて來た。論語、孟子は其頃の愛讀書であつた。内村鑑三君の文章も愛讀した。

新聞社に於ては、予は小説を書き、論文の様なものを書き、隨筆の様なものを書いた。文學と政治との間に於ける予の去就の迷は、此時にも甚だしく起つた。

兎かくする中、予は編輯局の折会上、新聞社を退く事になり、夫妻飄然として又東京に上つた。予の福岡行は、久しぶり故郷の山水に接したることと、征矢野君と交りを結び得たことと、それだけが愉快であつた。

(七) 防長回天史編輯時代

三十年春、予は又東京に上つて来て、再び原稿料生活をやる事と覺悟して居た。處が同郷の先輩たる縁故に依つて末松謙澄君を訪問したれば、幸ひにも防長回天史編輯を手傳はぬかと云ふ話があつた。此の防長回天史といふは、末松君が毛利公爵家から頼まれて、維新前後に於ける長州藩の歴史を編輯するのであつた。それで予の同役には、山路愛山、笹川臨風、齋藤清太郎等の諸氏があつた。

毛利家の編輯所は芝の白金にあつたので、予等も皆な其の近傍に住んで、東京とは云へ殆んど市中から隔絶して、二年の間、浮世離れた隠遁の生活を送つた。今より回顧するに、予の生涯に於て、此の二年

間ほど氣樂な時は無かつた。仕事は暇だし、金も兎にかく食へるだけは貰ふし、日々諸友人と來往しては、散歩する、飯を食ふ、馬鹿話をする、實にノンキ極る事であつた。

予は此の編輯所に於て、多少維新史の智識を得た事と、山路、齋藤、笹川等の諸友人より多くの益を得た事とを喜ぶが、猶ほ其外に嬉しきは、此の二年間の清き生活に、大阪以來の予の一身の汚れをば、やゝ洗ひ落した心地がする。尤も、幾ら洗つたとて、一旦染みこんだ汚れの痕が全く落ちるものではないが、然し其の班々たる汚點をば、洗ひざらし、洗ひざらし、して置けば、それで自分だけは幾らか心地が善くなるのだ。

此の時代の中に、予の一家に吉凶おのく一事件があつた。凶は予

の兄の死であつた。予の兄は前年來、故あつて其の妻と子とに別れ、再び塚姓に復して居たが、其の放縱にして檢束なき生活は、遂に肺結核を其身に招くに至つた。而して明治卅年八月十日、三十三歳を以て予の家に長逝した。彼は予の兄であると同時に、又予の文學の師であつた、而して又予の最親の友の一人であつた。彼は予の如き磊々然たる小丈夫にあらざして、實に悠悠然たる超凡脱俗の高士であつた。別項なる彼の詩歌と文章とは善く彼の人物性癖を示して居る。

次に吉事と云ふは、予の兒不二彦の生れた事である。予は斯くて父となり、美知子は斯くて母となつた。『おじ山に向ひ立ちてもふさはしき、男の子になれと祈るなりけり』など、親心に云つた事もある。予の生活も亦た改まらざるを得ないのだ。

毛利家編輯所の有がたかつた事が今一つある。それは二個年の約束期限の終つた時、金一千圓のお禮を買つた事である。貧乏生活に慣れた文人に取つては、千圓は實に大金である。細君の喜び知るべき也。予は此時始めて借金を返す事の如何に愉快なるかを覺つた。

予は此の時代に於て、少しく政治、經濟、法律の書を読んだ。

(八) 萬朝報時代

卅二年七月、予は萬朝報の記者となつた。當分は新參で何にも出来なんだ。

予の妻は此の年の春より胃病を起して居たが、夏に入つて漸く衰弱の模様があるので、子供を連れて暫く鹽原の温泉に行つた。然しながら

ら、病氣は急に全快しさらもなし、何時まで温泉に居る譯にも行かず、さりとして東京の市中には住みたくないと言ふので、そこで大森の海岸の白姓家を借りて、當分そこに住む事となつた。

處が大森に引越すと間もなく、或日不二彦が急に引きつけて人事不省となつた。子供には善くある奴の、腦膜炎を起したのである。彼れの頭は福助の如く大きくて、平生から其の氣道があつたのだが、扱となつて見ると今更に狼狽した。親の病氣も苦しいものだが、子の病氣も辛いものだ。幸ひに金は少しあるし、東京病院に入院させて、先づ盡せるだけの手は盡したが、一月たち二月たちて、猶ほ依然として昏睡の状態を保つて居る。牛乳だけは口に入れてやれば善く飲みこむ。そして折々は悲しげな顔をしてワアツと泣きだす。そして手や

足は毎日々々見る度に瘦せほそる。親心には眞に見るに忍びぬ心地がする。

到底回復の見込はなし、何時まで病院に置いても金の掛るばかりで仕方が無いので、又家に連れて歸つて介抱した。看護婦は雇ふ、肉汁は拵へる、金は矢張り中々かゝる。斯くて又二ヶ月ばかりして、十二月の末、不二彦は遂に死んだ。千圓の金はホトボリも無くなつてしまつた。

不二彦の病氣は予をして又少しく酒を飲ましめた。然しながら彼れの死は予をして全く煙草を禁せしめた。是より先、予は屢々禁烟を企て、屢々失敗して居たが、彼れの死は遂に予をして最後の勝利を得せしめた。先づ母を失ひ、次の父を失ひ、次に又兄を失ひ、而して今茲

に子を失へる予は、種々の感慨、實に禁ずること能はざるものがあつた。

不二彦の死が彼れの母に及ぼした影響は、又更に甚だしきものがあつた。子は死ぬる、金は無くなる、自分の健康は衰へる、美知子は殆んど失望を極めて居た。予は彼れの氣を轉せしめんが爲に、大森の家を引拂つて高輪に移り住んだ。

三十三年は先づ無事に過ぎた。予は北清事件に就て芝罘より天津に行つた。美知子の健康は更に漸く衰へた。

三十四年、美知子の健康は頗る怪しくなつて來た。予は切に彼に勸めて、鎌倉大佛前に小ぢ家を借り、そこに氣永く養生させる事にした。而して予は芝三島町に二階借の身となつた。美知子の病氣は鎌倉病院

にて診察の結果、肺炎加答留と定まつた。予は今更驚きもしなかつた。美知子も最初こそは力も落し、氣も挫けて居たが、暫くたちて後は病氣にも慣れて、靜かに保養するを樂むまでになつた。予は一週間に一度づゝ鎌倉を音づれて、或は海岸に、或は野山に、美知子と犬と打連れて散歩するが常であつた。病勢はさまで急激に進むでもなし。予等夫妻の鎌倉生活は存外愉快なものであつた。當時予が美知子に與へた手紙(後、家庭雜誌に載せたるもの)二三を左に記す。

岡本さんが叱つた筈、氣をつけるが善い。養生が足らずに悪くなつては申譯があるまいがな。二三日中に行きたいと思つて居るけれど、まだ分らぬ。(中 畧)

序に少し説教をしよう。人には皆それぐの職分がある。新聞を書く事を職分にして居る者もある、魚を捕

る事を職分にして居る者もある、人の病氣を直す事を職分にして居る者もある、按摩
を取る事を職分にして居る者もある、子を産み子を育てる事を職分にして居る者もあ
る。

お前の職分は何であらうか。女であるから子を産み子を育てる職分がある。然しそ
れはやりそこなつた。今ではモウ出来さうもない。其の外には何があるか。家政を整へる
職分がある。然しそれも今は殆んど出来ぬ。其の外には何があるか。夫を助ける職分が
ある。利彦は常にお前の助を得ねばならぬ。病氣だから助ける事が出来ぬと云ふかも知れ
ぬが、決してそうで無い。幾ら病氣でも助ける事は出来る。お前が善良な心を養つて居
て利彦が不了簡を起さうとした時にそれを諫める、それは即ち助けるのでは無いか。
お前が強い心を持つて居て、利彦が弱い氣を出した時にそれを勵ます、それは即ち助ける
のでは無いか。お前が機嫌よくして居て、利彦が世間のうるさ、に氣を疲らして行く度に
それを慰める、それは即ち助けるのでは無いか。慰める、勵ます、諫める、此の三つは妻
が夫に對して盡すべき職分である。夫にたよる、夫にあまへる、夫にすがる、それだけ
では只だ可愛らしいと云ふまで、少しも尊敬するには足らぬ。況んや、夫に迷惑をかけ

る、夫に不快を與へる、夫を惡に導くと云ふ様では、婦人の徳は少しも無い。人の妻たる
婦人は弱い事ばかり考へずに、夫を慰める、夫を勵ます、夫を諫めると云ふだけの氣概が
無ければならぬ。若しそこもとがそれだけの氣概を持つて呉れるならば、利彦は今より少
しゑらくなるに違ひない。若しそれだけの氣概があるならば、幾ら病氣でも、よしや死に
かゝつて居ても、其の夫の爲には尊敬すべき有がたい妻で、一日でも永く生きて居て、自
分を助けて呉れるようにと祈るであらう。

「叱られても戀しい」と云はれるのは嬉しいが、今一步進めて、其戀しい人をゑらくなす
爲に一工夫して貰ひたいものだ。利彦をゑらくするのも阿呆にするのも半分はお前の力に
あるのだ。

モウ是だけにして置かう。

五日午後一時半

今日は好天氣

おみちさま

人の命は人の力でどうする事も出来るものでは無い。病人が先に死ぬるやら、丈夫な者

が先に死ぬるやら、分りはせぬ。命の事は神に任せて置くより外は無。然し神に任せる前に人の力で出来るだけの事はせねばならぬ。そこで醫者にもかゝる、薬も飲む、滋養物も食ふ、運動もする、用心もする、總て出来るだけの事をして置いて、それから先は神に任せる。

實は病氣ばかりでは無い。何事もその通り、自分の善いと思ふ事をして置いて、それから先は神の指圖を待つ。自分の善いと思ふ事をしておけば、跡でどんな事があらうとも少しも心苦しい事は無い。よしどんな辛い事があらうとも、よしどんな悲しい事があらうとも、それも何かの神のお指圖と思へばジツとして心よくそれに従ふより外は無。そう云ふ風に考へて見れば、辛い中にも、悲しい中にも、又味ひの出る事がある。

人間は安心といふ事が一番で、安心のある者は騒ぎもせず、怨みもせず、悲しみもせず、怒りもせぬ。安心とは自分が爲すべきだけの事をして、其の跡を神に任せた時の心持である。昔の武士は忠義といふ事を守つて、それで十分に安心して、平氣で切腹までしたものだ。不肖ながら利彦でも、守るだけの事は守つて、そこに聊か安心して、平氣で貧乏や艱難をこらへる位な事はする積り。兼て落ちついて騒がぬ人と云はれて居るお美知さんなどは、

此の安心といふ事をよく工夫して貰ひたい。

自分の住んで居る家を奇麗に片づけて、ふきそりじも十分に、庭も掃いて表も掃いて、衣類も清潔にして、身體の垢も善く落して、出来るだけ養生をして、食べられるだけの物を食べて、髪や容にも気をつけて、言葉を慎み、行ひを慎み、人に會つて機嫌を善くし、人の爲に親切に考へ、我儘を云はず、勝手な事をせず、それだけにしたならば必ず安心が出来るに違ひない。それだけにして若し人に悪く云はれうとも、それは自分のセイでないから仕方がない。それだけにして若し不仕合せな事にならうとも、それは自然の廻り合せだから仕方がない。それだけにして若し病氣が悪くならうとも、それは此の身の免れられぬ運命だから仕方がない。いづれにしても自分が招いたのでないから、只だ神のお指圖に黙つて従ふより外はない。神は必ず悪しからぬやうに我を導きたまふであらう。斯う思ふのが即ち安心といふものだ。斯う思つて安心して、氣を樂に持つて居れば、人間が上品になつて、柔和になつて、體も自然すこやかになつて来るに違ひない。モウよそう。鏡を見て自分の顔が善く見える時は、イツも心の正しい時だ。心を正しくせねば顔も善くならぬ。顔が善くなる様で無ければ體も善くならぬ。何にしても心を正しく持つが第一

番の事だ。お前か鏡を見て顔色が善かつたと云ふから嬉しくてならぬ。猶ほ其上にも心を正しくする爲にと思つて、計らず長談義をやつた。昨夜は當直で、おそくまで社に居つた。歸り道にビールを一ぱい飲んで、善い心持でぶらりと歩いて戻つて來た。

夜九時半

とし彦

おみちさま

三十四年五月十日、社會民主黨の宣言が發表せられた。安部磯雄、片山潜、木下尙江、河上清、西川光二郎、幸徳傳次郎の六氏が其の創立者であつた。予は當時まだ明白なる社會主義者となつて居らなんだ。同じ年の七月に、萬朝報を中心としたる理想團が起された。内村鑑三、黒岩周六、幸徳傳次郎、山縣五十雄、斯波貞吉、圓城寺清等の諸氏と共に、予も亦た其の發起人に數へられて居た。而して其時、予は既に

社會主義者たることを告白して居た。

茲に少しく予の思想の變遷を云へば、予は先づ生命なき文學に飽いて、漸く政治に向つて進んで來た。然しながら、主義もなく道徳もなま今日眼前の政治は、到底予をして満足せしむる事が出來なんだ。それから一方には、予は漸く彼の保守主義、日本主義の感化より脱して、進歩主義、世界主義に向つて進んで來た。而して遂に社會主義に到達した。

社會主義に到達するの前、予は先づ漠然として社會改良の諸問題に觸れた。予が『家庭の新風味』と題する小著述を出したのは此時である。萬朝報紙上に現はれた予の文字にも、此の社會改良問題より社會主義に至るの順路が、明かに現はれて居る筈である。『家庭の新風味』に

就ては、予は福澤先生より多大の感化を受けた事を明言して置く。
 三十五年の春、予等の鎌倉生活は經濟上より到底維持しきれなくなつた。鎌倉生活は予に取りて可也重大なる經濟上の負擔で、『家庭の新風味』を書いたのも、半は其の維持の爲であつた。當時予は思つて居た。予は暫く妻を養ふ爲に全身を捧げて働いても善い。どうせ三年か五年かの彼れの餘命だ。予に野心がありとするならば、彼れの死後に於て満足させれば善い。予に國家社會に對する任務がありとするならば、それも彼れの死後に於て果せば善い。彼れの在る間は彼れの爲に此の身を賣つても善いでは無い乎と。然しながら鎌倉生活は餘りに不便で、餘りに高價であるので、それに美知子の健康も稍や回復したので、遂に東京の郊外なる淀橋町角筈に引揚げた。そして予はこゝより

自轉車に乗つて朝報社に通ひながら、一方には猶ほ無害無益なる小著述に従事して居た。

處が、意外にも予の妻は妊娠して、三十六年の一月に女兒を分娩した。名は眞柄とつけた。其の年の四月に予は『家庭雜誌』を出しはじめた。是も一女兒を分娩した様なものだ。予は此の雜誌に於て、『家庭の新風味』に依つて得たる予の讀者に對し、徐ろに社會主義を説く積りであつた。

此頃より、予の社會主義に對する熱心は急に其度を強めて來た。妻の病を養はせんが爲には、予の一身の野心をも、予の社會に對する任務をも、暫く棄て、顧みないと思つて居たものが、今度は妻の健康も幸福も犠牲にして、敢て此の主義の爲に働かうと云ふ事になつた。予

の妻も亦た寧ろそれに満足して居た。
 其の年の秋に至つて、萬朝報社内には非戦論と主戦論との衝突があつた。予は幸徳秋水君と共に社會主義者としての非戦論を取つて退社した。内村鑑二君も亦た基督教信者としての非戦論を取つて同時に退社した。是は予の生涯に於ける一大段落であつた。

(九) 平民社時代

是より以後の予の生活は、『平民新聞』及び『家庭雜誌』の紙上に詳かに記されてある。先づ平民新聞第一號の『發行情形』を轉載する。

『我々二人(秋水、枯川)が朝報社を退いたのは十月の十日であつた。其の二日前の八日は露國の滿洲撤兵第三期日と云ふので、主戦論

者は甚だしく其の鼻息を荒くし、萬朝報も亦た始めて其日の紙上に主戦論の態度を明白にした。其夜我が社會主義協會は神田の青年會館に非戦論演說會を開いた。我々二人は其夜退社の相談を定めて、翌九日の午後、其意を社長黒岩周六氏に通じた。そして十日の午後いよいよ退社が聞届けられて、十二日の朝報紙上に退社の辭が發表せられた。其の十二日の夜、朝報社の諸君が我々の爲に築地の精養軒に送別會を開いて呉れた。それが朝報社との最後のお別れであつた。十三日朝、二人秋水の家で會して始めて將來の事を相談した。『それ迄の銘々の考へでは、秋水は兎も角もして新に一つの雜誌を起す、枯川は従來持つて居る家庭雜誌を何とか擴張するつもりであつたが、二人相對して更に考へあはせて見るに、此際別々の仕事をするの

はドウしても面白くない。そこで共同事業の相談が二人の間に成立つた。それには月一回や二回の雑誌では少し物足らぬ心地がするので、結局週刊新聞といふ事になつた。そして枯川は家庭雑誌の編輯を他の人(西村渚山氏)に托する事となつた。』

『週刊新聞発行の計画は是れで立つた様なものであるが、扱其の資本はどうするか。扶持に離れた我々が眼前の米薪の資にすら窮するに、民居士の友人たる小島龍太郎氏が我々の事業を喜んで、政府に納める保証金だけは出してやらうと云ふ。先づそれに力を得て、其上の創業費は二人が七處借をして、も拵へようとい決して、十四、十五の兩日を種々の劃策と空想とに費した。』

『十五日の夜には、社會主義協會の人々が我々の爲に同情會といふを催して呉れた。それにも我々は一層の力を得た。又其の同じ夜に、其席に列して居た加藤時次郎氏が、創業費として差當り必要なだけ貸してやらうと云ひだして呉れた。我々の計画は茲に始めて確立した。

それで十六日から着々として創業の事務を進行させた。(下略)斯くて十一月十五日に平民新聞第一號を發行した。予等の知人中には、平民新聞の生命を約二個月と見積つて、予等の無謀を憐んで呉れた人もあつたと聞いたが、幸ひにも其の豫言は當らなんだ。平民新聞は兎にかく元氣よく成長した。

予は此の平民新聞を起して以來、始めて本當に働いて見た、始めて我が十分の力を出して見た。予の家の生活は固より苦しくなつたが、

予の心の愉快と満足とは喩へるに物が無い程であつた。

三十七年の四月廿一日、予は巢鴨の監獄に入つた、其の事は別項の『獄中生活』に委しく書いてある。出獄の時の模様は、平民新聞第三十三號に、予自ら左の如く記した。

『六月二十日午前五時、秋水の謂はゆる「鬼が島の城門のやうな」巢鴨監獄の大鐵門は、儼然として其の鐵扉を開き、身長僅かに五尺一寸の予を、物々しげに此の社會に吐き出した。

『久しぶりの洋服の着でゝる甚だ變にて、左の手に重たき本包を提げ體を右に傾けながらキヨロ／＼として立ちたる予は、此の早朝の涼氣の中に、浮びて動かんとするが如き滿目の綠に對し、先づ無限の愉快を感じた。

『漸く二三歩を運ぶ時、友人川村氏の獨り彼方より來るに遭うた。相見て一笑し、氏に導かれて茶店に入つた。あゝあゝ、是で久しぶり天下晴れて話が出来た。

『間もなく杉村縦横君が自轉車を走らせて來て呉れた。續いては筒袖の木下君、大光頭の齋藤君などを始として、平民社の諸君、社會主義協會の諸君が二十人ばかり押しよせた。最後に予の女兒眞柄が、一年五ヶ月の覺束なき足取にて、隣家のチバさんなる福田英子氏と、親戚のチヂさんなる小林助市氏とに兩手を引かれながらやつて來た。予は始めて彼れが地上を歩むを見た。而して彼れは既に全く予を見忘れて居た。

『斯く親しき顔が揃うて見れば、其中に秋水の一人を缺く事が、予に

取つては非常の心さびしさであつた。彼れは其の病床より人に托して一書を予に寄せた。「早く歸つて僕のいくちなさを笑つて呉れ」とある。笑ふべき乎、泣くべき乎、一人は閑殺せられ、一人は忙殺せられ、而して二個月後の結果が即ち是であるのだ。

「予はそれより諸友人に擁せられて野と畑との縁を分け、朝風に吹かれながら池袋の停車場に來た。プラットホームに立ちて監獄を顧み指點して諸友人と語る時、何とはなしに深き勝利の感の胸中に湧くを覺えた。

「池袋、目白、新宿、此の短き汽車の間をも無駄にせじとて、齋藤君などは平民新聞のチラシを乗客に配つて居た。

「新宿の停車場に降れば、幸徳夫人が走り寄つて予を迎へて呉れた。

停車場より予の家まで僅に四五町、其道が妙に珍らしく感じられる。加藤眠柳君から獄中に寄せられた俳句に「君知るや既に若葉が青葉した」とあつたが即ちそれだ。我家に入れば又我家が妙に珍らしく感じられる。門より庭に入りて立てば、木々の緑が滴るばかり濃く見えるのだもの。

「予の病妻は予の好める豆飯を炊いて待つて居た。予は彼れの如何に瘦せたるかを見たる後、靴を脱せずして直ちに秋水の家を訪うた。秋水は其の病床に半ば身を起して予の手を握つた。彼れは予の妻と共に甚だしく瘦せて居るのである。

「行數の都合もあるからマア是だけにして置かう。歌の様なものが一
首出來て居た。

いつしかに桐の花咲き花散りて

葉かげ涼しく我れ獄を出づ

監獄の中で風情のある木は桐ばかりであつたから。』

予の出獄の後、二ヶ月ばかりにして、予の妻美知子は死んだ。是に就ては、家庭雑誌第二卷第九號に、予自ら左の如く記した。

『去る頃、予が平民新聞の筆禍に依つて巢鴨監獄に入つて居た時、予は毎日の朝夕に角筭の我家を想望して、獨り窺かに獄中生活の無聊を慰めて居た。其時、予の心に畫かれたる我家は、先づ椽側の障子が開けはなされて、華やかな朝日が一面にさしてこんで、其の暖かき椽側に予の女兒と五足の猫の子とが這ひあるいて、予の病みたる妻は椽側に腰かけて居るか、庭をそゞろあるいて居るか、笑顔の善き彼の女中は

庭の松の木から栢榴の木に竿をかけたして干物でもして居るか、そして其の干物の下には、二葉君から種を貰つて大騒ぎをして育てあげた彼の草花が、モウ蓄みそめたか、咲きそめたか、と云ふ様な光景であつた。

『それが今はた如何の状ぞ。朝日はいつもの通り輝いて居るであらうが、其の光は徒らに閉め切つた雨戸を照して居るであらう。花園は狼藉に折れ亂れて、其の間に紫苑などが纒かに咲き残つて居るでもあらうか。猫の子は、一足は死に、一足は迷ひ、三足は嫁に行つて、残つた親猫は暫く此の空家を守つた後、今ではお隣りの福田氏に飼はれて居るとの事。予の妻は八月の末から神奈川の加藤病院に入つて、九月の十八日に死んでしまつた。予の女兒は其前から女中に伴はれて小田

原に行つて居る。予は角筈の家をたゞんで平民社に住み込んで居る。
 「予は之を悲まざるを得ぬ、之に對して哀を感ぜざるを得ぬ。然しな
 がら此の悲哀の中には多くの趣味と大いなる教訓とが存して居る。予
 は平民新聞に『晩夏初秋の感』と題する一文を載せて左の如く云つた。
 此の際に於ける予の感想は是に盡きて居る。

△予の生涯の青春は疎狂放縱の間に過ぎ去つた。予の父母の死は正
 に其の一段落を劃して居る。予の生涯の盛夏は平凡なる家庭生活の
 間に過ぎ去つた。予の妻の死は正に其の一段落を劃して居る。而し
 て今や明治卅七年八月下旬、予年三十五歳、漸く茲に晩夏初秋の感
 を懷くに至つた。然れども「一年の好景、橙黄橘綠の時に在り」と
 せば、予の生涯も亦た是より多少の美を成し得るかも知れぬ。

而して予の死は最後に其の大段落を劃するであらう。

△「夫をして成るべく多く世の爲に働かしめるのが、此際に於ける御
 身の務にして又名譽であると思へとは、予が久しく病中の妻を訪ひ
 得ぬ時、手紙を以て彼れに諭した言葉である。又「同情ある人々が
 御身を助けて斯く安らかに其の病を養はしめるのは、即ち予の一身
 を自由にして、成るべく多く世の爲に働かしめんが爲であるのだ」
 とは、予が病重き妻を残して平民社に向ふ時、靜かに彼れに對して
 告げた言葉である。而して彼れも亦た稍や予の意を解して、聊か守
 る所もあつたかと思ふ。されば妻の遂に逝きたる時「予は之を以て
 予の運動を自由ならしむる天意と解しておく」と、二三の友人に書
 き送つた。

△予は最早、骨肉の死に遭うて酒を被つて鬱を遣ると云ふが如き、客氣ある疎狂の人では無い。又、最愛の永別を悲んで惆悵として自ら傷ると云ふが如き、單純なる家庭の人でも無い。晩夏初秋の予には、あらゆる境遇に處して天命を樂むと云ふが如き、やゝ高尚な趣味も少しは生じて來た。

『次に予の女兒の處分は予の妻の死より生じたる最も困難の事件である。然しながら是れとても亦、予に於ては只自然の運命に従ふまでの事で、敢て之が爲に甚だしき焦心苦慮をする譯では無い。只今の處では、忠實にして伶俐なる一婦人(前記の女中)が、予の爲に、予の女兒の爲に、暫く其の一身を捧げて親切に世話して呉れる。行々の處分に就ては、此の孤兒を預つてやらうと申込んで呉れた人が四五人もある。

予の姪も亦た切に之を望んで來た。予の從姉も亦た熱心に之を予に説いた。予は未だ何れとも決しかねて居るが、何れにせよ、予は只だ最も適當と思はるゝ方法を取つて、自然の成行に任せるだけの事である。

『次に財政の事。予は是れに就ても亦、此際大いに學び得た所がある。去年平民社を起して以來、予の家の支出は常に其の收入に越えて居た。而も收入を増さんが爲に、予は曾て何等の運動をした事が無い。予の全力は平民社の事業に注がれて居た。そして平民社から貰ふだけの金で、只やれるだけやつて行く。それ以上の金を得ようとも思はず、それ以上の事をしようとも思はず、貧乏の間にも心は誠に氣樂であつた。然るに巢鴨行といふ事件が突然として起つた。あの時には随分困

つた事情もあつたが、それもマア仕方が無い、成るやうに成るだらうと、強いてそれを防ぐ策も講せず、只だ自轉車を賣飛ばして多少の息をついたのみで、跡は平民社にお頼み申して出かけて行つた。所が予の窮を憐む篤志の士が、思ひもかけず多少の見舞金を寄せられたので、お蔭で予の妻は差しあたり小使に不自由をせず済んだ。然るに又或日の事、一人の匿名の高士が使の者を予の家に遣はして、一封の金を予の妻に與へた。予の妻は跡で其の封を開いて驚いた。百圓といふ（我々には）大金が入つて居たのである。此の百圓が自然に今年前半の予の家の財政を補うた。それより兎かくする中に予の妻の病が重つて來た。丁度同時に子供までが腹を悪くして下痢を始めた。何かにつけて支出の嵩むは無論である。予は自ら如何ともする事が出来なくなつた。

暇さへあるならナグリ書の内容稿でも拵へて、それを賣るといふ位な便宜はあるが、平民社に於ける予の一身にはソナ餘裕が無い。又そんな金も受け仕事をやる氣にもならぬ。そこで少々當惑して居ると、又そこに自然の道が開けて來た。即ち、社會主義の同志にして醫士なる加藤時次郎氏が、予の妻をば神奈川の分院に、予の女兒をば小田原の別荘に、それごとく預かつて呉れる事になつた。そこで予は前記の如く家をたゝんで平民社に住みこんだ次第である。それより二十日の後、予の妻は死んだ。葬式前後の費用は到底予の負擔し得る所で無い。然るに予の友人と同志と及び未だ曾て相識らざる幾多の同情者とは、少からざる香奠を予に送つて呉れた。予は何の苦もなく此の一件を片づけ得た。此に於て予は考へた。人は之を乞食の生活と笑ふか知れぬ

が、予は此の乞食の生活に安んずるが善いでは無いか。月給の多寡に氣をあせつたり、貯金や内職に苦勞をしたりして、そして獨立だの獨立だのと威張らうより、人の親切と自然の成行とに打ちもたれて、流れに從つて行く方が、何ほど氣樂で、何ほど安心であるか知れぬ。予は兎もかくも平民社から幾らかの月給を貰つて居る。予と予の女兒との生活はそれで以て支へられる。予は只だ平民社の事業と予の主義との爲に、働き得るだけ働けばそれで善いのだ。予は斯くの如く一身一家の財政に於て全然他力主義を取る事となつた。

『最後に予は、再婚をするなと予に勸めて呉れた二三の友人に答へねばならぬ。予は婦人に對しても、夫に死に別れた後の獨身生活を強いぬ者であるが故に、予自らとしても亦、妻に死に別れた後の獨身生

活を自慢らしく高言する心は無。又實際に於て、將來予の心が如何様に變じ、如何様に動くまいとも限らぬ。こんな事を前以て約束するほど覺束ない事は無い。然しながら又、現在の予の感情としては、獨身生活も亦た甚だ面白いと思ふ。「晩夏初秋の感」の一節に左の如く記して置いた。

△予は多くの人々から見舞を受けた、予は深く感謝する。然しながら諸君願はくば安んせよ。予は平民社に起臥して未だ曾て孤獨寂寥の感を起した事が無い。初七日の逮夜に、花を飾つた佛前に於て、清田老媪が拵へて呉れた田舎流の牡丹餅を、社中の諸豪傑が寄つてたかつて食ひながらの、放談高笑を見る時など、こんな愉快が又あるかと思はれた。

『畢竟、獨身生活は小家庭を出で、大家庭に入るのである。予が予の妻と女兒とを以て組織して居た小家庭は滅亡したが、予は更に平民社と云ふ稍や大いなる新家庭を得たのである。否、平民社よりも更に大いなる、友人、知己、同志と云ふ一團の暖雲を新家庭として得たのである。家庭と云ふ言葉を廣義に解釋すれば、安住處とでも云ふべきであらう。予は此の社會全體を以て我が家庭とし、我が安住處とするに至らんことを希望する者である。』

『猶ほ二三の事を附記して置く。予は今の葬式が、勉めて其の行列を飾り、之を人に示さんが爲に態とらしく大道をねりあるくを憎む者である。故に予の妻の葬式には、一切送葬の行列を廢し、只だ午前八時より某寺院に於て之を執行した。而して予は予の妻の遺骨を擁し、』

人力車に乗つて之に赴いたのである。次に香奠に對する返禮の事。眞逆に満頭を配るにも忍びず、さりとして金何十圓、慈善事業に寄附致しましたと廣告するにも忍びず、只だ謹んで有がたく頂戴いたしました。最後に猶ほ一つ、墓の事が問題として残つて居るが、是に對してはマダ予の考が定まつて居らぬので、只だ問題として世に提供して置く。』

(墓の事に就ては、其の後も色々考へた結果、今の木標の朽ちるが儘に任せる事にした。そして石の墓を作る代りに、此の紙の墓を作つたのである。)

其後一年、予は平民社に起臥して居る。予の女兒眞柄は静岡なる予の従姉(篠田良子)の手に育てられて、篠田氏夫妻を父母と呼び、予の事を「マア坊のチヂさん」と呼んで、極めて幸福に生活して居る。今年に入つてより、平民新聞は『直言』に變じた。そして幸徳君と西川君と

は、お次の番として巢鴨の監獄に行つた。幸徳君は七月の末に歸つて来た。西川君はまだ残つて居る。而して予の妻の一週忌は来た。予は其の紀念として此の書を作つた。あゝ美知子は實に温良の婦人であつた。彼れには才も學も識も無かつた。然しながら彼れには多少の氣品があつた。予は彼れの氣品に打たれた事を幾度も感じた。彼れは予の爲に確に善き妻であつた。

* * * * *

あゝ是で胸がスツとした。言ひたい事を言つてしまつた。書きたい事を書いてしまつた。包んで見ても、開いて見ても、予は只だ是だけの男であるのだ。遺傳に刺激せられ、境遇に壓迫せられ、周圍に引張られ、運命に導かれ、種々雑多なる感化影響を受けた結果が、即ち斯

くの如き『予の半生』であるのだ。更に之を喩ふれば、溪間に湧いた苔清水が、或は泥田の上を流れ、或は小石の間を流れ、或は雨水に其量を増され、或は毒水に其質を汚され、或は岩に激して沫となり、或は崖に遭ひて瀧となり、十里、二十里、三十里、流れくつて行くに似て居る。あゝ此の先は何處に流れて、一層澄むやら濁るやら、如何なる海に入る事やら。

(予は此の書を作り終ると同時に、更に新生涯に入らんとして居る。)

半生の墓終

斯波貞吉編述 (新刊)

小品知識と趣味
千題

袖珍 (美本) 定價卅五錢
郵税不要

科學、哲學、宗教、政事、文學、地理、統計、現代最新の知識は收めて此中に在り、滑稽、諧謔、頓才、諷刺、世界最大の趣味は集めて此中に在り収集せるもの『小品千題』趣味の泉は汲めども涸れず、知識の倉は取れども盡きず、曾て是れ萬朝報『世界各國欄』が數年に亘て載せたるもの、今や弊房著者の精選を請ひて一美冊と爲し敢て讀書子日夕の愛玩に供す。

發行所 東京市本郷區根津 宮永町三十六番地 平民書房

週刊直言

●廿世紀の大勢力たる社會主義の思潮に接し日露戦争が持來せる社會問題の真相を知らんと欲する者は本紙を讀め、本紙は日本社會黨唯一の中央機關新聞なり ●見本郵券三錢五厘送れ

●毎週、日曜日發行
●一部三錢五厘
●廿部前金六十五錢
●郵税不要

發賣所 東京市麴町區 有樂町三の一 平民社

木下尚江著 (第九版)

小説の柱 定價卅五錢 郵税不要

同 君著 (第五版)

小説人の自白(編上) 定價卅五錢 郵税不要

同 君著 (第四版)

小説人の自白(編中) 定價卅五錢 郵税不要

塚利彦著 (第四版)

百年の新社會 定價五錢 郵税二錢

同人著 (第二版)

理想郷 定價五錢 郵税二錢

幸徳秋水著 (再版)

社會民主黨建設者ラサール 定價拾五錢 郵税不要

西川光次郎著 (再版)

富の壓制 定價十錢 郵税二錢

安部磯雄著 (再版)

地上の理想國 西 定價十五錢 郵税不要

西川光次郎著 (再版)

ジョン・バーンス 定價五錢 郵税二錢

石川旭山著 (三版)

消費組合の話 定價十二錢 郵税不要

發行所

東京市麹町區有樂町 電話(本局)三二六二

平民社

著川枯塚

家庭の新風味

(全六冊合本 * 定價壹圓 * 郵便八錢)

『東京朝日新聞』最も通俗に最も平易に

最も多趣味に書かれたり男女共に一讀せば必ず大に得る所あらん

『大阪朝日新聞』孰れも有益なる文字にあらざるは妻たり娘たる親たり夫たる皆讀むべし而を實地に應用せば理想的ホームを作り出すこと致して難事に非ざるべし

『毎日新聞』例の通り美しき文字に著者の謹んで世に娘達細君達舅姑達に勧む

『中央新聞』趣味ある筆もて言文一致體に縦談横説せり 文字平易

文章簡潔思想健全 世の紳士妙齡の淑女に姑も讀み嫁も讀み良人も讀み令嬢も讀んで

『報知新聞』毫も不快を感じぬのみか成程如何にもさうだと反省せしむるやうに出來て居る筆致の親切と意見の確實と今日の家庭に最も適切なる指導

とは世間幾多此種の書ありと雖も此書の右に出づる者なし

東京駒込西片町十番地

内外出版協會

家 庭 文 學

第一編

枯 川 隨 筆

(ふりかな附)
定價貳拾錢
郵 稅 共

『日本人』 枯川の文、輕快にして清淡、叙事文に於て最も其妙を觀る。本篇中「御殿場を觀るの記」のごとき、澹々たる輕筆、實に叙事文の名品たるを失はず

『東京朝日新聞』 短篇小説の面白きものあり、家庭の讀物としては眞に恰當なるべし

『中央公論』 簡明にして難澁の文字なし、短篇小説あり、紀行あり、所感あり、翻譯ものありて、とりぐに趣味多し

出版元

東京駒込西
片町十番地

内外出版協會

編輯川 枯 塚

家 庭 夜 話

(錢拾稅郵*圓壹金價定)

(時事新報) 眞趣味あり教訓る善き話にして
家庭の讀物に適せり 著者が此種の書を選びて荒
陽光を與へんとする用意多とする 平易通俗の物語
に足る。敢て原書の字句を拾はず 苦心察するに
にして兒童にも讀み得る 其 餘りあり

(大阪朝日新聞) 斯良小説の平易に紹介
は、無趣味なる家庭のた賀すべき事なり

(讀賣新聞) 著者家庭の新風味 六冊を著新
社會に於て新家庭の模範を示せしが今またこの善
き家庭に善き讀物 筆は最もこの種の 譯文に
妙なるを 覺ゆ

(報知新聞) 一日の勤勞を了一家團樂の
座にこの清健にして趣味ある讀書の行はれんこと
種の 毎日新聞) 流麗にして雅趣に富める筆 歡迎を
くるならん 路必ず世の

東京駒込西
片町十番地
元 版
内外出版協會

